盡七日忌

廿九日、不參、淡州屋形煎點、南陽院殿斷七忌辰、當日來月初四日也、探支散筵於今日、拈香常在光寺蘭坡和尚、陞座鹿苑院惟明和尚、禪客鹿苑侍眞承英首座、維那永觀西堂、

百ケ日忌常喜軒ニテ齋會

八月廿六日、不參、今日淡州卒哭之忌辰也、於常喜軒齋會、以爲良心禪門有小作善辭之、闔院衆半齋、齋會設浴、

世系

〔系圖纂要〕六十五清和源氏十四　細川

持親

成春　彦四郎、淡路守、隱岐守、淡路守護、文明十七年五ノ十五卒、南陽院成伯榮公、

尚春

〔細川系圖〕

持親

成春　彦四郎、淡路守、寶德三年、大樹義政公御的始、爲御相手、文明十二年、爲御供衆、應仁元年五月、同氏勝元與山名宗全相戰之時、率分國勢三千餘騎應勝元、

將軍供衆ニ加ヘラル

尚春

〔春浦和尚金口說〕南陽院殿前淡州太守成伯道榮大禪定門肖像

宗照ノ畫像贊

扶社稷、而奉主以義、鎮淡州、而臨民以慈、所以門葉永々、□印纍々、論射藝則齊由基鏃、說軍事則攙武侯旗、髮櫛苗蘇、曩祖之兵術也、刄迎縷解、弊政之革釐也懿矣、忠功兮走卒皆誦、偉哉、威名兮草木咸知、興持親家幹父蠱、創南陽刹固祖基、觝排王常侍之履踐、辨得裴相國之機宜、嗄也太奇々々々、至於靑寥々白的々之處、非所描畫豈假贊辭、畢竟作麼生、咄々々力囚希、江月照松風吹、

文明十七稔龍集旃蒙屠維蔫月　日

周麟ノ遺像贊

〔半陶文集〕一　淡州太守成伯居士遺像贊

某節義金石、英姿玉山、大和國之論四家也、源君出藤橘平右、細川氏之別三派也、晉人飯趙魏韓間、七尺劍卯金所起、一張弓猿臂而彎、北有京城南有宮城、布南陽龍虵陣、東爲文者西爲武者、侍西序鵷鷺班、羽蓋翠帷鷙鳥雪打、兵衞畫戟睡鴨晝閑、日飲母何、爰盍悟達直了宿世、風流好事、洛陽兜率豈隔塵寰、戡定禍亂、備嘗嶮艱、黃某有詩、山曰淡人曰淡、白傳立姪、條可攀例可攀、永明旨門前綠水、惠日道向上玄關、咦、功名繫在凌烟上、毛髮生風春滿顏、

〔中八木村古蹟集〕○淡路

成春　彦四郎、淡路守、後改隱岐守、

文明十七年五月十五日

成春射ヲ能クス犬追物ノ射法ヲ免許セラル射狗馳場

寶德元年、將軍義政御的始、細川淡路守成春爲御相手、成春能射、故免犬追物射嗜、其舊跡在野原村、曰射狗馳場、國人相傳、此將米餞爲的射、異本應仁記曰、東境室町、細川兵部太輔勝久、淡路守成春、刑部少輔勝吉之屋形亦爲灰燼云々、應仁亂將軍義政弟義視之執事細川勝元、山名宗全依確執、義政、義視亦不和、上下亂、皇都既成戰場、自應仁至文明十餘年之間、兵亂不止、此時成春京都邸亦燒失也、文明十二年將軍義尙時、成春爲御供衆、此時曰隱岐守、文明十七年五月十五日卒、治國二十年、號南陽院成伯榮公、感應寺鐘銘御守護源成春、此時文明七年也、○藤原親秀、感應堂鐘ヲ寄進ノコト、七年年末雜載、佛寺ノ條ニ見ユ、

義政ノ射藝ノ師、

〔淡州須本城并古城傳〕○淡路　中八木城　○中略　第六世淡路守成春、初メ彥四郎ト稱シ、後隱岐守ニ改ム、射藝ニ名アリ、將軍義政公ノ師タリ、依之將軍家ノ外停止セラレシ犬追物ノ射法ヲ免許有テ、城邊ニ犬追馬場ヲ設ケ稽古アリ、今野原村ノ地ニ犬ノ馬場ト云處アルハ其跡ナリ、土民云、此成春餅ヲ空ヘホリ上ケ、地ニ落サル內ニ馬上ニテ射貫カレタリト、又今モ杵歌ノ唱歌ニ、□大戶初尾テ鷹ノ羽ヲ拾フタ、ウレシヤ殿ノ矢ニ刻ント、是全ク

成春弓射ノ技ヲ讚フル杵歌

一周忌

成春ノ弓術ヲ譽テ、其時作リシ歌ナリト云リ、治國二十年、文明十七年乙巳五月十五日卒ス、法號南陽院殿成伯榮公ト云、

三回忌

〔蔭凉軒日錄〕文明十八年五月九日、不參、天快晴、來十二日於常喜軒齋、請帳以淸持來、蓋來十五日、淡州南陽院殿小祥忌探支之云云、當日於彼屋形可營佛事、

十二日、不參、天快晴、○中略　此日於常喜軒有淡州南陽院殿小祥忌齋會、女中見營之云云、愚辭不赴、

十四日、不參、早旦天洒雨、自夜半洒之也、於常喜軒點心頓寫、南陽院小祥忌也、春英營之也、

十九年五月十三日、不參、天半陰、於常喜軒有煎點、愚辭不赴、蓋細川淡州南陽院殿大祥忌也、探支之、樹、丹、繼、悰、□赴請、有修懺、悰公備其員、

○成春、和泉守護細川持久等ト、兵ヲ率キテ丹波ヨリ入京スルコト、應仁元年十月二十日ノ條ニ、淡路護國寺僧徒、賀集神宮寺造營ノ爲メ、每月ノ陣夫ヲ免除セラレンコトヲ成春ニ請フコト、文明元年六月十一日ノ條ニ、成春、義尙ノ犬追物ニ參加スルコト、同九年六月二十八日、同

十年正月二十五日、同年七月七日及ビ十五年七月一日ノ條ニ、出家スルコト、同十年九月五日ノ條ニ、義尙ニ酒饌ヲ進ムルコト、同十五年七月四日ノ條ニ、大神宮ニ參詣スルコト、同十六年八月二十三日ノ條ニ見ユ、養子壽繁ノコト、便宜左ニ附收ス、

養子壽繁

〔陰涼軒日錄〕文明十六年十一月廿一日、齋罷謁東府、御前壽繁喝食書立供台覽、繁公族姓房（坊）城家、爲細川淡路守養子之由白之、有御爪點、

俗姓坊城家

十八年四月廿六日、○中略今朝孫以清爲春（壽芳）英西堂使來曰、來月淡州南陽院殿小祥忌也、其以前壽繁喝食度僧之事達台聽者爲幸、愚云、瑞孝喝食依幼少、御給仕其勢危、況加新給仕者、尤可不辨、然者繁美丈度僧事不可然、夏了可白談之由答之、

壽芳壽繁ノ度僧ヲ望ム

五月四日、天降雨、終夜不罷及巳刻、○中略過常喜軒、東（壽繁）川美丈以清老人茶話移刻、

當年十九歲

十一月二日、天快晴、齋罷謁東府、○中略壽繁喝食度僧書立供台覽白之、雖有佗事、瑞孝喝食幼少之故、愚押之、于今不達上聞、雖然當年十九歲、太以老大也、有御免可然乎、御免之由被仰出、件々以冷泉殿白之、○中略夜來往常喜軒有宴、及深更醉歸、蓋惜東川美丈落飾也、繼也、悰也、同途、宜竹（周鳳）翁同宴、

義政度僧ノ許ス

三日、不參、天快晴、○中略召看方丈壽繁喝食、度僧御點之書立渡之、繁喝食謁方丈來于當寮、

藥局ニ任ズ

十二日、不參、天快晴、○中略夜來春英西堂携東川上座來、有宴、落後初來臨、自來十五日可任藥局云云、

十五日、天快晴、○中略往常喜軒、今朝東川初居藥局之故、早旦光降愚陋室、爲回禮也、

景三東川字說

幼少ヨリ成春ニ養ハル

〔補庵京華別集〕東川字說

相國有風流美少年、其諱曰繁、別稱東川、細川淡州源府君自齠齔中養而爲子、可謂華矣、而考世譜、則出自故丞相北野神君、而今菅房（坊下同ジ）城公其兄也、敍師承則前僧錄司北禪（周鳳）師翁其祖也、于眞于俗不可以常兒而論焉、其游某袖軸子來求予爲東川字說、予以北禪老門生而視其徒、又門生門下門生也、則此命可得而拒乎、憶昔予携景徐等諸友、春遊見梅北野、于時東川最幼、折梅花插頭、二月雪滿衣、神君所詠東川歌之、甚可愛也、遂訪北山鹿寺評詩、於金閣之上招北等持蘭坡而同賦、命東川執筆、々勢翩々、一座稱善、予顧謂蘭坡、景徐曰、二老記否、先

是赴相府之召、陪詩歌之席、府命特擢房城公於稠廣之中以爲執筆、由是菅氏之家又起於世、豈不盛乎、房城公難爲兄、東川難爲弟、天何幷二難於此矣哉、二老喜曰、難々、蓋東川此時予所命也、夫繁也者、謂草木之騰茂飛英也、而其師所以命名何義也、想不在千里之梅、則必一夜之松也耶、予說異之、蜀有東西兩川爲繁華之國也、何謂繁華、曰海棠花也、蜀人至海棠則不名之而直曰花、其所貴重也如此矣、予謂東川便海棠花也、北禪北野兩家便蜀也、東川年未到弱冠、人皆不名之以字而行焉、前程難測、學究古今、德齊天地、必如北野君耳、其清高也、讓一國師之尊、其制作也、具十翰林之美、必如北禪翁耳、予故曰、東川花也、兩家蜀也、老杜所謂東川詩友、老坡所謂東川望郎、可同日而語乎、吾西川烏頭子住徑塢日、北野君袖一枝梅往叩其室、烏頭一見授以金縷伽梨、好事者物色傳之、是謂入唐天神、嗚呼自烏頭而到北禪、自北野而到東川、々々乎、西川乎、遠疏一派之源、海棠乎、梅花乎、近傳一枝之法、予祝字也盡于此矣、其師乃淡州府君外家、與東川彼此不相離者、慶雲塔主春英西堂、視予如北禪翁在日云、

文明乙巳三月吉辰　前相國横川景三

十六日、丙寅、義尚、蔭凉軒集證（龜泉）ヲシテ、小河第ニ祈禱セシム、

九月十六日ノ祈禱

義興ノ際ニ乘馬飯田大炊介ヲ侍ラシムヲ供ハ近習幷ニ申次ノ當番

〔蔭凉軒日錄〕五月十五日、〇（略）中　謁西府、奉報來日御祈禱事、早旦不及白案内、可始看經之命有之、

十六日、破曉行事如恆、早旦謁西府、督御祈禱座敷、看經如舊例、維那承賀首座、

〇九月十六日、義尚、復集證ヲシテ、小河第ニ祈禱セシムルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔蔭凉軒日錄〕九月十五日、〇（略）中　午後謁西府、奉報來日殿中御祈禱事、伊勢肥（綱雅）前守殿白之、左次御乳御白之、明日者不及白案内、可始看經云云、〇（略）中　晚來紀綱等惠書記來、報來日西府御祈禱、

十六日、早晨謁西府、不及白案内、始看經、

十九日、己巳、大内政弘、其子義興ノ乘馬供衆ニ就キテ沙汰ス、

〔大内氏實錄〕十二志第一

（義興）若子様御馬ゑめされ候わんをる時、飯田大炊介事わ、毎度懈怠なくしこうあるへく候、御供人數事わ、其日の近習幷申次の當番れ役として、御ともあるへし、もし當番はゑりまて無人數の時は、近習幷申次之當番れ役として、うかゝひ申さるへし、其時上意として可被仰也、しせんうかゝひ申され候

はゝ、ふさたの事あらは、當番の越度たるへきよし、所被仰出也、仍壁書如件、

文明十七年五月十九日

二十一日、辛未、北野社法樂御連歌、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　五月廿一日、北野へ御法樂ゑ御まいるゝ、

參仕ノ人々

義政海鼠腸ヲ獻ズ

んゝあり、むむろ、ういちうさん、ぶゝうの中納言、とねあきぶこう、あしさ御こつけ、ゆゝさおもしよてくこん、ひんゝし山とのよりこうせい廿おけゝ

いる、

〔實隆公記〕八　五月廿一日、辛未、晴、今日聖廟御法樂御連歌也、親王御方、帥、海住山大納言、下官、時顯朝臣執筆、等參候、自早朝被始之、晚頭事終退出、一座頗神妙々々、

御發句

あてしこにぶくやゝきゑの苔莚

露の玉ちる五月雨の庭　親王御方、

○十一月十八日、北野社法樂御連歌ノコト、便宜左ニ合敍ス、

十一月十八日、ゆきうすくはもる、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收

北の御ゑゝらくの御連ゝあり、御むろより二色一ゝゝいる、宮の御ゝさよ

十一月十八日

り二いゝ御てうしひさゝゝいる、むむろより二色二ゝ、源大納言より一色御てうしひさけ、大ゑ（初修寺殿殿）一いゝ御てうしひさけ、とゝおゝ一いゝ御てうし、ゝてゝ御ひし〳〵とうさひまひおとあり、御所の御はさよむひる御ゝゆゑてくこんあり、

歌舞アリ

〔實隆公記〕八　十一月十八日、乙丑、雪降、日出之後屬晴、今日ハ雪消、依召參內、今日先度神點御翰有之、親王御方、御室、二宮御方、帥、源大納言、兵部卿、下官、民部卿、新宰相、大貳、時顯朝臣、執筆、宗巧、肖柏等祗候、

參仕ノ人々

賦何路〳〵

御發句

うゝ雪もみるにさりぬる小松哉　御製、

朝の月の影さむき庭　親王御方、

入夜及大飲、沈醉過法、天氣快然、珍重々々、美聲等逸興、難述毫端、

義尚實隆ヲ招ク

〔十輪院內府記〕十一月十八日、微雪、○中略今日御連歌也云々、

義尚、石清水八幡宮法樂和歌三十首ヲ詠ジ、三條西實隆ヲシテ之ヲ添削セシム、

〔實隆公記〕八　五月廿一日、辛未、晴、○中略抑丑刻計自室町殿可參候之由、被仰

下之間則參候、八幡御法樂御獨吟三十首和歌、可拜見之由也、殊勝無極者也、粗愚存之旨等言上了、於御簾前賜御酒、傾數盃、天曙之時分退出了、政行（二階堂）、宏行（河内）等祇候、

六月十九日、戊戌、晴、〇中略室町殿八幡御法樂御詠三十首、被送下之、令拜見可返上之、畏入之由申入了、

二十三日、癸酉、幕府奉公衆、奉行飯尾元連及ビ布施英基等ト班ヲ爭ヒ、相鬪ハントス、義政、奉行等ヲ諭シテ之ヲ避ケシム、尋デ、元連等、薙髮ス、

〔後法興院政家記〕十四月廿二日、壬寅、朝間雷雨、藤中納言來、奉公衆與奉行衆有公事篇云々、

〔蔭涼軒日錄〕四月廿六日、〇中略就奉公衆奉行衆公事之儀、遣當院出官於布施下野守（英基）宅問之、返答丁寧、

廿七日、〇中略就奉公衆奉行衆公事之儀、遣出官於飯尾大和守（元連）宅問之、

廿八日、天氣快晴、〇中略、義政、相國寺ニ詣ルコトニカヽル、四月二十八日ノ條ニ收ム、奉行衆依公事之儀、皆號不例一人亦不參、只飯尾左衛門大夫（為修）一人參侍、

五月廿一日、〇中略晚來富田土佐守（新貝）、上原對馬守來、問世上忽劇、仍勸一盃、雜話

集證使ヲシテ英基ヲシテ訪ハシム

元連ヲモ訪ハシム

奉行等不例ト稱シテ參侍セズ

二階堂政行等モ祇候ス

移尅歸、

廿三日、不參、破曉奉公五番五番（衍カ）之衆各所屯兵、將向飯尾大和守、布施下野守城、自東府遣御內書於大和守、下野守兩所之城、先可退竄之旨嚴有命、以故移尅、細川九郎（政元）殿幕下諸將於西府東、固町々之釘拔、一色（義直）殿諸兵固西府之西町、伊勢守家臣三上越前（貞元）守率諸兵、固西府之北門者凡八百人許云云、御誕生疏早旦相副能倫行者、於悰藏主謁西府、依忽劇不被筆御銘而見返之、予代相公書御銘、諸軍終日終夜不散、城中者寂如水、

廿四日、卯刻布施下野守英基、同息善十郎沒落、上下百五十人許有之云云、安富新兵衛尉（元家）、物部次郎（將家）左衛門尉衛護以落之、彼私宅安富、物部兩人相拘間、不及放火也、自餘奉行衆各歸私宅、奉公衆亦各歸宅云云、〇中略齋罷謁西府、奉賀世上無爲、次上樣、大藏卿局、妙嚴庵、祐乘坊、廣福院藝阿宅、右馬頭殿、淨光院等往以致無爲之賀、遂謁東府致賀、往大舘刑部（政忠）第致賀、〇中略午後自鹿苑院以侍衣見賀世上之靜謐、晚來予亦詣鹿苑、伸世間無爲之賀、

廿五日、〇中略飯尾大和守爲首、奉行衆六十餘人剃頭以遁世云云、

廿六日、〇中略自細川典厩（政國）以天竺中書、見謝一昨日參賀之儀、

奉公衆元連英基等ハ襲ハントス

義政元連等ニ退竄ヲ命ズ

細川政元一色義直等ノ部將室町第ヲ固ム

安富元家等英基父子ヲ衛護ス

奉行衆奉公衆等私ニ歸ル

集證尚及ビ義政等ニ靜謐ヲ賀ス

元連以下六十餘人剃髮ス

七月五日、○略中飯尾大和守父子隱居于伏見清泉院、遣悰藏主候起居、勸以盃、面謝丁寧、

元連伏見清泉院ニ住ス

六日、○略中來十四、十五日御成路次掃地事、○義政、鹿苑院ニ詣ルコト、七月十四日ノ條ニ見ユ、以僧(多賀高忠)所司代方江督之、蓋依諸奉行無出仕、自此方直督之也、以此旨傳當職方也、

十二日、齋罷、謁東府、○略中當寺延壽堂之敷地、一亂之後布施下野守、以寺家許容爲屋敷、就沒落彼敷地爲空地、然間如元可爲寺家進退之由、住持伯升和尙、都文宏詵以連署白之、今日伺之、○義政、相國寺伯升ノ請ニ依リ、延壽堂敷地ヲ、舊ニ依リ、相國寺ヲシテ沙汰セシムルコト、七月十二日ノ條ニ見ユ、

相國寺延壽堂敷地英基沒落後空地トナル

〔十輪院內府記〕中　四月廿八日、○略中飯川中務(忠矢)來、奉公與奉行座次論事談之、

十六七日闕ニ及バントノ風說

五月十三日、雨、○略中自冷泉前(大納言)大納言、番相博衆世間物忩之間、自身可參也、若有故障者、可進宿直云々、通世朝臣(中院)當番也、仍召進光任(吉田)、高、主計、神妙之由被仰、是物忩現形之時事也、召進之條早速歟、

十四日、雨降、○略中樂(小路有俊)林入來、物忩之儀可爲十六七日、可用心云云、仍自城南有便風、文書袋、一、西殿一預遣之了、

政元英基ニ隱居ヲ勸ムルモ承諾セズ

二十一日ニ闕始マルトノ風說

十七日、樂林入來、奉行奉公衆訴訟事、近日已及干戈之條不可然、所詮存穩便之儀、布施下野守可隱居之由、以細川九郎被仰出之處、不致承引申切之間、又以萬(管領)松軒密々被仰付、然而可果生涯之由申切了、仍一定可及合戰之由、自萬松被申伏見殿、廿一日歟云々、然而今日依雜說、世間以外物忩、卽靜了、

十八日、自室町殿賜三首題、御使(吉田)、卽令詠進、當時欲及合戰之時分也、

十九日、御勘氣奉行五人御免云々、布施申沙汰了、傳聞、番頭四人被召室町殿、布施於御近所構城郭、結句對此御亭揚矢庫之條狼藉也、各爲大將可加退治之由被仰出、畏存之餘各進太刀云々、其後以御斟(酌)被下御酒、今日被仰談東山殿、御使(伊勢守)馬頭、其間可待申之由直被仰、畏入之由申之、昨日事也云々、三條大納言參入、召仰番頭等云々、

英基義尙ノ近ク第ノ城郭ニ構フヲ義尙英基ヲ討タシム

廿三日、今曉番方已帶甲冑出立、雖押懸布施所不及合戰、終以細川九郎籌策、布施夜半過沒落也云々、

英基政元ノ籌策ニ依リ沒落ス

廿四日、常福寺、樂林等來、九郎籌策申請御內書等云々、不能委細、記而無益之故也、

廿六日、傳聞、奉行等悉落髮逐電云々、每事非直也事、澆季每事斷絕之基也、

〔親長卿記〕十六　五月十四日、雨下、世上物忿興上、奉公之輩與奉行人相論、

十七日、晴、自奉公方寄奉行許之由風聞、雜說滿隨、以外事也、

十九日、晴、略○中世上物忿、明後日可有合戰之由風聞、

廿一日、晴、自室町殿依有仰子細、合戰先延引云々、

廿二日、晴、合戰明日之由風聞、

廿三日、晴、近習之輩打寄方々、一番衆與五番衆、二番與三番相寄、四番衆有子細、今度不一揆云々、今日奉行之輩飯尾大和守元連、布施下野守英基、等相籠城塀、此間宿所也、屏矢藏等用意、申尅許責寄、猶自室町殿有仰旨、不及合戰、已及日沒諸勢不引退、後聞、夜半許布施下野守沒落云々、自細川九郎許有申次事云々、及晚參內、々外之輩數輩祗候、御警固武士細川兵部大輔勝久也、但召進被官人、百人許、自身不參、予不及宿仕、依無殊事也、

廿四日、晴、各開陣、

廿五日、晴、今日聞、飯尾大和守元連已下奉行人四十餘人各遁世、切髮入道云々、進退有不定事歟、

廿六日、晴、奉行人等出家散在所々云々、

六月一日、晴、傳聞、布施下野守英基東山宿所、甲乙人破脚云々、京都之家同破脚、近日過分之振舞蒙天罰歟、

〔實隆公記〕八　五月十五日、乙丑、雨降、○中略世上物忿、縱横說滿巷、頗勞心神者也、是則奉行與奉公衆鬱陶之儀也、不遑述于筆端者也、

十七日、丁卯、晴、世上儀今日已可發向奉行衆之館之由有其聞、東西馳走過法、但又延引云々、縱横說滿巷、難勒筆端、今日德大寺亭講釋也、仍雖罷向、依世□雜說延引云々、仍則歸宅、

十八日、戊辰、晴、○中略今日亞相依召參室町殿、奉公衆事被仰宥御使云々、子細難勒筆端、

廿三日、癸酉、晴、今日武家惣番衆可發向奉行館云々、五番衆軍勢借請亞相方庭、其勢數百騎、驚目者也、種々爲大樹上意御合力之子細等在之、東山殿上意於于今者一同云々、然間細河頻有申旨、晝間申延之、及晚各馳向入矢之處、布施下野守沒落云々、秋庭、安富等扶持云々、此間之儀難盡筆端矣、及晚參內、下奏、被召入常御所御庭、世上之儀粗言上、黃昏退出了、

廿四日、甲戌、晴、世上如今者無爲之段珍重、軍勢等各打□□、

廿六日、丙子、晴、○中略抑今朝遣使者於飯尾大和守、同加賀守等之處、大和守者昨

日出奔之由申之、加賀物詣云々、傳聞、諸奉行悉遁世云々、言語道斷次第也、今日武家番頭自室町殿被下御劔云々、珍重々々、

〔御湯殿上日記〕（○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收）　五月十七日、世の物いひよはきてふりそうあり、

廿二日、四あしのもんしゆよつきらるいらせ候て、あせきんしゆともふを狀をむへきよし申、ちゝやう候へゝ、むろまちとのへまりつゐりて、申入てつゐるいるへきよし申ていつる、

廿三日、々ふちゝやうとてゐつきらる、くそくきさる物あまさつまてまいる、ゝらもんのもんしゆ□□（吉田兼致）らる、このもむね御きいこの物あまさまいらせる、三ゐうゐんよりを御きいこまいる、さんしうへむろまち殿より、この御所れ御きいこの事ゝをてよりおほせいさせによりて、うちの物ともつゐいらせ、ぬしいむしゐのよし申、ひんゝしきさのもんもんしゆともゝふしんおれともらる、山くよもていゝさへ御きいこの事、ゝをてつゐいらせられさをとも、ちやう□をけさおほせをらるゝゐとにまいらせ、おとこたちをみおもこう、ゐゝうの中納言□□（久我聖通）（裏書教忠）下せゝさふをひるせねよゐこう、ころ、むむろ

仁木某兵士ヲ伴ヒ
參内ヲ致
吉田兼致ヲ出
警固ヲ
三ス
紹寶院政
御料所山
國灰方ヨ
リハ來ラ
ズ
實隆等祇候

義政公奉
衆下人等
英基ノ宿
衆ヲ破却
所ヲ怒
ルス

英基ノ宿
所ヲ同朋
衆ニ分給
ス
張本人七八人誅伐

ゐこうのよし申、そのほゝもあり、下よりあゝるせい、ひんゝし山よりいつるをいとも御らんをるに、くゐう、御をさくしくさひをいてゝ、そやく御よりもなる、一もんせい、二もんをいよをさるおと申とも、いくさいよに入まておしと人々申、八わさの（奏清）さおゝよを御うり三ゝつゐいる、これを一ゝよつきよほゝわさるゝ、

廿四日、ふを狀ほそ川よりおとしてふゐのよし申、御きいこともゝめてたきよし申ていつる、

〔親元日記〕八　五月廿三日、癸酉、

一布施下野守英基、今夜（及更）曉出構、

〔後法興院政家記〕十　五月廿九日、己卯、晴、長興宿禰（小槻）來、相語云、布施下野守依東山殿仰、細河被官人在所ニ預置、自餘奉行老若卌三人悉遁世云々、昨日東山布施宿所奉公衆下人等破却、財物等取之云々、依是東山殿御腹立、相殘所被仰警固事云々、

六月五日、甲申、晴陰、晚景雨灑、○中略

七月廿二日、辛未、晴陰、○中略　傳聞、東山并京都布施宿所分給同朋衆云々、傳聞、今度就奉行公事篇奉公衆張本人七八人可被

ヲ加ヘラルベシトノ風説

加誅伐云々、昨夕本郷、三浦兩人被留出仕、各同名（隱居面々）共被召出云々、依是奉公衆有相企旨、

〔大乘院寺社雜事記〕九十七　五月七日、雨下、

御禮參賀ノ順序ニ就キ爭ヲ始ム

一專實相語、鷹（政平）司殿御領池田庄事、以一封申入、梅尾阿伽井坊知行、近日近習者與奉行人共、御禮參賀之前後相論事出來、及大變之間奉書事、奉行人不上書之間、御內書被申沙汰云々、鷹司殿御迷惑也、

廿七日、

奉行方ハ小勢

一奉行近習間事、去廿三日奉行方沒落了、近習之勢共大勢也、奉行方小勢之故也、大略又無爲云々、

六月一日、

政國モ出家ス

一宗順自京都下向、奉行共ハ四十六人分出家入道逐電了、不出家者兩人有之云々、悉皆失面目、布施下野之所爲也、飯尾大和守今度振舞驚目云々、色々相語者也、

十五日、

一○中略今度奉行公事ニ奉行方四十九人令入道云々、細川右（政國）馬頭可入道云々、

英基丹波ニ退ク

一奉行共事、自東山殿以伊勢守色々被申室町殿、先以松田對（貞秀）馬守被召出之、所詮布施下野守一人失面目、罷越丹州云々、

義政ハ奉行方、義尙ハ奉公衆方

廿六日、

英基ノ不法懈怠

一○中略今度俄ニ御得度ハ（○義政得度ノコト、六月十五日ノ條ニ見ユ、）奉行近習之事故也、東山殿ハ奉行方、室町殿ハ近習方也、每事近習理運ニ御成敗、細川以下畏入云々、隨而萬室町殿御計とて俄ニ御出家、下地ハ此御所存也云々、布施下野守不法緩怠ハ、就公武無是非次第也、每事爲和平故也、佛地院領君殿庄事、々後東北院之語子細在之、申沙汰儀共以外事也、文言等希代事歟、一向一院家可斷絕事也、然者則近習奉行公事最中ニ、神鹿來テ、下野之ムヲニクヒ付之由夢ニ見了、其後其在所より惡瘡出來、成癩病了、妻同成之云々、希代不思儀殊勝事也、一院建立事、尙々不可有等閑儀事也、奉行共悉以遁世、松田對馬守一人被召出之、只一人之間、一切公事披露事不叶云々、

尋尊ノ夢

〔大乘院寺社雜事記〕九十九　八月九日、大雨下、

一杉原伊賀（賀盛）守入道逢東山殿上意、近習事云々、三四人失面目由也、仍法花寺

殿桂庄事、此間杉原奉行御代官也、就其先日在家へ被仰出候、又女中へ御申間、尚々明日可進人云々、杉原方へ少々致其沙汰、相殘分百廿貫分足可有之之由庄家申云々、

九月廿七日、

一法花寺殿御領下桂庄事、葉室幷本領申給歟云々、就中御代官杉原事、自室町殿可有御口入云々、

〔大乘院日記目錄〕四　六月廿四日、〇略中去月奉行共ト、近習者ト、御禮參賀之次第相論事ニ條々及御沙汰、奉行共失面目、逐電令遁世、入道之輩四十九人云々、布施下野守之所行也、第一失面目了、就此事、一切披露事以下不辨云々、大方上意之趣承分ハ、一切不可叶之由必定云々、

〔政覺大僧正記〕八　五月十三日、癸亥雨下、

一京ヨリ御書到來、奉行與近從與御對面前後相論事以外云々、

十七日、丁卯、

一一昨日ヨリ、京都奉公人ト奉行人ト、御對面前後相論事破云々、

廿九日、己卯、

披露ノ事以下辨ゼズ

一去廿三日、京都奉公人ト奉行人ト公事邊事、既以破、勢遣アリ、奉行方落云々、内々東山殿ヨリ被仰出子細アル間落畢、京都事外人勢云々、布施下野守條々有緩怠間、訴訟申故也、少々奉行方衆遁世云々、

六月朔日、庚辰、晴、

一宗順京都ヨリ下向、奉行四十六人遁世云々、

〔大乘院寺社雜事記〕九十八　能登岩井兩河用水相論條々十八枚目裏文書

〇略上

一奉行共事、室町殿ェ以勢州色々被申候、松田對馬守罷出候、其外奉行共事室町殿ェ被申宥候、本人布施下野候間、此一人もてさる計候、近日マテ細川上原ゟ所ニ置候へ共、既丹波國ェ行候歟と申候、今度髮ヲそり候奉行人合四十九人と申候悉伏見清撰院(泉)ニ候、然者奉行共定而可罷出候、〇略中

六月十五日　政覺

如意壽とのへ

〔東寺百合文書〕け廿一　〇山城一口方評定引付　文明十七年乙巳　六月二日、在所北僧坊、

東寺數秀遁世ノ在所ニ酒肴

一松田對馬遁世之在所伏見聞間、遣兩雜掌可被弔、一獻料二百疋可被持、野

村一人アラハ、二十疋可被振舞、若又人數多アラハ、五十疋分惣之中へ可被振舞旨衆儀了、

同四日、在所大湯屋、

一對馬遁世之在所へ御弔御返事披露了、

同十五日、在所北僧坊、

一珍皇寺執行來、○中略大名三ヶ所下國、近日又諸奉行遁世間、無人數之由申了、

同廿一日、在所北僧坊、

一松田對馬今熊野近日居改之間、彼在所へ雖爲如形酒肴可被送之、入足七十疋之通改進申、以内談被定之間、只今披露了、

〔東寺百合文書〕○たゝ寶莊嚴院方評定引付乙文明十七巳　六月七日、在所北僧坊、

一細川野州中間四郎次郎申物爲彼院領百性申云、布施下野逐電跡勢州方拜領之事候、然上者池田三段之事、彼方へ以緣被仰可有御知行沙汰、用途之事者、先五六百疋之間間違可申、然上者御百性可被仰付之由申披露候處、勢州拜領實否相尋、重而可至披露旨衆儀了、

ヲ贈ル

大名三箇所下國

數秀今熊野ニ移ル東寺又酒肴ヲ贈ル

〔蔗軒日錄〕天十五六、僉云、京奉公奉行公ヲ○以下闕ク、○義尙、元連以下三十三人ノ罪ヲ免ズルコト、八月十五日ノ條ニ、英基、義政ノ召ニ依リテ、其子善十郎及ビ飯尾新右衞門兄弟ト俱ニ之ニ謁シ、尋デ、幕府ニ出仕スルニ依リ、義尙ノ侍臣等、之ヲ憤リ、英基等四人ヲ殿中ニ殺害スルコト、十二月二十六日ノ條ニ見ユ、

石見益田兼堯卒ス、

〔萩藩閥閱錄〕七之四益田越中

〔長陽從臣略系〕益田

兼理左近將監、

兼堯越中守、朱書〔益一丸、孫二郎、母雲州馬田某女、建大雄院〕文明十七乙巳五月二十三日卒、法名全國、

貞兼越中守、

女子陶尾張守弘護妻、

國兼ヨリ十五世

益田越中守兼堯孫次郎、左馬助、文明十七年五月廿三日死、

世系

法名全國

〔益田兼堯畫像〕○男爵益田兼施氏所藏

壽像贊

〔印〕益田越州太守兼堯公壽像

眉宇春融、胸襟天朗、語言有味、甘露玉漿可人之心愛惠以仁、薰風瑤琴、解民之

法諱瑞兼不二庵ニ肖像ヲ安置ス

慍、揮一口劔、則合國英雄從歩武、揚□□鞭、則百萬貔貅受指呼、子多孫多、□□家聲、奕世財足、福足惠足、喜色門□□歸無著之心、宗洪興妙義之舊業□□、謂之益福田於四海、開壽域於八□□乎、

公也姓藤氏、法諱瑞兼、號全國、爰□村美濃守信爲、創一菴、扁不二□、尊像安置、以奉香火、蓋旌今□世事主之至誠也、求贊老拙、不□(獲)拒辭、贅鄙詞厥上、且述小偈、祝□(不カ)朽之良策云、

全國齊家報主恩、人臣忠義樹殊勛、身前身後無窮業、收在毘耶不二門、

文明十一歳龍集己亥中冬之望

妙喜峰下老衲周鼎燒香謹書　印(印文神山)(印文周鼎)

○兼堯、幕府ヨリ所領ヲ安堵セシメラルヽコト、寶德二年九月三日ノ條ニ、石見益田莊地頭職ヲ子貞兼ニ讓ルコト、寛正三年四月五日ノ條ニ、義政ヨリ備後、安藝、周防ノ攻略ヲ命ゼラルヽコト、文明二年二月四日ノ條ニ、陶弘護ヨリ大内政弘援助ノ誓書ヲ受クルコト、同年八月六日ノ條ニ、越中守ニ任ゼラルヽコト、四年十一月二十二日ノ條ニ、義政ヨリ吉川經基、周布元兼等ト協力スベキヲ促サルヽコト、五年五月十

益田兼堯畫像　男爵　益田兼施氏所藏

縱寸　絹　〇、八一八
横　〇、四〇六

不二庵ニ肖像ヲ安置ス

公也姓藤氏法名[illegible]
安置、以奉香火、[illegible]
上、且述小偈、祝[illegible]
全國齊家報主恩、人[illegible]
文明十一歳龍[illegible]

○兼堯、幕府ヨリ[illegible]
條ニ、石見益田[illegible]
ニ、義政ヨリ備[illegible]
日ノ條ニ、陶弘[illegible]
日ノ條ニ、越中[illegible]
ヨリ吉川經基[illegible]

氏所藏

原寸
縦 〇・八一八米
横 〇・四〇六

法諱瑞兼不二庵ニ肖像ヲ安置ス

公也姓藤氏、法諱瑞兼、號全國、爰□村美濃守信爲、創一菴、扁不二□、尊像安置、以奉香火、蓋旌今□世事主之至誠也、求贊老拙、不□(獲)拒辭、贅鄙詞厥上、且述小偈、祝□(不カ)朽之良策云、

全國齊家報主恩、人臣忠義樹殊勛、身前身後無窮業、收在毘耶不二門、

文明十一歳龍集己亥中冬之望

妙喜峰下老衲周鼎燒香謹書 印(印文「神山」)(印文「周鼎」)

○兼堯、幕府ヨリ所領ヲ安堵セシメラルヽコト、寶德二年九月三日ノ條ニ、石見益田莊地頭職ヲ子貞兼ニ讓ルコト、寛正三年四月五日ノ條ニ、義政ヨリ備後、安藝、周防ノ攻略ヲ命ゼラルヽコト、文明二年二月四日ノ條ニ、陶弘護ヨリ大内政弘援助ノ誓書ヲ受クルコト、同年八月六日ノ條ニ、越中守ニ任ゼラルヽコト、四年十一月二十二日ノ條ニ、義政ヨリ吉川經基、周布元兼等ト協力スベキヲ促サルヽコト、五年五月十

益田兼堯畫像　男爵　益田兼施氏所藏

原寸　縦 〇・八一八米　横 〇・四〇六

原寸

縦 〇・八一八米
横 〇・四〇六

毛利輝元書状

毛利輝元書状

毛利十一郎家ヲ相続スベキ事

○豊臣幕府ヨリ所領ヲ安堵セラルヽコト、寶德二年九月三日ノ條ニ、石見益田荘地頭職ヲ子貞兼ニ譲ルコト、寛正三年四月五日ノ條ニ、義政ヨリ備後、安芸、周防ノ攻略ヲ命ゼラルヽコト、文明二年二月四日ノ條ニ、陶弘護ヨリ大内政弘援助ノ誓書ヲ受クルコト、同年八月六日ノ條ニ、越中守ニ任ゼラルヽコト、四年十一月二十二日ノ條ニ、義政ヨリ吉川經基、周布元愛等ヲ召スベキヲ促サルヽコト、五年五月十

毛利輝元書状 印

三日ノ條ニ、高橋命千代ヨリ誓書ヲ受クルコト、八年九月十五日ノ條ニ、三隅長信父子ト和解シ、尋デ、其誓書ヲ受クルコト、九年九月二十七日ノ條ニ、幕府ヨリ畠山義就討伐ノ命ヲ受クルコト、同年十二月二十一日ノ條ニ、福屋是兼等ノ誓書ヲ受クルコト、十一年十月二十六日ノ條ニ、三隅貞信ノ誓書ヲ受クルコト、十三年五月三日ノ條ニ、貞兼ノ所領石見益田莊地頭職ヲ其子熊童丸宗兼ニ讓與スルニ加判スルコト、十五年四月二十八日ノ條ニ見ユ、

二十四日、甲戌、義尚、三條西實隆ヲシテ、和漢朗詠集不審ノ義ヲ注進セシム、〔實隆公記〕八　五月廿四日、甲戌、晴、○中略入夜自室町殿有御使、久下、朗詠題内雜部、御不審之子細在□之、粗注申入了、

二十六日、丙子、義尚、御歷代ノ宸影ヲ拜觀ス、〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　五月廿六日、むろまち殿より代々おゝし、(はゝ)の御ゑい申いさせるゝ、やうて返ゑいる、

二十七日、丁丑、日向伊東祐國、飫肥ニ陣シ、新納忠續ヲ攻ム、薩摩守護島津武久、之ヲ救ハントシ、是日、其族島津國久、同忠廉等ヲ都城ニ遣シテ、兵

祐國ノ出陣ニ就キテハ武久申披雑説ヲ使僧ノ爲メ新納忠續ニ再派遣ス

文明十七年五月二十七日

ヲ募ラシム、

〔前編薩藩舊記雜錄〕四十 新納越前守忠明後江守近譜中 正文在新納三河守忠德入道楚弓

此趣酒谷へも申遣候、自其も可有傳達候、不審候ハヽ早々可示給候、北郷(敏久)方へ被遣候書狀之趣、細々令披見候、誠ニ驚入候、一日以狀如申候、伊東(新納)飫肥ニ依取陣候、雜説共候由承候之間、爲可申披、妙谷寺を雇遣候へハ、於路次北郷方ニ被逢候て被留候、左候之間、爰元之旨趣おひへ不可屆候ニよて、八郎左衛門殿を酒谷まて遣候、若城へ通得候ハヽ、申散候雜説努々有まし き子細よて候、いのよも城之事、堅固ニ被持延候樣ニ、了簡肝要之由申候間、其上北原昌宅被申候意趣、自是申候、返事等再三申きりせ候て遣候つるゝ何さる子細ニよて、さ樣ニ申候つらん、不審千萬よ候、我等ゝ心中ハ北郷方是ニ被居候之間、細々申分候、定而存知候覽、江州(新納忠續)之難儀一家滅亡之基候之間、年内より此事をこそ一大事ニ存候つれ、さ候上ハ、何篇ニ城を被渡候へとハ可申候哉、縱又申子細候共、江州面々申合候てこそともかくも有へく候へ、殊ニ是ハ努々不存寄事よて候ゝ、承引之樣ニ狀ニ見え候、無心元存候、但對江州之心中、定而諸天も可有照覽候之間、可有聞披候哉、御同前ニ候者

白木俣ノ山路水氾ノ濫ノ爲メ渉ルヲ得ズ

祐國祐邑土持某ヲ縣城ニ攻ムル軍ヲ班ス

祐邑鴟峯ニ飫肥城ニ戰フ兵ト

本望候、恐々謹言、

朱カキ文明十七年乙巳潤三月廿四日

武久(島津)判

新納越(忠明)前守殿

〔文明記〕○日向 ○略上 去程ハ、去閏三月八日ハ、伊東又打出、飫肥ハ陣を取て數月を送、去ハ兵粮つきさる左右運り有けれ共、五月雨の時分あれハ、後卷之了簡不及、其謂ハ彼堺れ通路ハ白木俣と云山路あり、一日中ハ大川を二三十瀨依渡ハ、少も水のさまされハ難叶也、其上大隅薩摩多年の弓箭ハ、地下等の者勞終さる時分あれハ、莵角延引をる程ハ、漸五月雨も晴上て、五月廿七日ハ先勢として、薩州匠作、都城へ被打越、諸軍勢被相催、○薩隅日内亂記異事ナキニ依リ略ス、

〔三州軍鑑〕○日向

一○中略 同(文明十七年)正月より祐堯(伊東)嫡子祐國、舍弟祐世(邑下同ジ)相共に土持を退治せんとして、縣表へ出陣し、是を攻ると、敵山々に取籠るよ因て、落去おく開陣あり、然もとも都於郡ハ歸城し、飫肥入と觸廻し、佐土原、石崎濱を直ニ七浦へ打通る、次郎祐世ハ清武より郷の原之内鴟峯へ指掛る、飫肥勢坂手迄出向

祐邑清武
口ヲ越エテ
陣ヲ張ルテ
楠原ニ陣ス

て及合戰ニ、伊東勝利を得、敵數百人を打取て、宮藪原へ追込ミ陣ゐ、同閏三月、祐國楠原へ出陣ゐ、

〔日向記〕一　於飫肥祐國御戰死事　翌十七年乙巳二月、祐國公臼杵表へ御進發有テ、臼杵衆數多討捕、野別府カミ城ヲ誘、八代駿河守ヲ地頭トメ、人數三百程指置テ御歸陣也、去間眞幸領主北原長門守殿父子人數召具シ、飫肥ニ御供有ヘキ由被申シカハ、同閏三月四日、人數八千餘ニテ御出陣有、御舍弟ノ次郎祐邑、是モ人數八千ニテ清武口ヲ御越山、郷原ヲクタリ、内ノ田ニ指懸リ、飫肥衆ヲ宮藪ニ追詰、直ニ御陣ヲ張玉フ、祐國ハ七浦ヲ差通リ、楠原ニ同八日己未日乘陣有、其節祐堯（伊東）公清武ニ御越有シカ、四月廿八日、御年七十七歳ニメ、清武中野ニテ御逝去也、〇中略、伊東祐堯卒スルコト、四月二十八日ノ條ニ見ユ、永陣ノ事ナレハ、薩摩ヨリ馬ヲサヽセ、伊東方ニ御音信ノ使也、飫肥ハ新納江州忠續ノ搭護也、薩摩ヨリノアツカヒニモ可成哉ト野村右衛門佐被思ケルカ、此馬誰人ニテモ取次ヘカラス、其故ハ飫肥ノ本城ノ義ハ追付知行有ヘキ所ヲ、他國ノ恩ヲ以テハ不入事ト、大音ニテイラチケレハ、其ヲ兎角ト申人モナクメ、此馬ヲ取アケス、彼使者面目ヲ失、馬ヲハ八幡ノ神前ニ繫捨テ歸

武久相良
爲續ニ謀リ
酒谷ニ廻リ
尾ニ兵ヲ
出サントス

ケルカ、伊東方ノ御爲ニ成馬取上ナキハ、如何樣子細有ヘキトテ歸ルナリ、去程ニ、嶋津方、飫肥陣ノ後卷スヘキ思慮ヲ以テ、求麻相良左衛門爲續ニ内談シ、案内者ヲ以、薩摩ノ人數酒谷ノ浦（裏）メクリ尾ト申所ニ人數ヲ上、此方ノ陣ヲ引セン爲ノ武略ナリ、是ヲ祐國ヘ申上ケレハ、野村右衛門佐聞テ、主人ニ左樣ノ事ヲ聊爾ニ申間敷由ヲ制シケリ、

〇祐國、島津久逸ニ應ジ、飫肥ニ出陣スルコト、十六年十一月十四日ノ條ニ、戰死スルコト、六月二十一日ノ條ニ見ユ

〔參考〕

〔莊内平治記〕二〇日向　伊東出張飫肥事　サラテタニ威ヲ振フ伊東カ一族、數度ノ軍ニ打勝タル上、其頃北原長門守一揆ヲ企テ、飯野、德滿、馬關田、吉田、吉松、野尻、栗野ノ勢ヲ合、伊東伊作ニ與力シケレハ、是ナン雪上ニ霜ヲ加ル如クニテ、翌年（文明十七年）閏三月八日、再ヒ飫肥ニ打テ出、新納近江カ楯コモル本城ヲソ圍ミケル、初ノ程ハ城中ヨリモ打出、互ニ雌雄ヲ爭シカ、籠城月重リケレハ次第ニ兵粮乏クナリ、戰ントスルニ力ナク、弓ヲ拏ヘキ便モナシ、忠昌（武久）公聞シ食シ、加勢ヲモ遣シ、兵粮ヲモ籠ントシ玉モ、飫肥ノ山路白木俣ノ大

河三十餘流レ、水少シ漲ルトキニハ、常ニタモ渡シ難シ、矧ンヤ此程降リ續タル霖雨ナレハ、河水渺々ト漲リ來テ、白浪激シテ崩岸、水渦同卷岩カヽリケレハ、乍チニ飫肥ノ道路絶果、本城イヨ〳〵粮盡、殆ント苦痛ニ迫リケレハ、城中ノ者モ、今一月トモ如何テカ以テコタフヘキト、末覺束ナク暮セシニ、霖雨モ晴レ、河水モ漸々減セシカハ、同五月廿七日、嶋津薩摩守國久、嶋津修理亮忠廉先登ノ將トシ、都城ニ打越、軍兵ヲ催促シ、飫肥ノ後攻ヲ議セラレケル、

〔日向纂記〕四

光照（結城）公臼杵郡ニ出馬ノ事　光照公ハ文明十六年十二月、飫肥城ニテ十分ノ勝利ヲ得ラレシカハ、一先都於郡ニ歸陣アリ、明レハ十七年乙巳二月、縣ノ土持家ヲ征討ノ爲ニ、弟祐邑ト共ニ臼杵表（日向五郡ノ一、）ニ出馬アリテ、臼杵勢許多打取リケル、然トモ敵兵山々ニ籠リ、爰ヲセントヽ防キシ故ニ、縣城ハ落サリケリ、其ヨリ野別府城ヲ修築シ、八代駿河守ヲ地頭トナシ、三百ハカリノ兵ヲ籠置テ歸陣アリ、（○日向記、日向私史異事ナシ、）光照公再ヒ飫肥ニ出馬ノ事　文明十七年乙巳閏三月四（八カ）日、光照公ハ勝誇

リタル勢ニ乘リ、是非ニ飫肥ノ城ヲ平ケントテ、再ヒ八千ノ勢ヲ催シ、七浦ヨリ飫肥ニ攻入リ、同八日、楠原ニ陣ヲ居エラル、（今ノ上城（ウハ）、即其地ナリ、）眞幸領主北原長門守父子モ當家ニ一味アリテ、（日向記、）飯野、德滿、馬關田、吉松、野尻、栗野ノ勢ヲ引具シ、同ク飫肥ニ發向アリ、（莊内平治記、）二郎祐邑モ同ク八千ノ勢ヲ率ヒ、山路ヲ通リ、鄕原ヨリ內田ニ打テ出テ、鳶嶺ニサシカヽル、飫肥勢阪半マテ出向ヒ戰ヒシカトモ、協ハスシテ逃退キケルヲ、宮藪ニ追ツメテ、其マヽ陣ヲ居ラル、（○中略）飫肥城中ヨリモ、初ノ程ハ度々打テ出テ、互ニ雌雄ヲ爭ヒシカ籠城月累リケレハ、兵粮モ次第ニ乏ク成リ、戰ハントスルニハ力ナク、弓ヲ挽クヘキニ便リモナシ、此趣鹿兒島ニ聞エケレハ、島津忠昌大ニ驚キ、援兵ヲ飫肥ニ遣シ、兵粮ヲモ餽ラントセラレシカトモ、此程フリツヽキシ霖雨ニ、酒谷川漲リテ飫肥ノ通路絶果テタリケレハ、城兵ハ益困苦ニ逼リ、殆ト支ヘ難ク見エタル處ニ、程ナク霖雨モ晴レ、川水モ次第ニ減シケレハ、同五月二十七日、島津薩摩守國久、島津修理亮忠廉先手ノ大將トシテ、都城ニ出張シ、軍兵ヲ催促シ、飫肥ノ後詰ヲ議シタリケル、（莊内平治記、）

野村右衛門佐處置惡キ事　島津家ヨリ永陣ノ事ナレハトテ、音信ノ使ヲ遣リテ馬ヲ贈リケル、野村右衛門佐（松井本ニハ左衛門佐ニ作ル、）ハ供奉ノ家老ナリケルカ、島津家ヨリ扱ヒニモ成ルヘキ使トヤ思ヒケン、此馬誰ニテモ取次ヘカラス、追付知行アルヘキ本城（飫肥城、）ヲ、他國ノ恩ニテハ入サルコトナリト、大音揚テ罵リケレハ、薩摩ノ使者ハ面目ヲ失ヒ、伊東家ノ爲ニ成ルヘキ馬ヲ取揚ナキハ、定テ子細アルヘシト云ヒツヽ、件ノ馬ヲハ八幡社ノ前ニ繫キ捨テソ歸リケル、其ヨリ島津家ニハ、玖摩領主相良左衛門爲續ニ内談シ、酒谷ノ内廻尾ト云所（今是ヲ玖摩陣ト云モ、）ニ人數ヲ繰上ル、當家ノ勢ヲ引シメン爲ノ計略ナリトソ、（莊内平治記ニハ島津家ヨリ相良家ニ相談ノ事見エス、）是ヲ光照公ニ申サントスル者アリケルカ、右衛門佐、公ノ氣後レニモ成ルヘクヤ思ヒケン、左樣ノ事ヲ卒爾ニ申ス可ラスト制シケル、（日向記、）

二十八日、（戊寅、）義政、鐫工彌次郎ヲシテ、封字ノ印ヲ改作セシメ、尋デ、喜山、德有鄰等ノ印ヲ作ラシム、

〔蔭凉軒日錄〕五月廿八日、（略○中）午後自東府見召僧、命悰子參、調阿傳台命云、

封字之御印象牙太古之故、可見改之、可命工之旨有台命、以象牙之圓軸、被爲御印材也、（印材ハ象牙）

廿九日、（略○中）徵鐫工彌次郎、命御印事、象牙封之字御印幷印材彌次郎渡之、

六月廿七日、午後謁東府、（略○中）封之字御印今日出來、供台覽、可遣調阿方之命有之、予乃往調阿宅渡之、周阿歸、（印田來ス）

廿八日、（略○中）自調阿方封之字新御印幷御印籠一、御印三、封字舊御印一、以上御印五到來、封字新御印切紙可進上之由傳台命、今日例日也、明日先切紙一括新御印可進上之旨白之、舊印者磨禿、封之字、其印材新貼珠之一字可剔之旨有之、蓋周琳喝食被望之也、（景三周琳ニ爲メ珠ノ字ヲ古文ニテ書ス）

七月二日、（略○中）爲周琳喝食、被剔印珠之一字、小補古文書之也、

四日、（略○中）珠之字印古文、象牙、印材召彌次郎渡之、

十二日、（略○中）珠之字印今日出來、乃周琳喝食方贈之、

八月十二日、（略○中）御印四ヶ同御印籠等調阿方（江）返之、使者寶盛僧也、調阿請取折紙有之、

廿八日、〇中略謁東府、〇中略御封之印紙兩三括可進上由、以琳喝食有命、邇來依洛下怨劇、御印置之御倉、命調阿出之印柱而以可獻之、乃命調阿矣、調阿開御倉、取出御印桶、仍印籠一ヶ、御印四ヶ、持之歸矣、一括一百枚也、

廿九日、不參、封之御印三括進上之、遣調阿方、

九月十八日、〇中略齋罷謁東府、〇中略封字御印、印臥三括獻之、

十月十六日、〇中略謁東府、御印四ヶ、喜山大小二ヶ、德有鄰一ヶ、封之字一ヶ、以上四枚、剔紅御印籠一ヶ持以渡于周阿、時於御前有御一獻、御末亦有宴、細川典厩、大舘殿、畠山中書、細川治部少輔殿、堀川殿、左京大夫殿相伴、以故件々不及白之、徒歸矣、

十八年五月廿九日、不參、天快晴、〇中略又德有鄰之御印、御印材櫻木、入小箱、無印肉、今日自栖老軒、以祥恩藏主見渡之、

印文喜山德有鄰封

櫻木ノ印材

〔參考〕

〔捃印補正〕上ノ一

足利家印、印主未考、長二寸四分、横二寸二分、

德有鄰

六月大　庚辰朔盡

一日、庚辰、御祝、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　六月一日、あさ御さゝ月まいる、こよひの御いとひいりものことし、

〔實隆公記〕八　六月朔日、庚辰、晴、及晩小雨灑、則又晴、○中略及昏參內、御祝祇候輩源大納言、下官、四辻宰相中將、以量朝臣、賢房、以上五人也、天酌祝著之後、則退出、

祇候ノ人々

興福寺東門院權僧正孝祐及ビ同西南院權僧正光淳ヲ僧正ニ任ズ、

政覺孝祐轉正ノ二條ヲ持通ニ依ス

〔政覺大僧正記〕八　六月二日、辛巳、

一東門院（孝祐）轉正事申間、則家門（二條持通）エ申處、昨夜到來、今日遣之、然處一瓶一盃持參、

〔大乘院寺社雜事記〕九十七　六月二日、

一東門院任僧正口宣案到來、則遣之、畏入云々、參御禮、

〔大乘院日記目錄〕四　六月二日、東門院轉正、今度東北院（年四）轉正之間、西南院（光淳）

同轉正云々、○任僧正ト爲ルコト、四月二十四日ノ條ニ見ユ、

○孝祐僧正ニ任ゼラルヽ日ヲ詳ニセズ、姑ク興福寺ニ綸旨到來ノ日ニ掲グ、マタ、光淳僧正ニ轉ズル日ヲ詳ニセザレドモ、便宜茲ニ掲グ、

三日、壬午、義政、集證（龜泉）ヲシテ、先ニ鹿苑寺ニ預ケシ庭舟二艘ノ有無ヲ同寺ニ尋ネシム、

鹿苑寺書狀ヲ以テ答フ

〔蔭凉軒日錄〕六月四日、○中略昨日堀河殿以清聞西堂承、相公御庭舟先年見預置于鹿苑寺、其舟之有無如何、可相尋之旨、有台命云云、乃召鹿苑寺僧、日晩之故昨不來、今朝隆藏主來、乃傳台命、隆公聽命歸、午時自鹿苑寺記舟之事有折簡曰、

御舟二艘之內一艘、文明十三年十月長谷江被召之、一艘破了、當寺有之云云、

一般ハ長谷第ニ徵サレ一般ハ破損ス

六月四日

蔭凉軒下　鹿苑寺侍衣等深

○中略齋了謁東府、○中略又就庭舟之折簡、以左京大夫殿供台覽、

四日、癸未、延曆寺六月會、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　うるう三月十二日、○中略六月ゑのさんゝうの事のふひて中（中御門）、御心えあるよし仰せらるゝ、

中御門宣秀參向

前奏
後奏
中御門宣胤宣秀ヲ扶持ノ爲メ登山ス

六月一日、略○中のふひて六月ゑよさんろう、前そうきさんよ入らるゝ、
同、（ムカヒ）
五日、略○中のふひて後そうもちて万いる、

〔實隆公記〕八　六月十一日、庚寅、晴、略○中御門中納言來、去二日者子息宣秀六月會參向之間、爲扶持令登山、仍不來也、

播磨守護赤松政則ノ部將浦上掃部助、島津左京亮等、山名政豊ト同國片島ニ戰ヒテ、之ニ死ス、

粟井新左衞門尉モ討タル

〔蔭凉軒日錄〕六月四日、略○中此日於播州片嶋、浦上掃部助、嶋津左京亮、粟井新左衞門尉、其外數十輩討死、可歎惜者也、

左京亮五七日忌

晦日、不參、於島津左京亮宅煎點、蓋島津五七日忌也、當日來月初八日也、消今日探支之、點心了修懺、法名性勳號功仲、季瓊（眞蕊）和尚小師也、

法名紀三郎等二百十六人戰死ス

九月廿三日、略○中自播州和坂浦上美作（則宗）守狀到來、狀中云、掃部助、紀三郎之外同名者十九人、倚子被官人去年當年二百十六人討死云云、可嘆、

〔大乘院寺社雜事記〕九十七　六月十四日、

室ノ戰

一今月播州室合戰、赤松方浦上掃部打負云々、

〔蔭凉軒日錄〕十月四日、略○中晚來幸大夫來投宿、

掃部助等三周忌
安丸四郎モ戰死ス

六日、略○中幸大夫今日下播州、寄一行於赤松公幷浦作藤左、

七周忌

八日、略○中晚來寶珍老僧自播來、說播之兩營之事、
十二月七日、略○中晚來世緣持浦上美作守狀來、
十七日、略○中往安丸河內守宅、談播之陣事、

宗熙香語

十九年六月三日、不參、天洒雨、略○中今日浦上掃部助、島津左京亮、安丸四郎等小祥（大カ）忌也、

延德三年六月四日、不參、天快晴、略○中信公話云、今日安丸四郎七年忌也、於河內守宅、有佛事云云、愚云、然者浦上掃部助、嶋津左京亮等亦可爲同前、

〔春浦錄〕潤溪珍公禪定門七周忌香語（安丸於播州討死）

這香、枝々葉々皆瓊玖、根柢深抽瞻蔔叢、捏不成團劈不破、黃雲薰徹盡虛空、某如今延德三年林鐘初四日、宓遇七周忌之辰、就于私第、供佛齋僧、香花灯燭、以聲追慕之忱、彫刻阿閦如來尊像一軀、大乘妙典漸寫印寫各一部、圓通懺摩一座、諸般善事、一々不能縷陳、付維那宣揚、謹集現前雲侶、同音諷演白傘蓋神呪之次、借手於宗熙焚此沈木、以奉供養三世――――場過去正法明如來、所鳩善利、不可思儀（議）者也、共惟、某爲主死節、報國盡忠、耳背後輪劍則擒三軍卒、腦門

上播旗則稱萬夫雄、加之入山野室叩玄旨、會祖師禪慕宗風、所以淨躶々上無攀仰、赤洒々下絶己躬、頭々合轍法々圓融、直得名齋楊億、機越龐翁、懿矣留慈親保遐算、盛哉使令子繼後蹤、早有衝天氣、重論蓋大功、某那邊轉身、臨茲盛筵、巍々堂々、煌々煌々、萬象之中獨露身、與諸人眉毛厮結、還相見麼、舉香云、兵衛卽今森畫戟、清香凝在博山中、喝喝、一

○政則、政豐ノ部將垣屋孝知等ヲ、播磨蔭木城ニ攻メテ之ヲ破ルコト、閏三月二十八日ノ條ニ見ユ、

〔附錄〕

〔古文書〕第貳拾集

連々無御等閑之由候、雖不始事候、祝著無極候、彌兩御所樣之儀、可然樣御執合憑存候、仍片嶋庄進之候、寂前可申候之處、爰元依取亂候遲々候、委細猶雜掌可申入候、恐々謹言、

六月十九日　政則（花押）

伊勢守殿（伊勢貞宗）　進之候

赤松政秀、東寺領播磨矢野莊ノ代官職ヲ望ム、東寺、先例無キニ依リ、之ヲ却ク、

政則書狀

國方ノ人ヲ代官職ト爲ス例ナシ

〔東寺百合文書〕○山城　一口方評定引付文明十七年乙巳　同（六月）四日、在所大湯屋、

一播州矢野庄代官職之事、赤松下野（政秀）望被申間披露之處、當庄之事、自往古國方人ニ預申事未無之、然上者難領掌申之由、可有御返事旨衆儀（議）了、彼使者一人德滿申仁也、

六日、乙酉、長野與次郎ヲ禁裏御料所伊勢栗眞莊代官ト爲ス、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　五月廿五日、○中略　くるゝ（おおしへくるゝ）ゝの御代くるゝゝのよし、ひんゝし山とのへ申さるゝ、ゝ、

六月六日、くるゝの御代くゝん（與次郎）おゝ野のそゝゐいらする、ゝさまりてふよんいゝさゝるゝ、御ゝんくゝゝり（いさゝゝゝ夕たちもる、）おさめまいらせる、御いゝ井あり、くゝとのひんゝしれ、御ゝゝゝとおといてきて、あゝとよて御さゝ月三こんゝる、めてさし（〈、

九月廿一日、○中略　雨ふる、くるゝゐれ御祿んくゐいりて、御さゝ月ゐいる、

文明十七年六月六日

與次郎代官ヲ望ム

〔諸狀案文〕○内閣記錄課所藏　幕府ヨリ與次郎ヲシテ年貢ヲ進納セシム

禁裏御料所栗眞庄事、就被出張候、御年貢以下及押妨候由候、以外次第候、仍爲叡慮一段雖被仰出子細候、以上意、先被相拘候而被成奉書候、任御下知之旨、速可有歸陣候、萬一猶難澁候者、可有異御成敗候之條、急度可被應上意事肝要候、能々被成其覺悟候者可然候、

八月七日

長野與次郎殿

九日、戊子、黑戸御所ニテ御宴アリ、義政鱒ヲ獻ズ

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　六月九日、ひんろし山殿よりそゝ

ゐ五ゐいる、くろとよて御さろ月まいる、ろめたゆふめしてうさいきらるゝ、御むろ、まんき、もんきう御ろさへ御やうきうよ御まいまあるを、入五ゐいらせらるゝ、

十一日、庚寅、高倉永繼、盜ヲ捕フ、細川政元之ノ被官三吉某等、之ヲ奪ハントシテ、其第ヲ圍ム、細川政元、之ヲ制止ス、七條飆大夫ヲ召シテ歌ハシメラル

〔親長卿記〕十六　六月十一日、晴、中尅許或人告來云、細川兵部少輔（政元）被官五十人許押寄新藤（高倉）中納言永繼、宿所云々、今朝召取盜人之處、中可取返之由云々、雖爲俄事、被官人等、其外人々走向相支互放矢、暫細川九郎（政元）出人加制止、盜人落居之上者、不能左右事也、此事惠命院永康親類也、被官相召取也、不可說事也、及晚罷向、中院通秀使ヲシテ永繼ヲ訪ハシム、矢ヲ放チテ爭フ

〔實隆公記〕八　六月十一日、庚寅、晴、○中略抑未刻計細川兵部少輔被官三吉某押寄藤中□納□言永繼卿亭、其次第言語道斷次第也、不可說〻〻、不遑毛擧、政之ノ被官新谷某ノ家燒ク

〔十輪院内府記〕中　六月十一日、晴、旬如恆、自讚州押寄藤中納言許云々、不穩便之儀澆季之至也、峰秋近隣也、遣人了、

十二日、○中略遣光任於藤黃門許、訪昨日事、對面被慇懃謝之云々、

七月十六日、拂曉有燒亡事、是細川兵部少輔被官新谷家也、此間彼被官東條、飯尾等向背罷下阿州、其一黨也、同祿之子細不知之、

十七日、依彼事種々雜說有之、不得默止、雜物少々皮子二、預遣玉井彈正許、卽來訪、

〔政覺大僧正記〕八　六月十一日、庚寅、

一俄事出來、高倉殿ニ讚州内者三吉卒人勢寄云々、盜人召人事也、比興儀誠公家所ニ武家寄事始云々、所司代等中人ニテ軈而引退畢、多賀高忠等仲裁スト云ノ說

十二日、辛卯、義政、書ヲ伊豆堀越ノ足利政知ニ與ヘ、其第二子義澄ヲシテ、天龍寺香嚴院ヲ嗣ガシム、

光淑伊豆ニ下ラシ義政ノ書ヲ望ム

〔蔭涼軒日錄〕四月朔、辛巳、○中略夜來淑（光淑）惟清來云、近日有豆州之行、主君（政知）并上杉戸部（房定）可被達御內書事、可白沙汰之由被白之、予云、然者自其可賜御一行由答之、諸歸矣、

二日、○中略就光淑首座豆州之行、見望御內書、仍寄一行於予、梵貞書記持來、返答云、御內書事乃可白沙汰云云、

集證伊勢淑貞宗ニ光淑ノ所望ノ內書ノコトヲ諮ル

五日、○中略午後往汲古宅（伊勢貞宗）、○中略淑首座所望之御內書事、以與一公說向之、汲古云、致披露者可然云云、遂謁東府、前之兩條伺之時、相公御登山、以故相國新命書立并御成吉日書立堀河殿白之、御內書事者左京大夫殿白之、

六日、齋罷謁東府、堀河殿在私第、以故以冷泉殿昨所伺之兩條奉問之、○中略又御內書事可被成也、其命可達伊勢守云云、乃往汲古、以與一公達之、

六月十二日、齋罷謁東府、○中略就香嚴院御相續之儀、被遣豆州主君御內書事、自淑首座方以一行被望白、今日以左京大夫殿伺之、可命伊勢守由有之、乃往汲古傳台命、可調御內書云云、傳台命於淑首座方、

義政貞宗ニ命ジテ內書ヲ調ヘシム

七月五日、○中略就香嚴院御相續之儀、自東府被遣豆州主君御內書并被遣上杉戸部御內書、爲予一覽光叔首座持之來、御內書事者伊勢守貞宗被調之云云、

六日、○中略晚來謁東府、○中略就香嚴院御相續、被進御內書於豆州之主君、爲禮謝光叔首座謁東府、被獻千疋折紙、以左京大夫殿白之、

○義澄、伊豆ニ生ルヽコト、十二年十二月十五日ノ條ニ、義政ノ子香嚴院等賢寂スルコト、十五年三月二十四日ノ條ニ、義澄、香嚴院ニ入リテ、清晃ト稱スルコト、長享元年六月二十五日ノ條ニ見ユ、

昭慶武久ノ出陣ヲ諫止ス

島津武久、疾ヲ冒シテ、日向飫肥城ノ急ヲ救ハントシ、是日、竹田昭慶ヲ伴ヒ、鹿兒嶋ヲ出デヽ、大隅敷根ニ陣ス、

〔文明記〕○日向略○上薩州（島津國久）（同忠廉）（新納忠續）匠作、江州、其外一家中ハ難儀ハ難見捨と被思召て、既ホ六月十二日ホ忠昌（武久）もかこしま様御立可有支度有ける處ホ、法印（竹田昭慶）以人様被申々るゝ、御一家中ハ御難儀を難被見捨と被思召て、御出陣乃儀尤殊勝ハ御事候、雖然御冠落ハ時節の御養生專一ホり、炎氣と申、遙々ハ御渡海、陣屋ハ御柄、雨露ハ犯處、以前百日ハ御服藥も徒ホ成行候、飫肥ハ事ヽ、薩

武久聽カズ身命ヲ賭シテ出陣ヲ期ス

昭慶重ネテ諫止ス

武久遂ニ承引セズ

昭慶陣中ニ同道セシコトヲ請フ

州、匠作爲御人體御越の上ハ、進退不可有餘儀候、御出悵(張)れ通被仰しゐ、今度の御立を可有御延引事、事更ゐ入道ゐ可爲御扶持れ由、支て被申ける、御返事ゐハ、意趣尤ゐ被思食候、雖然と如此療治を加、身命(養)ゐ全く有度も、儀理の弓箭ゐ臨て、一命ゐ輕度心底あり、さとひ於路次ゐ、兎角成行共、可有出陣之由被仰けきハ、法印重而れ儀ゐハ、千萬爲障入申事共候へ共、今度入道ゐ御下しれ事ハ、既ゐ公武れ以御意あり、此時ハ私不成子細こ候ゐ、今度之御出張れ御事、家臣れ謀逆を御洗如可有御弓箭ゐ而候間、天下の非時宜こ候、公武より入道ゐ御下れ事ゐ候へ共、御身れ御養生とハ申あゐら、私不成御事こ候、海上れ御勞煩、陣屋れ無御養生御再發必定あり、其時ハ醫家れ疵、京都れ聞得迷惑不可有之過候、可然者、以御使者を、入道申旨ゐ御一家中へ被仰達候而、御出張れ事ゐハ、思食留候ゐし、於無御承引ハ、以後藥を進上申間敷上者、御暇を可被下候由、頻ゐ被申けれハ、重而忠昌御返事こハ、伊(薩國)東れ事ハ、代々對當家ゐ、致緩怠而已不成、剩式部太夫(大輔)を語て、近江守ゐ腹を切をへきと企て、既ゐ對飫肥ゐ陣を取、江州難儀ゐゐようて、一段無念ゐ被思食候、此時ハ養生時分あんとゝハ難有候、然者平ゐ同道申、先堺目まて打越、彼旁々れ依左右ゐ可有進退れ由被仰ける間、御意ゐゐ理ゐや被思けん、可致御供之由、法印被申間、麗嶋を御出船有て、敷根へ有著岸、

〔薩隅日内亂記〕○上略去年ヨリ、忠昌病氣不快、醫療驗ナキニ依テ、京ヱ使ヲサシ上セ、義政公ニ被申上、竹田法印ヲ招下シ、療養アツテ、疾病過半タテ直サルト雖モ、出陣ナトノ事ハ、中々思モヨラスト、法印被申ケレハ、三ケ國ノ諸士ニ難儀ヲサセ、病中ナリトテ、飫肥ニ馬ヲ出サスンハ、瑕瑾トモナルヘキ、第一一門之面々ノ心底モ耻カシケレハ、六月十二日可立トノ玉ヘハ、法印聞テ腹ヲ立、炎天ト云、遠境ト云ヒ、陣中ノ雨露ニ犯サレタマハヽ、連日ノ御養療徒ニ可成行、飫肥ハ近江守々リ居ラレ、其上國久、忠廉遣サルレハ、御出張ニ不及ト、重テ被申ケレトモ、公儀ヱ言上シ、典藥ヲ申請、病ヲ治スルト云モ、戰場ニ臨テ、義ヲ重ンシ、士卒ヲ撫テ、敵ヲナヒケン爲ニテコソアレ、病ヲ療ストテ戰場ニ不向、武夫ノ耻辱ヲ招クナラントアレハ、法印又被申ケルハ、此度ノ御病、國中老醫共治スレモ驗ナキトテ、公方ヱ御申、法印下リシカハ、私ノ療治ニアラス、賊臣ノ叛逆等ヲ鎮メラレンハ、天下ノ時宜ニ非ス、サレハ私ナラヌ事ナリシカハ、御出陣不可然トイサメラルレハ、忠昌ノ返

答ニ、伊東佐土原ニ在テ、代々當家ニ敵對シ、福島ニ置シ式部大輔ヲ謀付、味方ニシテ、飫肥ノ城代近江守ニ腹ヲ切ラセント企、幾回モ飫肥ニ出張シ、近江守ヲ惱ス事、我ニ於テ無念也、斯時ハ養生ニ出陣スヘキトノ玉ヘハ、法印尤ト思ヒケルニヤ、サラハ御供セントテ、忠昌ニ從行、兼テ定ラレシ如ク、十二日、鹿兒島ヲ立テ出船シ、敷根ニ著、〇莊内平治記、日向纂記異事ナシ、

〇幕府、武久ノ請ニ依リテ、昭慶ヲ鹿兒島ニ遣スコト、閏三月十九日ノ條ニ、伊東祐國、新納忠續ヲ飫肥城ニ攻ムルニ依リ、武久、島津國久、同忠廉等ヲ都城ニ遣シテ、兵ヲ募ラシムルコト、五月二十七日ノ條ニ、島津久逸ヲ櫛間城ニ攻メテ之ト和シ、兵ヲ收メテ歸ルコト、本月二十一日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔島津國史〕十二 圓室公　六月十二日、(文明十七年)公(武久)自將救飫肥、明日次於末吉、十八年丙午、〇中略初公之自將救飫肥也、竹田法印昭慶止之曰、今以病起羸弱之餘、暴衣露蓋、櫛風沐雨、萬一卒逢霧露、雖有善者、無奈之何、且此役也、但命國久、忠廉等足矣、何必輕身自將也哉、公不聽曰、凡平居服藥、以求身之康疆、豈有他哉、將以殉國家之難也、卽今日雖死於行、實所甘心、奈之何以愛身之故、廢國之大事也、乃若臣者、實受公家武家之命而來、非私事也、而所言不聽、是不得其職也、臣請自此辭矣、公曰、先生言亦是也、然伊東氏與我累世爲寇讐、今也寇深矣、因我叛臣、窺我邦域、寡人是以不忍忿忿之心、必欲自將擊之、事至於此、卒不可已、吾於是乎竊有請焉、若煩先生如飫肥、使寡人服藥攝養如平生、則庶幾其免乎、唯先生圖之、昭慶曰、諾、公遂行、踰月而反、竟無復患、據圓室公舊譜、文明記、

十三日、壬辰、東寺、所司代多賀高忠ノ神泉苑立石ヲ散失スルヲ以テ、其返付ヲ求ム、是日、高忠、之ヲ諾ス、

東寺ニ石ヲ返レ　却セザレバ　一宗大及ビ　訴ヘニ　告ゲント

〔東寺百合文書〕け廿一　〇山城　口方評定引付　文明十七年　乙巳　(六月)同十五日、在所北僧坊、

一爲所司代多賀後守、(高忠)豐神泉苑石濟々執散之有其聞間、寺家仰天、依之老若多彼在所へ出向一見之處、誠多有執之跡、卽大勸進方へ相尋之處、爲所司代執之由返答、軈以雜掌所司代江申云、神泉苑事大師以來當寺知行、殊一宗爲規模在所也、然不事問被亂入、名石等被散失事曲事也、所詮如元不被返付者、可及一宗大訴旨被申送了、

高忠返答寺家ノ知行ヲ存知セズ

文明十七年六月十三日

彼返答云、寺家御知行依不存知不案内申事越度之至也、於于今者、尤雖可返□、既給置上者、是計事可被閣、且失面目事迷惑此事也、向後之事者可存知、於此事者、以御心得不及恥辱様、可有御扶持由種々申、又以大勸進長福寺色々懇望、彼僧別而入魂之間可被閣歟、雖然為向後不可然事也、所詮所司代為向後有出狀者、可被閣旨衆儀之間、彼狀云、（○高忠ノ書狀、後掲ノ東寺百合文書ニ同ジキニ依リ略ス、）

立石返付ノ勅命ヲ義政ニ傳ヘラル

如此出狀之上者、向後可支證、只今事不及返置、可被閣之由、十四日以内談之儀被定了、十五日以兩雜掌、今度之事者、可被閣之由、所司代申送了、

右條々披露了、

高忠書狀

神泉苑立石之事、寺家之儀如此之處、後日為禁裏様東山殿江被仰出云、神泉苑之事、自桓武天皇以來為異他在所之處、今度所司代彼石令散失條、言語道斷狼藉至也、於罪科有無者、可為所意、於石者、悉可返置旨被仰出之間、即大略返之了、

〔東寺百合文書〕（包紙）一　○百十一之百五十　山城

多賀豐後守

義政集證ヲ召ス

東寺御雜掌　高忠

神泉苑立石事、依不存御禁制給置候處、為寺家御成敗在所上者、可返付由蒙仰候、意得申候、此趣可預御披露候、恐惶謹言、

（附箋）「文明十七」六月十三日　高忠（花押）

東寺御雜掌

〔東寺百合文書〕○十一之十四　山城

文明十七年六月初比、為所司代、多賀豐後守、神泉苑石濟々散失之、然間為寺家以雜掌申云、彼在所之事、大師以來當寺進止、殊宗門為規模、就石有習口傳處、一往不及案内、立石等散失條、言語道斷曲事也、早如元可被返付之由申送處、雖兎角子細申、可返付出狀了、

十五日、甲午、前左大臣准三宮足利義政、山城臨川寺三會院ニ得度ス、細川政國、斯波義敏等モ亦相踵イデ薙髮ス、

〔公卿補任〕四十三　前左大臣從一位源義政一、五十一、准三宮、六月十五日出家、

〔蔭凉軒日錄〕六月二日、不參、○中略晩來伊勢與一（貞孝）公以折簡、明日早旦可參東府之命有之、乃遣返章、

賀茂在通ヲシテ吉日ヲ擇バシム

集證ニ義滿等ノ先例ヲ尋ヌ

戒師ニ就キテノ議

集證鹿苑院ニ至リ先規ヲ尋ヌ

義滿時度ノ例ハ記錄ニ無シ傳語共義持ノ例

三日、早旦謁東府、〇中略此時伊勢守貞宗（伊勢）、藤中納言殿（高倉永繼）、在通博士（賀茂）在東府、相公御得度事被仰出、在通乃擇吉日、今月十五日亥刻相定矣、貞宗公報予云、御得度事可被成其意得云云、予諾之、貞宗公曰、御得度御延引可然由、一言有之者可也、我亦一言矣、今御得度不晩之子細也云云、予云、公其圖之、一言可然云云、乃以一言達台聽、御返答曰、御得度事被思召定條、必可有御得度云云、仍鹿苑（義滿）相公、勝（義持）定相公之御先例可相尋由有台命、貞宗公曰、於鹿苑院可有御得度、予曰、御戒師誰、貞宗云、可在相公御一念、予曰、若爲鹿苑院主御戒師者、三會院主者可失面目、又爲三會院主御戒師者、鹿苑院主可失面目如何、貞宗云、然也、爲如何可然乎、予云、不如於三會院有御得度、於爰堀河殿曰、鹿苑相公御舊例、壬生官務家、定可有記錄、尋之可乎、予曰、貞宗公先見尋之可然、貞宗諾退出、乃詣鹿苑院尋先規、院主對面云、鹿苑相公御得度事者、記錄亦無之、傳語者亦無之、勝定相公御得度事者、老者曾語云、相公携等持院主元璞和尙、於勝定院昭堂俄御得度云云、或云、相公俄御成于北等持御得度、戒師乃院主元璞和尙、剃手乾園藏主云云、無記錄之故、以前亦不及達台聽也、御剃髮時亦可有御受衣受戒云云、遂往小補（景三）議之、小補云、既寶德二年竺雲（瑞）和尙爲戒師、御受衣受戒等有之、

蜷川親元集證ニ官務記錄ヲ示ス

貞宗集證ヲシテ官務記錄ヲ義政ニ進メシム

義政相國寺崇壽院ニ得度ス

今也重而御受衣受戒之事不理也、予亦同之、自蜷川（親元）不白方、以壬生官務記錄曰、如此記錄有之、絕海（中津）和尙爲三會塔主歟、貞宗不審、可問予之命有之、撿之曰、鹿苑院殿應永二年六月廿日卯刻、於北御所御得度、前太政大臣准三后、御年三十八歲、御戒師國師、御剃手絕海和尙、六月三日雅久、予答云、絕海和尙此時三會院爲塔主歟不知之、乃遣悰子於勝定院主喬年方問之、則乃撿祖師年譜、以可校之云云、〇應永二年六月二十日ノ條參看、四日、早旦喬年和尙携廣照國師年譜來、視之應永元年甲戌九月末、爲崇壽塔主、同三年丙子、崇壽造功畢、由是觀之、應永二年乙亥、勝定國師爲崇壽塔主決矣、〇略中齋了謁東府、先往汲古（伊勢貞宗）宅、乃相看、御得度事鹿苑院小補軒昨所談、各有機鋒話之、則汲古被肯小補旨、予亦同之、汲古出壬生官務記錄示予云、謁東府可供台覽、予讓汲古者再三、不允、謁東府、則堀河殿在里宅、往里宅問之、則曰、今日例日也、明日可參、我亦歸殿中、可致披露、予卷懷之、

五日、〇略中午時謁東府、奉獻壬生官務記錄、相公曰、臨川寺開山塔者三會院、天龍寺開山塔者雲居庵、相國寺開山塔者崇壽院也、此三所孰亦同事也、然者於崇壽院可有御得度如何、又當院主其成人如何、予謹答、崇壽方丈雖有一宇無

ルノ當否ヲ諮ル集證ニ集證ヲシテ瑞智貞宗等ト議セシム

集證崇壽院ハ適セザルヲ答フル由ヲ義政三會院ニ定ム

四壁、又無天井、又院主成人者、勝定相公御時參侍于相府、與季瓊(眞蕊)東堂爲同隊、於寺家爲人品也、維馨(梵桂)和尙之次老僧也、相公曰、與鹿苑院可相議、又御落髮戒師施物事、與伊勢守可相議定云云、白次堀河殿也、〇中略遂往汲古、乃對面、施物事議之、先規者如何、答曰、不識然者尋先規可承、予諾歸、乃遣樹首座於洵明允所問之、不識云云、又往鹿苑院相談崇壽院事幷院主事議之、有一房無四壁、天井亦無之、御成事不相宜、況頃院主錦江老不例、存命不定也云云、然者御得度場、以當院爲然云云、

六日、齋罷謁東府、崇壽院御得度場可然乎不可然乎之由問之、鹿苑院曰、不然由被白之、以此旨達台聽、然者可有御成、于三會院、戒師亦可爲院主、月翁(周鏡)和尙、御得度御施物事、亦與勢州議之、勢云、能可尋先規云云、雖相尋先規、無記錄由條々白之、白次堀河殿、又相公曰、官務記錄云、北御所云云、不識何御所事、曰北御所哉、考之非北山御所事、鹿苑相公御得度者應永二年也、北山御所者應永四年始有御移也云云、鹿苑相公、勝定相公兩代御得度、御布施事、北御所何處、此二條可尋官務之由有台命、往汲古、三會院戒師相定由白之、予曰、未與官務通、以故北御所幷施物等記錄事、自汲古可被相尋由白之、汲古云、乃可相尋于

集證三會院ノ得度場ト定マル旨ヲ通ズ

周鏡ヲ戒師ト定ム

義政集證ヲ剃手ト爲サントス

官務云云、官務返答有之者、可達其方云云、往鹿苑院、三會院幷戒師相定之由白之、遣折簡於三會召侍衣、則小兎僧周孚藏主來、乃傳台命、

七日、不參、齋前三會院月翁和尙、侍眞梵傳首座、小兎僧周孚藏主來臨、來十五日以三會被爲御落髮之場、以塔主可被爲御戒師之由被仰出、以此兩條奉報月翁和尙、兼諭兩役者也、月翁曰、御戒師事過當之儀也、必可應台命云云、三會院指圖幷得度規式等書以持來降、於爰件々評議有之、予云、件々達台聽以可相定云云、自蜷川新(親元)右衞門尉方、以壬生官務所記北御所故事喩予、蓋記錄云、北御所者、室町殿別殿號也、應永二年御得度以後、御座于此御所云云、左中將殿幷御內所、如元御座于南御所云云、御得度施物事、於官務雅久記錄無之云云、

八日、〇中略齋罷謁東府、三會月翁和尙御戒師幷御得度場事、傳台命、台命忝由達台聽、御髮剃手事、以梵傳首座書立之、供台覽、被相尋其成人、予不識之、天龍住僧今三會侍眞之故、差之由謹白之、又近侍衆以周全首座伺之、相公曰、予可勤之旨有之、雖固辭白不允、可應台命云云、遂往汲古語台命、汲古云、近侍事尤可然、被勤之珍重珍重、又御髮剃手事者、平僧不可然乎、予曰、勝定相公御得度

時者、乾園藏主勤之、舊例如此、汲古云、勝定相公御事者俄之儀也、不可爲例乎、鹿苑相公御得度記錄、自壬生官務方出之、視之則常光國師爲御戒師、絕海和尙爲剃手、以此舊例見掄剃手之仁望者然乎、予撿彼記錄、則誠愈也、予按、御戒師事定矣、剃手事者見命橫川和尙然乎、汲古云、尤可然云云、直往小補傳汲古命、橫川云諸、雖然受汲古命可領掌白、可隨其一左右云云、

集證景三ヲ剃手ニ推擧ス

九日、齋罷謁東府、御髮剃手事、雖以梵傳首座伺之、汲古云、平僧事者不可然由白之、以鹿苑相公御例、見命尊宿然也、然者橫川可然乎由白之、御返答以橫川相定、可傳其命云云、又近侍事、予一人侍則件々可有失錯、近侍人以一人被相副予者可然、周全首座可然之由白之、然者一人可相加、景岱侍者邇來勤御給仕、件件以之可被召使、可命景岱侍者之旨有之、全首座事者、一向不及是非之御返事也、堀河殿密語予曰、白全之事則相公御氣色不可也、後後彼事不可有御白云云、予含胡矣、乃往汲古、件々傳台命、又戒師施物事、若無記錄與汲古可相議定之命有之、傳台命於汲古、則云、萬疋可然乎云云、遂謁惣持院、西相府、西御所之三所、奉告相公御得度事、往小補御髮可被剃白事、景岱侍者可被參侍事、此兩條傳台命、小補兩條諸之、

近侍ハ集證ト景岱

集證義尙等ニ義政ノ得度ノコトヲ報ズ

十一日、不參、天快晴、齋罷往三會、小補同途、御得度規式、大概記以與月翁、橫川相議定、

集證景三ヲ等得度規式ヲ議定ス

十二日、齋罷謁東府、御得度作法幷三會院指圖等供台覽、又橫川可奉剃御髮之命、景岱侍者可參侍旨、以前傳台命、兩條可應台命之御返答白之、常光國師絕海和尙、應永二年爲相國前住之記錄供台覽、十五日開山胡桃形法衣可有御頂戴否奉問之、則相公曰、然乎、予可相計之由有命、仍被召予於御前、御得度作法御不審件々直御尋有之、又曰、可有御禮拜之模樣如何、予於御前可成禮拜之旨直有命、仍作一拜、又曰、尙可作禮、又作一拜、通身汗下、又當日可被著御袈裟、自北野御寶殿可出、鹿苑院殿、勝定院殿可爲御嘉例也、蓋開山國師之御袈裟也云云、

義政ニ得度作法三會院指圖等ヲ進ム

義政ニ嘉例ニ依リテ疎石ノ袈裟ヲ著スルコトヲ勸ム

十四日、齋罷應東府徵謁、自北野寶殿七條衣九頂、入箱來于東府、九頂內藕絲袈裟一頂有之、鹿苑院殿御得度時被著之七條開山國師衣也、勝定院殿御得度時被著之七條亦開山國師衣也、此兩條內當相公可被著衣孰可乎、予謹白、鹿苑院殿被著之衣可然乎、實契台慮於爰定矣、其衣地者薄紅梅練也、環玳瑁圓也、條者朽葉色唐絲也、九頂入箱者、先可置予所之命有之、乃持歸、又可謁御

義滿ハ疎石ノ藕絲袈裟ヲ用フ

義政義滿使用ノ袈裟ヲ用ユルコトニ定ム

集證ニ得度作法ノ不審ヲ尋ヌ

前之命有之、謁則相公直御得度之作法、御不審有御尋、相曰、昨日之禮拜之儀
麁草也、能可作禮、謹應尊命、深作一禮云、如許三度可有御禮拜、相公御諸御一
唉、又曰、御得度後被脫御袈裟者、其後御掛絡者不可有御掛、蓋被著御袴而被
披御道服也、然者然則御俗體也、以故可被略御掛絡也、又開山胡桃形法衣御
頂戴事可被略也、又所剃落御鬚髮、先可奉置予所由、伊勢守白之如何、相公曰、
然也、仍命檜工造小方篋也、往藤(高倉永繼)中納言宅、可被參侍于三會院之事報之、遂詣
鹿苑院、談御得度事、北野寶殿之御袈裟皆頂戴之、小補亦請此衣頂戴之、
十五日、天氣快晴、齋罷謁東府、來晚三會院御成事奉報之、予乃尅赴三會之由
白之、午後横川和尙、東雲侍者同途、先往眞淨院、盤礴辨晚飡待時刻、八鼓以後
横川、東雲同途而往三會、自昭堂至客殿、御所間御後架所々歷覽之、其不可處
有之則加下知改之、七鼓刻御成、自臨川寺大門、至三會山門前奉卸台輿、御得
度之規式別錄之、以故大概記之耳、相公此日申刻、自東山御成于三會、於山門
前卸台輿、則予前引、自東廊御成于昭堂、本尊彌勒御燒香、御三拜、吉阿彌獻御
香合取御扇子、次開山影前御燒香、三拜、次國王、氏神、父母等有御念相、御燒香、
三拜、或云、天照大神、四方、八幡、三拜云云、御成于方丈、先於御所間被待時刻、御

臨川寺大門ヨリ三會院ニ著ス

剃落ノ髮ヲ集證ニ預ケントス

昭堂ニ入ル

疎石影前ニ燒香三拜ス

方丈ニ入ル

成于御後架、御手水、天龍寺御前給仕周茂喝食勤之、以戌刻予白案內、則御成
于客殿、向影前御燒香、於拜席上三拜、正面御著坐、戒師月翁鏡和尙、剃手横川
三和尙、皆相國前住也、景岱侍者、周茂喝食及予奉近侍、調阿亦侍拭剃刀、藤中
納言永繼近前、取御立烏帽退出、御落髮了、御成于御所間、脫御俗服被著御法
服、予以萬疋折紙渡戒師、折紙兼日自伊勢守方出、又御成于客殿、影前御燒香
三拜、又御成于御所間、被脫七條衣、自客殿還御、戒師送禮、自西廊御出于山門
之外、被乘台輿、御伴衆大館刑部太(大)輔政重、伊勢守貞宗、同因幡守貞誠、同八郎
貞職、吉阿彌、大館殿御劍持之、走衆藤民部、駿河守政盛、後藤佐渡守親綱、某、藤
中納言永繼、博士在通、有宣、御物奉行調阿、所司代多賀豐後守高忠、於臨川寺
惣門之外警固、及亥刻還御、各退歸矣、
十六日、天快晴、於眞淨院齋、齋罷、横川、東雲及予、三興回洛、午後謁東府、白相公
言、明旦公武參賀、禪家亦可爲同時歟、相公曰、然也、又白三會主爲御戒師之故、
聊調御引物可致參賀、又横川和尙、鹿苑寺維馨和尙亦皆可令參賀、又白、横川
和尙剃除之勞被謝之俞乎、勝定相公御得度時、乾園藏主奉剃御鬚髮、其御布
施二千疋云云、然者以三千疋許之輕物被遣之可乎、於爰御香合一ヶ堆紅蛟

客殿ニ入ル

高倉永繼ノ政ノ立ヲ烏帽子ヲ取ル

落髮ヲ法服ヲ著ス

集證萬疋ノ折紙ヲ渡ス

周鏡ニ義政歸趨ス

多賀高忠警固ス

集證景三ノ勞ヲ謝セラレンコトヲ義政ニ請フ

義政景三ニ香合等ヲ贈ル

相伴衆義政ニ參賀ス　鹿苑院瑞智　相國寺伯升　鹿苑寺梵桂　周鏡橘子等ヲ義盆政ニ進ム

龍紋、御盆堆紅雁菊紋、自御倉被取出、以予被遣之、先往汲古語台命、遂往小補渡與香合同盆、以傳台命、喜色溢眉、乃調拜受折紙、予袖之歸矣、往鹿苑院云、明旦御相伴衆、東府御參賀事、可被相觸云云、三會院、横川和尚兩所事者、予可報之云云、又謁西府奉報明旦諸老參賀事、

十七日、天快晴、未明謁東府、（足利義政）月翁和尚進上之折紙、横川和尚拜受之折紙供台覽、御相伴衆鹿苑院惟明（瑞智）和尚、等持院桂室和尚、崇壽院錦江和尚、相國寺伯升和尚、等持寺高先西堂、蔭凉軒集證、戒師三會院月翁和尚、剃手眞淨院横川和尚、鹿苑寺維馨（梵桂）和尚等參賀、參賀衆一圓御對面無之、予以其意得可白諸老由有台命、乃傳之退出矣、月翁和尚所獻御引物水色襦子一端、堆紅花鳥紋盆一枚、小高檀紙十帖渡之白次、次往伊勢守宅、諸老同途不對面、又謁西府、無御對面、予往御末、書立諸老院號道號、以渡御乳人、予向諸老伸相公御謝詞、則乃皆退出、次往細川典厩屋形對面、遂就鹿苑院齋、齋了各歸矣、午後蜷川新右衞門尉爲伊勢守使、持戒師施物萬疋之送狀來、乃命秀康首座令請取之、

十八日、不參、戒師施物萬疋之正請取幷萬疋之御折紙、懸點自三會院送之、乃蜷川新右衞門尉方江渡之、可達汲古之旨白之、（略中）自三會院以侍眞梵傳首

義政使用ノ太刀直ヲ垂ノ北等ニ寄ス　野社ヲ進ス　集證ヲ親元ヲ得シテ度記錄ニ宗貞ニ送ラシム

義政集證ヲシテ平僧ノ帽子ヲ進メシム

座、見謝先日御成無爲、予勞煩、面謝丁寧、

廿日、早旦謁東府、奉返北埜御袈裟箱、箱中有藕絲小袈裟一頂、裏物唐錦、開山國師七條衣一頂、薄紅梅練、環玳瑁圓、條朽葉唐絲、鹿苑相公御得度時被著之、又黄色紗地方袍、七條衣一頂、勝定相公御得度時被著之、環象牙圓、條薄紅梅、鹿苑相公御寄進、方袍一頂、萠黄唐紋羅、勝定相公御寄進、方袍五頂、皆南蠻絹同色、以上九頂、又有紺紙金泥六喩經一卷入囊、乃召松梅院禪椿、於殿中見返之、又御太刀貞秀御物作一腰、御得度時所被刺之御腰刀、國吉御物作、同御直垂一具紫色被遣之、

七月三日、（略中）御得度記錄、以明叔晃藏主、遣蜷川新右衞門尉宅、可被達汲古云云、

廿四日、（略中）東相公御得度記錄、清書以遣之蜷川新右衞門尉宅、蓋以汲古之命也、

廿六日、不參、昨日自調阿方傳台命曰、平僧所著之帽子、老中少三品、五頭許可被供台覽之命有之云云、今朝以悰子謂調阿云、凡僧家之帽子者、自三月末四月始皆解之、自八月末九月初皆括之者也、然間只今時節一頭亦不可有之、雖

義持着用ノ帽子ヲ古老ニ尋ネシム

義持ハ奉公帽ヲ用フ

然先兩三頭令括之、以可供台覽、十日計可有逗留、以此旨可被達台覽云云、

廿八日、〇中略自東府被召僧、乃命悰子、悰子傳台命云、勝定相公御得度後、寺家御成時、所被著之帽如僧帽歟、奉公帽歟、可相尋老者之命有之、仍奉公帽一頭被出之、又勝定相公所被著帽、與此帽有大小高低耶可相尋云云、乃遣悰子於崇壽錦江和尚問之、和尚時他適、相尋于鹿苑惟明和尚、則勝定相公所被著之帽者奉公帽也、其地唐紗段子繻子等歟、其色或海松色、或淺黄、御裏高麗布歟、赤黄色也云云、寺家御成時被著之也、僧帽亦有之、無御用也云云、傳云、鹿苑相公亦僧衣僧帽有之、亂前於等持寺見之云云、

廿九日、不參、早旦崇壽錦江和尚來降云、勝定相公奉公帽事、委曲說與之、其面黑繻子、御裏赤色南蠻絹、寺家御成時必被著之、自餘色不覺之、僧帽亦雖有之不被用、於御所戲被著之耳云云、茂叔悰子（集證）往松梅院北野寶殿、所納之七條爲一覽也、禪椿出迎許一覽云云、

八月三日、〇中略勝定相公所被著之奉公帽事、以錦江和尚所被白白之、乃被命調阿、可括御帽二頭由有命、

四日、〇中略奉公帽三頭自東府被出之、此內可爲本哉可相尋于錦江和尚之命有之、

義政得度以來道服ハ墨染平絹ヲ用フ

彥龍ノ義政得度記

五日、不參、奉公帽三頭相尋于錦江和尚、則其內以小者可然由被白之、以悰子白于東府、

九日、〇中略晚來謁東府、以帽子三頭供台覽、一頭予、一頭丹、一頭桂、蓋老中少品之也、

十月廿九日、〇中略往東府、〇中略相公曰、御得度以來、御道服皆墨染之平絹也、染以爲平僧七條可歟、勝定相公御代如何、可相尋于錦江和尚之命有之、愚曰、普（義教）廣相公御代被出古御袷、命剏井染以爲平僧之七條、皆賜之由白之、相公曰、然者不及尋錦江、愚命染家可爲平僧之七條之命有之、又御袴精好之ス丶シ也、其如何、愚曰、練以爲袈裟者可也云云、想他日可被出御道服并御袴歟、

〔半陶文集〕三　東山相公得度記　代月翁師、

文明十七年乙巳六月望、東山相公披剃於三會塔下、因推舊例、自等（尋氏）持相公秉鈞軸以來、于今七葉、補衮功成、除鬚髮、被法服者、鹿苑、勝定二君而已、天山乃請佛（明應）日國師於府中、以爲戒師、絕海（中津）和尚剃其髮焉、顯山乃得度于北山等持院、々主元伯和尚爲之戒師、而事出倉卒也、故今大半、攀鹿苑相公之例、而於三會院

者、前未之聞、特出鈞命、蓋護教至誠也、某偶領院事、因以爲戒師、命不可逭、小補
横川老人剃焉、蔭凉龜(集證)泉西堂、東雲岱公、爲二侍者、先期蔭凉小簡記一會規式、
以具台覽、其言云、(文用和訓、今易文取意、)十五日、戊亥刻、台駕到三會院、山門頭税駕、自東
廊入昭堂、就本尊前、燒香三拜、次開山卵塔、燒香三拜、次念國王、氏神、父母、燒香
各三拜、或曰、天照太神與四方與八幡宮云々、兩說皆可、々從鈞旨也、次到丈室、
戒師在戶外接之、禮如恆、入室燒香於影前(開山像也、)三拜、席之前東鄉而坐、僧拜童
進剃巾盥器、置之座前、藤中納言入而分髻爲二、結之左右、其時戒師與横川和
尚入室、相公自解腰劍置側、於是戒師向影前燒香三拜、侍者取巾掛相公肩、片
紙書左右字、置兩邊、以湯灌頂、戒師取剃刀唱偈、(流轉三界中、恩愛不能捨、棄恩入無爲、眞實報恩者、三反、)相
公乃合掌、戒師退後、歛合掌、横川取其刀、剃除鬚髮了、戒師又起唱偈、(毀形守志節、割愛辭親、出家求聖道、所誓度一切人、三反、)一刀斷頂髮、相公又合掌、其後侍者却巾盥、相公乃就偏室、脫
俗服著法服、盥手了、披袈裟、又入室中、影前燒香三拜而出、戒師又在戶外、送禮
如恆云々、此夕凉月布地、嵐氣在襟、騎從群僚、候于廊下、烏臺諸司衞于門前、一
會嚴肅、四衆歡呼、雖云國師在日、蔑以加焉、遂賜某以金錢十萬、翌早與門下諸
老、詣東府謝恩、實一時嘉運也、昔崔趙公就徑山國一求出家、徑山云、出家大丈

夫事、非相將所能爲也、世以爲美談矣、侯王相將、誓爲佛法金湯者、古今幾多、然
而未見圓顱方袍、奉順佛制者、如宋王相號菩薩宰相、元趙相稱冠巾和尚、皆不
能脫離簪珮、是國一之所以折崔公也、吾相任國家安危者四十年、數戡禍亂、終
致昇平、今也毀形委身、推誠師門、嗚乎古人之所爲難者、吾相之所爲易也、非乘
願輪、焉到此奇哉、外護既如此、所希吾門人々箇々內護著力、振祖道於衰暮、以
報府恩之萬一也、略記顚末、貽諸來者云、

〔親元日記〕八　六月十五日、甲午、

一今夕東山殿御得度、御時取戌亥刻、
於三會院御得度、(御歳五十一、准三宮、義政公、御法名道慶、御道號喜山、開山正覺國師御拜塔、仍於當院有此儀云々、)
御戒師住持月翁和尚(諱周鎭、相國寺前住、六十七歳、)
剃除役横川和尚(諱景三、相國寺前住、五十七歳、)
御戒師御施物萬疋(以納錢方渡申之、)剃除役御香合、御盆
御供衆
大館刑部大輔殿、(政重、)伊勢守殿、(貞宗、)伊勢因幡守殿、(貞誠、)伊勢八郎殿、(貞職、)
吉阿、

走衆　走衆、藤民部、駿河守殿、政盛、後藤佐渡守殿、親綱、藤中納言殿永繼、御參、在通、有宣祗候、調阿參侍、御物已下之所役、

警固　御門警固所司代多賀豐後守、高忠、

集證ノ記錄　蔭涼軒集證西堂、巨細被記錄、一卷有之、

十七日、丙申、

得度ノ禮　一御得度御禮有之、

廿五日、甲辰、

土岐成頼　一土岐(成頼)殿より御得度御禮、

御太刀、明吉、千疋、此千疋七月三日信乃(諏訪貞通)より渡之、同五日御所御成、御一獻料云々、京御所御太刀、行安、

廿九日、戊申、

伊庭貞隆　一伊庭(貞隆)御得度御禮、御太刀、恒清、千疋、京御所へ御太刀、定俊、

七月三日、壬子、

六角高頼　一同方(六角高頼)より御得度御禮、御太刀、定行、千疋、京御所樣へ御太刀、盛光、

四日、癸丑、

多賀宗直　一多賀兵衛(宗直)四郎御得度御禮、御太刀、直國、千疋、京御所へ御太刀、長光、

十七日、丙寅、

一御得度御禮錢三千疋也、三上方へ渡之、

廿七日、丙子、

大内政弘　一東山殿御木屋修理料七百疋、爲御得度御禮大内(政弘)進上千疋内也、右衛門尉(國久)より渡之、

〔古文書〕九　〇内閣記錄課所藏

小槻雅久注進案義滿得度ノ記錄　(端裏書)「官務雅久所進記案文明十七」

應永二年六月十九日御出家御暇事、今日以萬里小路大納言嗣房卿、日野大納言資敎卿等、被申禁裏之處、如此懇切御申之上者、一向不可有御抑留、當年計可被待申之由勅答、重御奏聞云、有御用者、雖爲何年被仰下、至朝要之期可待申、無其儀有御免之由被仰下條、可畏入之由、再三御奏聞之間、此上事重難

義満ノ命ニ依リ得度セル人々　四辻季顯　中山親雅

斯波義種

被仰、然而餘無念、今暫可有御延引、於御免者不可有子細云云、

廿日、卯剋淮后（義滿）前太政大臣從一位、於北御所御得度、御戒師相國寺住持佛日常光國師、御剃手絕海（中津）和尚也、於夢窓國師御影前被遂、其節先著御道服、懸御袈裟給、不著御烏帽子給、御拜神宮、次拜四方給、次拜八幡宮給云云、同時等兄喝食剃髮事訖、四辻前大納言季顯卿、中山前大納言親雅卿兩人、依仰、於御前出家、戒師絕海和尚云云、兩卿隨身直綴袴等、於御前著用之、公武諸人馳參更不及申入、管領以下雖祗候、無御對面、但於管領者兩三ヶ度參上、入夜不及掌燈有御對面云云、

廿一日、今夕修理大夫義種（斯波）、於北御所落飾、入道大（太）政大臣殿令剃之給、則授戒給云云、御布施萬疋、翌日進上之、

七月二日、渡御管領左衞門佐義（斯波）將朝臣亭、御得度之後御出始也、御道服御乘輿〜〜、

廿四日、管領義將朝臣（今日被正四位下、任左衞門督）、於北御所得度、入道前太政大臣殿令剃始給之後、絕海和尚被剃之、今川右衞門佐仲秋今日同落飾〜〜、

廿六日、入道前太政大臣殿御得度以後始御參內〜〜、（○義滿出家ノコト、應永二年六月二十日ノ條ニ見ヘ、）

義滿ノ先例

戒師ノ布施

〔古文書〕（二十）○內閣記錄課所藏

（端裏書）「官務不著御烏帽子給、御拜事御不審之御返事、文明十七、十三」

鹿苑院殿御得度時、御拜不著御烏帽子給事、著御道服、被懸御袈裟、御拜神宮、三度、御大童之體、次拜四方給、次拜八幡宮云云、於喝食者可拜春日社之由、被計仰云云、

以上一帋、

官務狀

鹿苑院殿御得度、先著御道服、被掛御袈裟、御大童體三度御拜由候、已被掛御袈裟上者、御烏帽子被撤之條、不能左右歟、非神事入齋之儀候、間勿論候、舊記一通寫進申候、以前注申候分、所詮不載此注候、可得御意候也、恐々謹言、

六月十三日　雅久

〔古文書〕（十二）○內閣記錄課所藏

東山殿樣御得度御戒師（三會院翁和尚）、御施物、

文明十七年六月十七日被渡遣之、

萬疋

〔古文書〕十八　○内閣記錄課所藏

（端裏書）「文明十七六十七御施物事　　（紙川親元）不白　□□

萬疋可渡進之由被仰候、此者白井、申付候て進候、何方へも可被渡遣候、尙期

面上候、恐々謹言、

六月十七日　　（花押）

不白　凡下

〔古文書〕二十四　○内閣記錄課所藏

（端裏書）「傳奏御狀東山殿御得度已後御奉加帳なと」

就奉加帳之事、内々被尋下候、可爲沙彌御判歟之由存候、仍申談大閤（二條持通）候之處、

所存同前候、此趣可得御意候、恐々謹言、

六月廿一日　　伊勢守殿

〔古文書〕二十二　○内閣記錄課所藏

傳奏勸修寺敎秀書狀奉加帳ニ沙彌ト署名

得度ノ禮

義尙

斯波義寬

山名政豐

赤松政則

京極政經

朝倉氏景

義政喰乞ニ參内ス

御得度御禮事、文明十七六、

御太刀、持、千疋、　室町御所樣御太刀、持、

兵衞佐（斯波義寬）殿　飯彥右

○山名（政豐）殿　村上左京

○赤松（政則）殿　上原

○大内（政弘）殿　競秀

○土岐（成頼）殿　齋越（齋藤基廣）

○六角（高頼）殿　後藤

○京極（政經）殿　下河原（高盛）

朝倉（氏景）　三兵（堀元秀カ）ニ申了、

○伊庭（貞隆）

〔後法興院政家記〕十　六月十五日、甲午、晴、東山准后今夜於嵯峨三會院被落髮云々、昨日禁裏江被申御暇、是鹿苑院御例云々、此分傳奏來相語、去十二日當年始出仕云々、仍今日爲禮來也、

（頭書）「後聞、東山殿御法名道慶云々、道號喜山云々」

近衛尚通ヲ及ビ義尚ニ參賀ス

十七日、丙申、晩景雷雨、東山殿御落飾御禮今日也、亞相（江藤尚通）、東山殿幷室町殿江參申了、

〔實隆公記〕八　六月十五日、甲午、晴、○中略抑今夜於嵯峨三會院東山殿御落飾、

細川政國剃髪ス

戒師月翁和尚、剃手横川云々、政國（細川）朝臣今度落飾、其外武家衆小々在之、

義政三條西實隆ニ直衣ヲ贈ル

鹿苑院殿ハ常光（明篤）國師、相國寺住院之時御戒師云々、

十六日、乙未、○中略自堀川局東山殿御服申出之由被命、去年御會之時粗申了、今不慮之儀大幸〳〵、

十七日、丙申、晴、○中略歸宅之處、自藤中納言許、以使者東山殿所被下之御服冬御直衣、送給之、祝著之由報了、及晩參東山殿、申次大舘刑部大輔也、于時大樹渡御時分也、小時退出了、歸路參室町殿、向藤黄門許、

今日節朔衆大略兩御所參賀云々、

惣並御禮明日云々、

抑御服拜領事自愛無比類、但宿德御服之間、不可能著用歟、如何〳〵、

〔親長卿記〕十六　六月十五日、晴、今日東山殿於嵯峨三會院有御落飾、一向禪家沙汰也、

〔十輪院内府記〕中　六月十八日、天晴、極暑如炎、早旦參賀東山殿、是一昨夜

義政ニ參賀ノ人々

御落髪御禮也、大閤、二條持通公、九條前關白、余、通秀公、德大寺前内府、實淳公、内府、政長公、近衛大納言、政通卿、以上裝束、德大寺烏帽子直衣、自餘小直衣等也、源大納言、雅行卿、姉小路宰相、基綱卿、直垂、大乘院、妙法院、花頂、毘沙門堂等僧正計也、昨日東面衆少々參賀云々、次參室町殿、兩御所共無御對面、御太刀長氏、兵權少輔、付永康了、代々御得度不同也、鹿苑院於北山御第被遂之、勝定院於等持院有此儀、今度於三會院御落飾、悉皆禪家沙汰之由、花頂僧正被演說了、

〔政覺大僧正記〕八　六月十五日、甲午、

一今日東山殿御得度也、嵯峨於三會院有其儀、戌刻也、

十六日、乙未、

一御禮事傳奏ヱ被尋處、内々衆八十七日、外樣衆八十八日由申、

十七日、丙申、

一今日内々衆參賀云々、夕部室町殿御參賀、御板輿、騎馬五騎、遁世者一人、

一清賢法眼、力者等令上洛、衆以下召寄、

十八日、丁酉、

一早朝東山殿參、大閤樣御參、御板輿也、殿上人、一人板輿、予板輿、清賢法眼直綴絹袴、乘

義政義滿ノ例ニ依リ人々參賀ノ對面セズ

馬、力者二人、竹千代、宮壽上下ニテ内々跡ニ召具、申次藤兵衛佐、今日參賀、二條殿、大閤、九條前關白、近衛、御方、(公カ)半家衆、花山院、中院、門跡衆、妙法院、花頂、予、其後室町殿參、東山殿任鹿薗院御例、無御對面、金覆輪一振進之、悉以其儀也、

〔大乘院寺社雜事記〕九十八 能登岩井兩河用水相論條々十八枚目裏文書

政覺書狀

專一可申ゐすれ候、大口其方よて御借候て、次こ可被上候、大なるゐ御用候、ちと少候とも必々可有御上候、御所さまより御書進候、わさと人を下候、今日十五日東山殿御得度治定候、御禮事内々衆い來十七日、外樣衆い十八日御座候由、傳奏より被申候、戌剋於三會院、一共衆事被仰付候て可被上候、以注文申入候、十八日群參候間、其已前必々罷上候樣可被仰候、

義政大館政重伊勢貞宗ノ出家ハ許サズ

一東山殿御得度定可入道人數事、藤中納言(永藤)、是ハ廿三日ト申候、○永繼薙髮スルコト、本月是月ノ條ニ見ユ、てんきう、其外武家六人、大館ト勢州トハ不可叶之由仰候、

一○中略猶々共衆事堅可被仰付候、十六日ゐ十七日ゐよ必々上候樣可被仰付候、急候間、先以一筆申入候由、可令披露給候也、恐惶謹言、

六月十五日　政覺

公武ノ輩用家ヲ願フ者アリ

如意壽とのへ

十八日御八講衆上洛こい關入ましく候間、大和瓜人夫共被仰候て、三四荷可被上候、酒事外大切候、春辰方へちと申遣候、十八日こいいゐ程もゑしく候、

一(ウハ書)

門主へ參如意壽とのへ　政覺

〔大乘院寺社雜事記〕九十七 六月十四日、

一昨日自京都音信、十五日東山殿於三會院可有御得渡(度)云々、

十五日、

一自京都書狀到來、今日戌刻於嵯峨之三會院、東山殿御得度(御法名道慶)、十七日内々御禮可有之、十八日外樣群參之由、自傳奏相催之、幸在京之間、寺務(致覺)可參賀云々、公武輩同可出家之由、伺申者共有之云々、

廿一日、

一十八日群參、東山入道殿、無御對面之儀、是鹿薗院殿御例之由云々、比興事也、

廿六日

一去十八日東山殿御禮御參賀、二條大閤、九條前殿、陽明御方、以下半家等少々、青蓮院(尊應)、妙法院、花頂、寺務以下門跡少々、任鹿薗院御例、今度ハ一切不及御對面云々、進物御太刀、金、次室町殿ニ各參賀、御太刀、

一御得度方公用二千貫、布施下野守ニ被預置之處、悉以公仕之間、無力今度御借下伊勢守計略七百貫計云々、仍御戒師以下役者御布施等、一向不及御沙汰、今度俄ニ御得度ハ奉行近習之事故也、東山殿ハ奉行方、室町殿ハ近習方也、無事近習理運ニ御成敗、○幕府奉公衆、奉行飯尾元連等ト班ヲ爭フコト、五月二十三日ノ條ニ見ヱ、

得度ノ公用

戒師以下ノ布施ハ沙汰ニ及バズ

俄ノ得度ハ奉行近習ノ爭ニ基ク

〔大乘院日記目錄〕六月十五日、酉剋、東山殿於三會院御得度、法名道慶、

十八日、御禮在之、不及御對面、北方殿御例云々、

〔東寺百合文書〕○(けヵ)廿一日、山城、方評定引付、文明十七年乙巳、同(六月)廿日、在僧坊、下地、

一就東山殿御落髮御禮ニ寶輪院可被參之由衆儀了、(議ヵ同ジ)御禮物ハ御太刀計也、

同日、在僧坊、北

一東山殿御得度御禮ニ被參事、寶輪院被申云、先夜ヨリ腹煩出來之間、參事不可叶通被申候間、次藹次被寶生(衍カ)院被申處、是所勞之由被申ニヨリ、次寶

東寺義政ニ參賀ノコトヲ議ス

緣可參之由衆儀之間、無力領掌了、御禮物御太刀計治定了、

禮物ハ太刀ノミ

同廿三日、在僧坊、北

一去廿一日、東山殿御得度御禮參申了、申次伊勢之因幡(貞藏)、何方ヘモ無御對面之由申間、罷歸了、

義政何人ノ參賀ニモ對面セズ

〔足利家官位記〕慈照院殿義成、后改義政、同(文明)十七年六月十五日、御落飾、御法名道慶、道號喜山、

〔室町家傳〕慈照院殿元義成、改義政、同(文明)十七年六月十五日、御落飾、御歲五十一、御法名道慶、御道號喜山、於嵯峨三會院有此事、戒師月翁和尚、剃手橫川長老、

法號道慶ヲ改ムトノ說政國

〔華頂要略〕百三十四上、武家第一目錄、室町將軍家之傳部、義政始義成、同(文明)十七乙巳年六月十五日祝髮、改道慶、號喜山、細川右馬頭道慶、

〔歷名土代〕從四位下源政國、同(文明)十七六十五出家、

〔大乘院寺社雜事記〕九十七、六月十五日、

一○中略細川右馬頭(政國)可入道云々、

〔大乘院日記目錄〕六月廿三日、○中略細川右馬頭得渡(度)云々、

〔尊卑分脈〕十、清和源氏、細川下、義康、政國、實持春子、或成賢猶子、右馬頭、從四下、文明十七六十又(五)

法名　出家、法名道勝、號禪昌院、

〔親元日記〕八　七月八日、丁巳、

義敏ノ法名　一左兵衛督殿（斯波）義敏、法名道海、從三位、四十九歲、御得度、

九月卅日、戊寅、

薙髮ノ禮　一左兵衛督殿道海、爲落髮御禮、

東山殿へ御太刀、糸、千疋、（兼日より納給之、十月十四日、御庭河原者ニ被下之、以右京亮殿御一行、卽渡遣之、奏者長谷川源四郎、）

〔蔭凉軒日錄〕七月廿八日、○中略　謁武衛第賀三位殿（斯波義敏）得度、不面之、

集證義敏ノ得度ヲ賀ス　〔尊卑分脈〕十義清流　清和源氏下斯波　義敏　從三位、右兵佐、左兵衛督イ、　文明十七八出家、五十七イ

一才、法名道海、

〔鎌倉大日記〕文明十七年七月八日、義敏出家、法名道海、京都管領

〔重編應仁記〕八　常德院殿御政務事

○略上　文明十六年、斯波治部大輔義敏ヲ管領ニ任セラル、其後此人剃髮シテ道海禪門ト稱シケリ、

〔增補筒井家記〕乾　筒井氏五代之傳記　一三代目明舜房法印順盛

筒井順盛義政ノ得度ヲ賀ス　武田國信薙髮ストノ說　同（文明）十七年六月三日、義政公落飾玉フ、順盛上リ賀スルニ、馬代金ヲ獻セリ、

〔諸家系圖纂〕一之二下清和源氏　國信（武田）、伊豆守、治部少、大膳大夫、正四下、法名玉華院功林宗勳、○中略　安藝若狹守護職、○中略　同（文明）十七年六月、東山殿祝髮時同剃髮、

良鎭美濃ヨリ參會ス　曼殊院ニ就キ、近江竹生島ニ受法ス、

〔大乘院寺社雜事記〕九十七　六月廿六日、

一竹內（曼殊院良鎭）尺子宮御受法、去十五日於竹生島在之、自三乃國門主大僧正（良鎭）被參會云々、

○良嚴、曼殊院ニ得度スルコト、十六年三月二十七日ノ條ニ見ユ、

西室祈雨三十頌　十六日、乙未、炎旱ニ依リ、興福寺、雨ヲ祈ル、尋デ、奈良地下人モ亦之ヲ祈ル、

一萬度立願　〔大乘院寺社雜事記〕九十七　六月十六日、

一自今日西室三十頌、祈雨也、

一一萬度立願云々、祈雨、

十七日、

大和高山祈雨相撲　一高山北里相舞云々、祈雨、明日南里云々、

廿日、

一丑寅方より書狀到來、中綱持來、西室祈雨三十頭、佛地院方役事被仰付之、可目出候、以口狀承候、又仰了、光林院ニ方々儀相尋、皆以如此申、同時ニ六方指合事候間、無仁體方ハ其子細申述也云々、妙德院より書狀之次有之間、院家も無之、人々も無之、得其意可進旨仰遣了、

一龍花院方より書狀到來、御留守供衆五大院三十頭方役ニ、及度々雖催促之、無出仕上者、御留守供事、餘人ニ可被仰付云々、則此子細仰遣五大院方了、畏入、六方同時之指合之間、不及了簡、其子細申遣き、尙々不可有緩怠旨申之、仍其書狀遣一藹代方了、

五大院三十頭

廿二日、

一西室三十頭、至昨日不雨下、自今日三方入初之、高山、秋篠、招提題、龍王、至五月十五日雨下、其後六月九日夕立計也、田舍ハ所々夕立有之云々、

地下人立願室生寺長老職ノ爭ニ依リ勘退轉ス

〔大乘院寺社雜事記〕九十九

一〇中略五月十五日雨下、六月九日雨下、至今日二十二日不雨下、寺門祈雨色々始行之、三方入等如例、地下人立願等又如例、猶以不雨下、珍事、所詮室生山長老職事、不動院、愛染院兩律僧相論事在之、此兩三年無長老、是併學侶成敗有相故也、（脩脫カ）隨而彼寺如無ニ成下了、衆僧等悉以逐電、一寺成廣野了、不退之懃行一向無之、本朝無双在所也、珍事〳〵、不可在之、隨而龍王御腹立歟、去年も稻妻無之、當年又不雨下、旁以學侶惡行、珍事〳〵、

龍王ノ怒

三日、八專、

一寺門立願自今日至明日午貝、其內雨下者、大般若頓寫可有之云々、此故歟、今夜世間カキ曇、如霧ナル雨下ソヽキテ則晴了、無其實者也、或四日至卯刻立願歟云々、

雨下ラバ大般若經ヲ頓寫セン霧雨降ル

六日、

一今日山內千座講問有之云々、祈雨條々重而可尋記之、

七日、夕立、

一今日南北地下一萬度云々、則雨下、

地下人一萬度立願雨降ル

八日、

一地下祈雨相撲事、來廿四日必定、幸德井（友重）勸進云々、衆中粉骨也、三萬度、一萬度、皆以衆中成敗也、

祈雨相撲

廿二日、

一爲祈雨千卷三十頌讀之、導師清宣、

廿三日、夜大風、小雨、

一良家衆於社頭大般若轉讀之、爲祈雨也、於櫟本館也、各付衣五帖、本承仕一

良家衆春日社頭大般若轉讀ス

藹懃之、一獻ハ一藹東門院申付之、茶湯ハ東林院可沙汰之由申云々、五人

會合云々、東門院、西南院、東林院、光明院法印、喜多院僧都云々、各取口風情

召寄之、東林院同前、

廿四日、小雨、風、

一南北郷民等於馬場院相撲在之、百廿番之内、近來荒郷共有之、則在所ヲ相

地下人馬場院ニテ祈雨相撲ヲ催ス

加、或増番數云々、奈良中令落(參)以外事也、當年發手北郷ニ相當、兩方各度也

云々、文明四年五月廿一日相撲打勝在之、其後ハ又當年在之、就中次第事、

仰沙汰衆召寄寫之、强杉原折紙二枚續之、

相撲次第

定　祈雨相撲次第事

第一番　南市幸井　一番　第二番　京終花蘭之南頰半、四番

第三番　福智院　二番　第四番　讃坊下殿辻子下高畠　二番

第五番　西御門東頰二番十地院矢　一番　第六番　椿井極樂坊　一番

第七番　内侍原　一番　第八番　藥師院積藏院　一番

第九番　高御門　一番　第十番　鳴川　一番

第十一番　西寺林　二番　第十二番　内院　二番

第十三番　高天西御門　二番　第十四番　東里　一番

第十五番　北市　五番　第十六番　二條淨光院沙汰　一番

第十七番　下三條　三番　第十八番　登大路矢　一番

第十九番　上三條林少路　三番　第廿番　辰巳辻子東寺林　一番

第廿一番　東桶井一代畔大豆乙七月西桶井春日見二巳二　三番　第廿二番　角振　一番

第廿三番　新在家南矢　一番　第廿四番　供納堂密嚴院　一番

第廿五番　北室　一番　第廿六番　梅薗吐田　一番

第廿七番　井上　二番　第廿八番　孝養院　三番

第廿九番　押小路　二番　第卅番　餅殿　二番

第卅(マヽ)番　貝塚中辻　二番　第卅一(今)番　今御門元林院一、半也、二番半

第卅三番　西城戸　二番　第卅四番　南法連　一番

第卅五番　無縁堂　一番　第卅六番　阿小屋川　二番

第卅七番南室　一番
第卅九番東阿ミタ院北一番　畔大豆今御門一
第四十一番松谷　矢　一番
第四十三番下北少路　二番
第四十五番橋本　一番
第四十七番柚留木　一番
第四十九番西野田　一番
第五十一番藥師堂　一番
第五十三番　中尾窪　頭塔之西頗　一番
第五十五番　勝願院惣南院寄　上高畠　二番
第五十七番　西御門東頗一代　東北野田　矢　一番
第五十九番宿院　二番
第六十一番垂井　一番
第六十三番　中院　庫下　一番
第六十五番西松林院　新在家　北初　一番
第卅八番小南院　一番
第四十　(齊院カ)　氷室前　タモンキンノスシ　一番
第四十二番坂今辻子　六番
第四十四番脇戸　花蘭北寄　一番
第四十六番東城戸　三番
第四十八番北法蓮院　三番
第五十番河上　二番
第五十二番新藥師　辻内ヲ入　一番
第五十四番紀寺　三番
第五十六番廣岡　二番
第五十八番貝塚南　二番
第六十番　西　北　阿ミタ院　二番
第六十二番琳興院　一番
第六十四番　尊光院　東野田　一番
第六十六番　鵲　南　北　二番

第六十七番光明院　一番
第六十八番下御門　一番
第六十九番　東林院　塔内　一番
第七十番小西　一番
第七十一番十輪院前　一番
第七十二番東北院　一番
右所定如件、

文明十七年七月廿四日始行之、

今日打勝無之、百二十番儀計也、自今日雨下、風、

八月十二日、大風、大雨、

一大鳥居左右之柱ニ落書在之、去月末比事也云々、方學侶不律無道進退共念比ニ書之、仍色々祈雨雖有之、一切無其德、地下者共祈雨ニ雨下、勝賞以外之由、以皓文書之、無念之間可及糺明之由申合云々、無用事也、凡書立分濟爲一無相違事共也云々、

〔大乘院寺社雜事記〕　百　十月一日、

一當年依炎旱、於立所經營等新制也云々、自餘法事儀同前云々、

〔大乘院日記目錄〕　四　六月廿九日、五月十五日雨下、其後六月九日夕立如形、日照以外也、祈雨種々沙汰如例、

雨降リ始ム

春日社大鳥居ニ落書六方學侶ノ無道進退ハ祈雨ノ妨

炎旱ニ依リ學侶新制ヲ定ム

七月十八日、依炎旱、學侶新制定之云々、

廿四日、南北郷民相撲有之、於馬場院也、

〔政覺大僧正記〕八　六月晦日、己酉、炎旱、珍事也、

七月一日、庚戌、

西室ニテ一切經讀誦

一雨乞、寺門一切經西室ニテ讀之云々、

三日、壬子、

一榛(相撲)今日治定之由、堯善申、

京都モ亦旱ス

〔親長卿記〕十六　六月四日、晴、近日炎旱云々、

七月十八日、雨下、甘雨、

〔實隆公記〕八　六月十二日、辛卯、晴、入夜雨降、雷鳴、當年炎旱暑熱超過于例年者也、聊一洗懷襟了、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　七月十七日、めつらしう雨ふる、

〔東寺百合文書〕○けゑ(餘)守八幡宮供僧評定引付文明十七年乙巳　同(七月)十六日、○山城

東寺用水ノ爲メ井ノ溝ヲ掘ル

一就連日炎旱、當庄爲東西用水井溝堀之畢、仍井料之事、名主代雖引替、至于今者不及了簡、所詮爲御本所、只今可預御下行之由注進了、折紙披露之處、

一萬體御摺寫

衆儀(議)云、井料之事者、名主百姓之爲役之間、本所不可有存知之由申之、

二十日、己亥、尊敦(舜尭)親王、慈慧大師像ヲ摺寫アラセラル、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　六月廿日、○中略　二宮(舜敦親王)の御ゝさ、萬さ井の大し御ひとり御れしあり、をる〳〵と御さゝあまてめてさし〳〵、

二十一日、庚子、島津武久、大隅末吉ニ次シ、島津久逸ヲ日向飫肥城ニ攻ム、

是日、伊東祐國、久逸ヲ援ケテ之ヲ拒ギ、遂ニ戰死シ、久逸、櫛間城ニ走ル、

尋デ、武久、之ヲ攻メ、和シテ兵ヲ收ム、

〔文明記〕○日向　○上略　翌日十三日(六月)ハ末吉ニ御著有て、則薩州(島津國久)匠作(同忠廉)、讃州(北郷敏久)都之城より御參有て被請御意候、同十七日、先勢として讃州御幡候預られて、椛山次郎(長久)太郎、加治木左衛門(左衛門佐)、嶋津羽州(忠徳)、佐多宮内少輔、伊集院三郎右衛門、肝付、寢彌(爾寢)種子嶋、村田肥前守(經安)、其御内之方々同道して、都合二千、白木俣を打越、酒谷之内中山茂權現ゟ尾ゟ陣を取、同十八日ゟ薩州、同三郎太郎(重久)、同中務太(通久)夫、匠(輔下同ジ)作、同兵部太輔、都合千五百ゟ而打越、同前ゟ陣候取、同日ゟ山東眞幸(之カ)ニ大勢打出、栗嶺内霧嶋、其外所々候放火をる所候、嶋津源左衛門(忠堯)ゟ手乃物共渡合て戰程ゟ、敵二三人打取て、其クヒ候末吉ゟ御座所へ進上有て、同廿日

島津國久同忠廉等武久ノ陣ニ來會ス

先鋒北郷敏久等日向酒谷權現尾ニ陣ス

國久等モ亦敏久ノ軍ニ合ス

敏久等ハ蔣田ニ陣ス

久逸等五陣ヲ構フ

惣陣大龍寺陣田間陣野頸陣

上ノ手ハ國久等ノ軍

中ノ手ハ敏久等ノ軍

下ノ手ハ忠廉等ノ軍

新納忠則等野頸陣ニ向フ

四所齊シク攻ム

ゐ、飫肥之内コモムタと云所ゐ陣を取寄程ゐ、敵之間六町計也、先面ゐ指向處れ陣五ゐり、惣陣こゝ吏部(島津久逸)、新納駿(是久)河守、伊東祐國、北原長門(左近)守、大龍寺陣と之伊東次郎五郎、田間陣こゝ、伊東次郎太郎、長倉修理亮、野村勘解由左衛門、佐土原六郎三郎、野クヒれ陣ゐ之、伊東次郎、都合陣衆四千ゐて待ゐく間、兼而れ談合ゐ之、長石れ麓れ川原面を先攻ルゐ相定、爰を匠作請取有て、可被破之由雖有と、薩州れ手當を被請取也、上の手をゝ、薩州を大將として、同三郎太郎、中務、佐多宮内少輔、川上十郎左衛門、伊集院左馬助、同石谷、山田太郎左衛門、末弘、蒲生刑部允、桑波多右馬助、鳥取播磨守、野田、大寺九郎を先として都合五百、川原面ゐ被指向、中れ手をゝ、北郷讃州大將として、椛山、同次郎太郎、肝付、同三郎次郎、彌(禰)寝、村田肥前守、伊知地(地知下同ジ)周防介、飫肥伊豆守、肥後、石井、梶原、都合二千ゐて被指向、下れ手をゝ、匠作を大將として、右馬助、出羽守、右衛門佐、同兵部少輔、伊集院三郎右衛門、山田忠里、入來院、吉田、平田、荒野屋周防介、同越中、肝付三郎五郎、大寺恆吉、都合千三百、惣陣ゐ被指向也、新納越前守、同七郎右衛門、同安藝守、和泉隱岐守就先として、都合五百餘騎ゐて、野クヒ伊東次郎れ陣ゐ被指向也、去程ゐ四ヶ所一同ゐ雖責寄と、敵猛勢れ上、構

國久野頸ノ陣ニ援兵ヲ遣ス

上ノ手ノ戰

中ノ手ノ戰

下ノ手ノ戰

等堅固して無可破樣も由、薩州より以伊知地周防介を匠作へ云送候、かくてゝ取合依難叶、匠作より伊集院三郎右衛門を使ゐて、上れ手ゐ被申樣ゝ、今日於此取合こそ、城れ難儀難延候間、先野頸へ一勢上てゝと有ける程ゐ、薩州則領掌ゐて、伊集院左馬助ゐ一勢さしそへ、長石れ陣へ野伏をゐらく被懸、其隙ゐ川原面を攻破て、數百人取入處を、吏部、新納駿河守、野村勘解由左衛門佐待請て戰程ゐ、薩州乃手切負て、猿渡筑前守、同刑部少輔、本田又二郎、飯牟禮又九郎、山田、川俣小次郎ゐんとゝ云者共被打て、しとろゐ成處を、薩州れ父子、同中務太夫、佐(阿カ)多刑部少輔、川上十郎左衛門、鳥取播磨守、伊知地越前(ゑカ)れ先として、返合て戰程ゐ、切勝て駿河守、鎌田、同杢助、野村ノ次郎五郎を始として數十人打取、三郎太郎、鳥取深手を負て引退處を、中れ手北郷、椛山、村田肥州入替て被戰程ゐ、北郷次郎五郎能武者打取て、敵を田間れ兩陣へ切籠、去程ゐ、下れ手も、嶋津兵部少輔、阿多刑(公久カ)部少輔、北郷助太郎、知覽治部左衛門、梁瀨加賀守、守護れ手も荒野屋周防介を初として、楠原惣門口ゐ責入て被戰程ゐ、中龜五郎四郎、長濱掃部介兩人被打てゐとろゐ成處を、匠作、右馬助、出羽助(守カ)、右衛門佐、伊集院三郎右衛門、入木院(來下同ジ)又五郎、吉田治部太夫、日置(鋪下同ジ)

祐國等戰死ス

美作守、其外守護れ手の面々不殘かけ入て闘程ゟ、中れ手一所ゟ成合て、互ゟ火をかけ戰間、伊東祐國、北原長州、長倉修理亮を初として、親類内れ者以下數十人被打て、相殘れ人衆盡惣陣へ切籠、去程ゟ、落行方れ通路爲、知覽、入木院又五郎、吉田治部太輔、北郷源次郎、羽嶋周防介、北村宮内少輔、野クヒへ指廻を間、爰ゟても太刀打有て、敵數十人打留、吏部い初度れ川原面れ合戰ゟ、手れ者共數十人被打て、自身も深手餘多被負、田間れ陣へ懸入て被見者、

久逸重傷ヲ負フ

祐國父子共ゟ早打死之由申者有ける間、直ゟ如南郷れ被引退間、帖佐れ手ゟ餅原駿河守者案内者成ける間、一勢制て富ケ嶺へ被上程ゟ、落行敵れ先を被取切て、足を煩處ゟ、桃山馳付て、自身太刀打有て、武者餘多打留む、卷城れ衆も、同前ゟ馳合て合戰をる人衆れ内、南郷治部左衛門、淵之江小二郎手負て引退處を、伊東又二郎しつもるひして、其勢三百餘騎ゟて、大龍寺れ麓乃河原ゟ引たるを、是を見て、匠作、右馬助、出羽介、伊集院三郎右衛門、肝付美作守馳付て、太刀打ゟ及處ゟ、伊東又二郎兼而より近江守へ被申入子細依有ゟ、可被降參之由被申出ける程ゟ、如何可有哉との談合最中をも不知、若武者共切てかゝる程ゟ、太刀打有て數人打留、伊東又二郎い深手三ヶ所負て行方不知落行、又野頸ゟを太刀打有て、末弘尾張守、大寺彦左衛門被打て引退處を、伊集院左馬助、新納越前守乃手れ者共責入て戰程ゟ、伊東次郎深手負て行方不知落行、飫肥、卷城れ衆い田間兩陣ゟかゝる、大龍寺れ陣、宮藪四ヶ所れ陣ゟかゝり、太刀打ル程ゟ、田間れ陣ゟ懸りをる人衆切負て、玉利次郎右衛門、肥後郷右衛門、同帶刀、上井筑前守、岩切甲斐介、鳥取源二郎、竹之井又十郎、都井助太郎、加藤、草之瀨、屋千代（ケカ）、入佐孫六、木之尾、繩下六郎左衛門、同子助五郎、中間又九郎、八幡れ大宮司父子打死を、新納四郎れ手ゟ隈江伊勢守、東又七兄弟を初として、手負數十人有、然ゟ間、敵陣十三ヶ所同時ゟ崩畢、切懸敵れ頸百三十、切捨六百人と注せり、去程ゟ、各々陣へ歸て、翌日廿二日ゟ、如酒谷れ被打歸支度有て、同廿五日辰れ尅ゟ打立て、櫛間ゟ押寄て、其儘熊田原ゟ陣を取、同廿九日ゟ、忠昌公を末吉より直ゟ御出陣あり、去程ゟ、三ヶ國皆同ゟ和與可然候（とカ）談合有ける、其筋目を吏部ゟを、和與可然乃通薩州取切て被申間、忠昌も御承引ゟて、七月二日ゟ、吏部ゟ御對面あり、同三日ゟ城を去渡被申て、伊作ゟ可被移ゟ相定て、翌日四日ゟ、忠昌公其外一家中如末吉れ被打歸て、同八日ゟ麑嶋へ御歸著あり、〇薩隅日内亂記、異事ナキニ依リ略ス、

同次郎モ負傷シテ逃ル

武久ノ軍ノ死傷者

斬首ノ數

敏久等酒谷陣ニ歸ル

熊田原ニ陣ス

武久末吉ヨリ著陣

久逸ト和ス

久逸ヲ伊作ニ移ス

伊東又二郎負傷シテ逃ル

卷ノ城兵等麓戰ス

祐國楠原ヨリ出馬ス

祐國ノ奮戰

部下ノ戰死者

〔日向記〕三　於飫肥祐國御戰死事

○上略　無程六月廿一日ニ、大勢田間ノ陣、河上ノ陣、長吉陣、野首ノ陣（麑下同ジ）ニ押懸タリ、田間、河上ノ人數出合一戰ス、一番二番三番戰迄ハ切返シテケリ、祐國公モ楠原ヨリ御馬ヲ出シ、田間ノ陣ニ懸玉ヒシニ、井手ノ上ノ陣衆横入ス、然ル間、先本陣ニ引籠セ玉ヘト申ヤ否、敵大勢押懸手痛ク戰ヒシカハ、祐國公ヲ眞中ニ奉取籠、元來此殿ハ馬上ノ達者、矢繼早ノ手聞ナレハ、少モ不疾、敵進テ近付ハ、間ノ鞭ヲ打押戾礑ト射、敵妻手ニ廻レハ、弓手ニ越丁ト射、成逞兵鐵騎勇、矢種盡レハ打物ヲ拔持、驀直縱横ニ蒐破テ、向敵ヲ切伏セ、巴ノ字ニ追回ス、北ル敵ヲ突留、互ニ挑立テ責戰、太刀ノ鍔音天ヲ響、汗馬ノ足踏地ヲ動ス、誠ニ兩虎二龍ノ戰トモ可謂、悲哉惜哉、終ニ外門ノキワニテ御戰死、御年卅八、其外御供討死人數ヲ記、

家老
長倉修理亮　同名藤九郎
同名孫七郎　谷山新次郎
藏田彌次郎　新名治部丞
岩爪右京亮　中村八郎左衛門
同名藤五郎　竹井又七郎
岩爪太郎五郎　小林藤七兵衛尉
河守余一　落合九郎四郎
福永藤五郎　成合左近太郎
瀨口平五郎　米良肥前守
舟津又三郎　弓削次郎左衛門
三輪彥左衛門　大塚三郎五郎
土屋彌次郎　長倉安房守
長倉志摩守　落合式部少輔
落合備前守　湯前對馬介
湯前四郎　長嶺彥五郎
諸井又四郎　荒武彥七郎
諸井杢左衛門尉　原田太郎左衛門尉
重永七郎太郎　坂元藤左衛門
眞幸領主
北原長門守殿　長州息
北原次郎殿

海老原二郎左衛門　中村彦左衛門
海老原源七郎　肥田木二郎五郎
河野玄蕃允　後藤右馬允
大野左衛門二郎　橋口彦左衛門
中村右京亮　野村二郎五郎
河野彦七郎　田爪三郎左衛門
寺原八郎二郎　兒玉二郎左衛門
同田野兒玉　同所楠原
阿萬彦左衛門　山嶋戸助七郎
清清七郎　曲舞大夫
堤彦七郎　阿萬三郎左衛門
田野松山又太郎　御厩彌二郎
岩崎延命寺　稲荷座主落合師阿彌
小山田隨照庵　結城因藏主
御中間孫七郎　同太郎左衛門

久逸父子逃レ歸ル祐國ノ法名

以上侍六十三人、夫雜共ニ六百餘人、各忠死ヲ遂タリケリ、其時野村右衛門佐分別惡キ故ト後指ヲサス、是モ楠原ノ陣衆アワテ、上城戸ヲ早ク指タル故ソカシ、御馬ハ栗毛ナリ、然以來栗毛ヲ厩ニ立サルナリ、又伊東家ニ上城戸ヲ嫌フハ此時ノ事ソカシ、ケ樣ノ仕合ニ成行シカハ、諸陣ノ人數モ引退ク、櫛間ノ嶋津式部太輔久逸、息又四郎忠眞モ、漸鰐ノ口ヲ遁レテ引歸ル、夫ヨリ薩摩衆ハ串間ノ吏部ヲ攻ルナリ、祐國公法名笑山觀公光照寺殿ト申也、

〔北郷勳功書上〕

〇日向六代讚岐守敏久

一〇中略忠昌公江州御救ト、(文明十七年)翌年六月、鹿府ヲ御進發ニ而、末吉ニ御著被成、敏久卽參迎、先陣ヲ申請、御旌幕裁拜賜リ候、依之敏久手勢二千八百餘、同十八日、都城ヲ發し、白木俣之嶮ヲ經、酒谷ノ中山茂ノ權現ノ尾ヨ陣ヲ取、同廿一日、味方手分ヲ定、敏久爲中軍之將、桃山次郎太郎、肝付三郎四郎、村田肥前守、伊知地(地知)周防介、飫肥伊豆守、其外根占(禰寝)梶原、肥後、石井等相從ひ、伊東勢との取合、各粉骨ヲ盡シ、數十日之苦戰ニ及候、北郷次郎五郎、同助太郎同源次郎抽戰功、其外高名相究候者も多々有之候、此時敏久粉骨いさ

武久敏久ノ功ヲ賞ス

し、伊東祐國、北原長州、長倉修理を討取、敵軍悉致敗北候、夫〻諸將福嶋ニ打越シ、忠昌公も福嶋へ御到著和融事成、伊作氏奉謁、忠昌公ニ福嶋之城を被差上候、今度之戰功忠昌公御感ニ預り、忠賞として日州中之郷三百町を賜候、

新納是久戰死ス

〔新納忠元勳功幷家筋大概〕一元祖新納駿河守是久事者、家嫡四代修理亮忠治次男ニ而別立、五代近江守忠續ノ爲ニ者、弟御座候得共、忠續者飫肥江居城仕、其養子六代越前守忠明之爲ニ者兄ニ而、忠明者志布志江罷居、家督之兄筋ニ而御座候間、一族中崇敬仕たる由、其上是久女者、伊作家九代又四郎善久奥方ニ相成、日新公御母堂梅窓樣御事ニ御座候、夫故是久儀、善久御親父河内守久逸櫛間居城ニ而、忠續與被及爭戰候節、久逸方少勢御座候ニ付、文明十七年、彼手ニ相付、是久戰死仕候、

祐國ノ世系

〔伊東氏大系圖〕

祐堯　六郎、六郎左衞門、大和守、士持爲智、雖爲祐武子、以爲嫡孫受家督、法名源德本公惣昌院、

祐國　野村廈、小字虎乘丸、六郎左衞門尉、佐土原修理亮祐舜爲智、法名重阿彌陀佛、又笑山觀公光照寺、文明十七年乙巳六月廿一日、於日州飫肥楠原陣戰死、三十八、

是久ノ世系

尹祐　六郎、大和守、肥後國阿蘇大宮司惟憲爲智、始稱祐良、法名大川慈全大用寺、

祐梁　相模守、法名隆屋、

祐武　イ岳武藏守、法名龍洲可雲、イ兵相良宮內少輔長每妻、

女子　右松六郎三郎妻、

女子

〔新納系圖〕一新納氏是久流系圖

是久　四郎太郎、駿河守、

是久者新納家四代之家督、修理亮忠治二男、五代近江守忠續之次弟、越前守忠明之兄也、因之氏族之崇敬尤重、忠續曩祖以來領救仁院、日州、長祿二年、太守忠國公加賜飫肥、以故忠續移彼地、二十餘年境內無爲也、然頃年忠續與福島城守島津式部大輔久逸雖爲親族、其交不睦、動相爲矛盾、太守忠昌公及一門之宿老數和解焉、吏部不敢承諾、文明十六年之初冬、既起兵矣、此時太守公催一族他家之國人、加勢江州、以故其兵如雲霞、加吏部方者伊東祐國、北原立兼之外無多勢之者、於茲是久思惟、江州者兄吏部之嫡子、又四郎忠眞後改善久者、聟也、其親難分、以强弱論之、吏部兵少勢弱、其滅亡在近、不

忍見之、不如扶弱、遂戰死、而離嫡家、馳加吏部、屢會戰抽武功、文明十七年乙巳六月二十一日、戰死於飫肥河原、

友義（又五郎、越前守、伊勢守、）母佐多伯耆守忠遊女、嚴親是久戰死以後、奉太守公之嚴命、吏部、江州和睦、吏部移于本領伊作、江州移于救仁院、志布志、時友義相從焉、十月六日卒、法號理阿彌陀佛、

女子（伊作又四郎善久室、）伊作善久公之室而日新公之母堂也、法諱梅窓妙芳大姉、天文十三年甲辰八月十五日卒、爲其人聰明而好儒學、常讀論語、且嗜歌道、原夫伊作家者、三代太守久經公之二男下野守忠長初領伊作莊（薩州、）以來、以伊作爲稱號、忠長七世犬安丸早世、家將絕、家臣等愁之訴之、故太守忠國公（九代、）令三男龜房丸妻犬安丸之妹、連續伊作家、號式部太輔久逸（後號島津、）晚年任河內守、而後應太守立久公（十代、）之命、移居日州福島有年、文明十七年、奉太守忠昌（十一代、）之嚴命、去福島、而後復歸伊作莊、

〔北鄕系圖（原題島津氏略系圖）〕向○日　敏久　○略上（文明十七年）翌年六月、太守忠昌公爲援新納出軍於山東、吃敏久蒙先驅之命、賜旗幕、至于飫肥、勞軍務、同廿一日、敏久爲中軍將衝於敵陣、討伊東、北原且追伊作、軍功莫大焉、忠昌公太感之、賜日州中之鄕三百町、

敏久先鋒トナル

〔前編薩藩舊記雜錄〕四十　町田氏系圖

町田出羽守高久

左京亮賴本

梅吉（伊賀守、法名淨榮、）太守立久公使令弟式部太輔久逸（後被任河內守、）守日州福島院、時梅吉奉太守之嚴命、從吏部移居福島、賜稱吉松在所、文明十七年初秋、久逸應太守忠昌公之命、去福島移居本領伊作庄、梅吉亦賜本領石谷矣、

梅久（大永七年中ニ載ス、）○祐國、新納忠續ヲ飫肥城ニ攻ムルコト、五月二十七日ノ條ニ、武久、飫肥城ノ急ヲ救ハントシテ、大隅敷根ニ陣スルコト、本月十二日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

武久澁谷重慶討伐ヲ閣ク

〔三國擾亂記〕三　○舊典類聚八下所收　山東伊東合戰幷薩州祁答院澁谷合戰之事

忠國公よゟ三代の太守、陸奥守忠昌公と申奉る、去程よ、山東伊東の某ハ、當家累代の古敵おれハ、動をすれハ太守の領土を侵んとをる事度々也、急よ退治を加らゟをそハ、後の大事さるへしと評義(議)一決しゟれハ、其催促よ隨つて、三ヶ國の地頭城主、おもひ〳〵よ甲鎧を我劣しと鎧、夜白引も切らゟ鹿兒島よ馳參る、誠よ見物貴賤耳目を驚きり、其中祁答院の澁谷ハ、早く鹿兒島よ到著して扣へ居々るゝ、如何おもひ々るゝや、其夜密よ鹿府を發し、己ゝ居城祁答院へそ逃歸る、此時ハ野心無疑、則退治有へ々れとも、飫肥出陳も急々おれハ、先澁谷退治を閣ゟ、文明十六年(七)、諸軍飫肥へ馳進、六月廿日の曙よゟ、矢合の鏑を射て、敵味方入亂闘ひ々るゝ、伊東ゟ軍忽破ゟ、伊東長門守祐國討死しゟ、敵兵も既よ弱り、或ハ痛手を負、或ハ討るゝをの其數を知らされハ、味方勝時を作り、諸兵勇をおして退陳を、

〔島津國史〕十二　圓室公　六月十二日、公自將救飫肥、明日次於末吉、十七日、先遣北鄕敏久、樺山長久、村田經安等、將二千餘騎踰白木俣、軍酒谷權現尾、明日又遣國久忠廉等、將二千八百餘騎、與敏久等會、會眞幸兵、燔栗峰、霧島等聚落、志和池領主島津源左衞門尉後改稱播磨守、忠堯、遣兵擊破之、獻首末吉、(據圓室公舊譜、文明記、眞幸係北原立兼邑、立兼時與伊作久逸共圍飫肥、此日出兵燔栗落者、其留守臣所爲、都城有中霧島村、西嶽村、西嶽村有栗ケ峯、郡村高辻帳、中霧島村、西嶽村幷爲一村、名安永村、)忠堯豐久之子也、(據島津支流系圖、久見第九卷應永三十二年、)島津豐久、二十一日、敏久等進至飫肥、軍蔣田、與伊作伊東軍相去六町、伊作久逸、新納是久、(是久見上七年注、)北原立兼、與伊東祐國合兵軍楠原、伊東次郎五郎軍大龍寺、伊東次郎太郎、長倉修理進、野村勘解由左衞門尉、佐土原六郎三郎軍田間、伊作、伊東兵合四千餘騎、而楠原、野頸前面爲渠引流、廣二丈深一丈、渠上作垣、高二丈、上設堞樓、下布木蒺藜、其勢儼然、於是北鄕敏久將二千餘騎、島津國久將千五百餘騎、島津忠廉將一千三百餘騎、新納忠明、和泉久氏等將五百餘騎、合五千餘騎、大闘而前、國久自擊伊作久逸不勝、北鄕敏久進擊久逸破之、久逸走田間陣、敏久又與忠廉合兵陷楠原陣、斬伊東祐國、北原立兼、長倉修理進等數十人、伊東軍敗績、斬敵八百人、獲首一百三十級、(據圓室公舊譜、文明記、)伊作久逸逃歸櫛間、二十五日、敏久、國久、忠廉等圍櫛間、同上、二十九日、公如櫛間師、國久陰勸久逸使降、久逸從之、國久言於公許之、秋七月二日、久逸出降、見公謝罪、請去櫛間、公慰撫之、乃復久逸於伊作、八日、公還自櫛間、同上、

祐國ノ子祐良繼グ

金性院東岳寺八幡宮再建棟札郡本

〔日向飫肥〕伊東家譜〕祐國　六月二十一日、薩ノ大兵田間、河上、長吉、野頸ノ四陳ニ押詰ル、田間、河上ノ兵三度戰ヒ之ヲ却ソク、祐國之ヲ見テ、楠原ノ陳ヨリ兵ヲ出シ、田間ノ陳ニ馳向フ、薩人井手ノ上ノ陳ヨリ出テ、横ヲ擊、之ヲ圍事數重、楠原陳門ノ外ニテ陳沒ス、從テ戰死スル者六百餘人、楠原陳ヲ守ル者、アワテヽ揚簀戶ヲ早ク閉タルユヘナリ、人皆野村右衞門佐カ失策ヲ咎ム、祐國既ニ陳沒、諸將兵ヲ麾フテ引退ク、子六郎祐良家ヲ繼ク、

〔薩摩志〕三名族　肝屬兼續　兼連有二子、長子兼久嗣、〇中略明年（文明十七年）忠昌親率兵救忠續、兼久從之、

〔莊內地理志〕六十一〇日向　鶴岡八幡〇上略今度之御一戰ニ付御宿願有之、鶴岡八幡宮義久樣幷嶋津薩摩守國久樣、嶋津修理亮忠廉樣ゟ御勸請被成、御建立有之、座主寺鶴岡山金性院東岳寺を被立、棟札、

諸佛救世者　住於大神通

棟上奉造立八幡大菩薩靈祠一宇

萬悅衆生故　現無量神力

夫以、日州嶋津庄者、我高祖豐後守忠久於薩隅日三州權興之地也、然則文明乙巳夏、與薩摩守國久赴飫肥之戰場日、依難起竊鎌倉鶴岡八幡宮勸請之、願主前左衞門尉藤原數久、讚岐守義久、修理亮忠廉、薩摩守國久也、亦爰奉再興大旦越藤原忠相、別者大旦越忠親、同忠豐朝臣、之通朝臣弓箭名加、國土安全、萬民快樂故也、依意趣如件、

司役聖應寺別當坊宥雅

天文廿三年甲刁三月九日

本願寶藏院權大僧都重圓敬白、

當代官土持攝津介田部賴綱朝臣

大宮司岩切兵庫允草部綱滿朝臣

二人大工藤原利定、小工各藤原氏房、鍛治源秀利朝臣

裏ニ藤原久朝　寶藏坊之內良賢、敎嚴　岩切御敎大貳公

土持攝津介田部賴綱　治部卿公

藤原義堯　同義高　小杉右近

大河原備後　山內治部少輔

安藤新左衞門

猪野新三郎
小薗七郎右衛門
本野九郎右衛門
持永清右衛門
田波多對馬
長友肥後
持永藏尉
注定彦四郎
戸山主税
同江右衛門
富松加賀
竹内與三左衛門
鎌田備前
辨當大覺
小辨當源左衛門
竹之内下總守義次

右之外無名字者不記之、

日知屋城墟

〔日向古迹誌〕六臼杵郡日知屋村　日知屋城墟　本村ノ南隅海岸ニ突出ス、高六丈許、周圍大約五六町、三面ハ波濤城址ヲ拍ツテ響ヒ邇クヘカラス、唯西ノ一面尾續キニテ岡阜ニ接ス、故ニ其間ニ一小隍ヲ鑿テ、要害ヲ固フス、城西ノ岡阜ハ其巔稍平壙ナリ、今悉ク畦圃トナレトモ、蓋シ古ハ士族宅地ナランカト思ハル日向記ヲ按スルニ、後花園天皇ノ長祿以前ハ、財部ノ土持氏之ヲ領ス、長祿元年丁丑七月、都於郡領主伊東祐堯、財部ヲ攻テ、土持氏ヲ滅

祐邑ノ居城
祐國ノ墓
楠原ノ祐國ノ墓ニ就キテノ考

セシ時、併セ取リシ所ナリ、文明十七年乙巳、伊東祐國祐堯ノ子、飫肥ノ楠原ニ戰死ス、時ニ其弟祐邑此ノ城ニ居ル、

〔日向古迹誌〕四那珂郡吉野方村陵墓　伊東祐國ノ墓　永吉ノ里人家ノ後ニアリ、三層碣高五尺餘、銘字ナシ、祐國ノ墓、一ハ楠原村舊報恩寺ノ遺址ニアリ、故老相傳ル說ニ云、彼ハ伊東氏飫肥ニ封セラレシ後建ル所ノ僑墳、此ハ卽チ現ニ遺骸ヲ葬ル所ナリト、祐國ハ文明十七年、楠原上城ノ役薩人ノ手ニ死ス、而メ當時永吉ハ薩人ノ居城中ニ係ル、宜ク此地ニ葬ルナカルヘキニ似タリ、然トモ又按スルニ、薩侯島津忠昌ハ祐國ノ女婿タリ、且薩人已ニ祐國ヲ斬リ、伊東氏ノ怨ヲ報スルヲ恐ル、故ニ特ニ厚ク之ヲ其居城中ニ葬リシ歟、

人數

二十四日、癸卯、千句御連歌、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　六月廿三日、○中略　あそよ里千句も
しまるへきまて、御ゆもる御さゝあり、上らぬ、もけ殿御ゆ殿、
廿四日、御ぎん歌八うちゑとりもしまる、御入も、宮の御ろさ、仁ゐ寺の宮、
さいをん寺、中院、むむろ、ういちうをん、うんろし、中御ろと、侍從の中納言、と

大慈光院宮等酒饌ヲ獻ゼラル

ねあきのあそん、ときおう、をうもく、そうう、やくそうにゆきもる、ありうすおう、あまさ夕うさく御まてたふの仰をい、ひんうしのとうゐん殿より、御てをしんおほをつけられて、ぐこんともさふ、

義政魚ヲ獻ズ

廿五日、昨日まれおし、たふのおほをも御うりまてくこんあり、おう殿より御うり一ふさ、御うゐらけの物十うの物まくこん入をまいる、不うあい寺殿よりも、御うり一ふさまいる、夜まを入を、ふしをとの、うち井殿御ちやうもんま御ゐいり、いてゝ御さいめんありて、御さう月うとゐいる、ひんうし山とのより、いりもの御まを五色まいる、

平野社法樂御連歌

(廿)十六日、たふもれおし、千句のゝち、ひら野ゝ□一おり御はさあり、五の四さゝうすねま、もる〳〵とゝてさしまず、めてさまて、御さう月二こん御さしきまてゐいる、不もし、うとのおとこたちゝもへまてさふ、そのゝち御まへにてくこんともさひて御ひし〳〵なり、上らゐ、大も、新大も、おうたうおいしまを、御もゝをのふさにおもし入をまいる、たふをふしを殿御ゐいり、ほをの御所ゐて御しやうしんとをまて、御さう月一こんまいる、二の宮の御うさ、三ゐゆの御さ廿まて、御不うらくれ分ま、祢うもうたちまあそも

御精進解ニ宴ヲ賜フ

さをらるゝ、御人を六人おり、

千句御連歌ノ題ヲ中院通秀ニ賜フ

〔十輪院内府記〕中　六月十一日、晴、〇中略自侍從中納言許、肖柏御會參事、有書狀、

十二日、〇中略肖柏御會參事、被仰出之旨申含之、可參候云々、

十四日、〇中略今日被下題、千句御連歌也、

廿三日、〇中略肖柏來、爲明曉同道也、

黑戸東面ニ行ハセラル

廿四日、拂曉始而著平絹直衣綾奴袴參內、猶深夜之間用步儀、於路次侍從中納言令走使者遲々云々、彌忿參入、以黑戸東面爲其所、主上南面御座、大臣東上北面也、自餘公卿候落庇座、肖柏、宗巧、北面道構入疊敷也、殿上人座也、交候此所也、公卿東面執筆後居遠之也、御人數、御製、親王御方、仁和寺宮、左大臣、西園寺遠公實前內大臣、余秀公、通、帥卿、敎忠海住山大納言、高卿、清按察卿、親長中御門中納言、宣胤卿、侍從中納言、實卿、隆時顯朝臣、重治朝臣、在數、源富仲、肖柏、宗巧等也、今日三百韻了、發句等別注之、

三百韻

廿五日、曉天七時分參候、今日四百韻、發句余依可申入之番殊早參、今日四百韻無爲也、

四百韻

廿六日、窮困過法之間、天明時分參候、已被始行、五句目參候、時宜不苦祝著也、入夜事終、平野十六句歟、於御前有小一獻、此間朝暮飡於鬼門行之、左府同之、晝又有一獻、盃互讓之、慇懃之至也、

廿七日、餘屈平臥之外無他、さよみ二領被下肖柏了、慇懃之□天憐畏存之由申入了、

廿露寺親長發句

〔親長卿記〕十六　六月廿二日、晴、○略中御千句發句、予分題立、夕今日入參、申勅藏了、

風すゝし夕立こゆる雲ぬ峯

廿四日、晴、○略中拂曉參內、自今日有御千句連歌、兼日侍從中納言奉書有之、催參仕人々、御人數親王御方、仁和寺宮、左大臣、前內大臣、權帥、海住山大納言、予、中御門中納言、侍從中納言、時顯朝臣、重治朝臣、宗巧法師、肖柏、在數、源富仲等也、猶發句者兼日治定云々、

御人數

第一御製　第二親王御方　第三左大臣　第四前內大臣通秀　第五權帥　第六海住山大納言　第七予　第八中御門中納言　第九侍從中納言　第十仁和寺宮

初百韻執筆西洞院時顯　第二實隆三條西第三中御門宣胤

實隆勅題ヲ頒ツ

平野御製等也、

腋第三於當座被定仰之、予依仰執筆、如去年御千句、初百韻執筆、時顯、第二侍從中納言、第三中御門中納言也、兼燭之後退出、朝晩食共以御沙汰之、三ヶ日如此、被除重輕服參仕了、

廿五日、晴、未明參內、今日有四百韻、子尅許退出、

廿六日、晴、早參內、今日有三百韻、平野十句有之、事畢有一獻、次退出、兼燭之後也、

〔實隆公記〕八　六月十三日、壬辰、晴、○略中早旦參內、千句御人數事等被仰定之、方々申之了、巨細別可注之、

十四日、癸巳、晴、及晩雨濺、○略中今日千句御人數事、發句勅題被出之、則方々相觸了、

十五日、甲午、晴、○略中時顯朝臣來、御千句參仕事有相談之旨、

廿二日、辛丑、晴、○略中及晩參內、御千句間事被仰下申入了、入夜退出、

廿四日、癸卯、晴、曉天參內、自今日有千句御連歌、兼日御人數等予相催之、御人數、親王御方、仁和寺宮、左大臣、前內大臣、帥、海住山大納言、按察、中御門中納言、下

第四百韻　第山執筆海住　第五高清時顯　第六唐橋顯　在第七數時顯　第八實隆顯　第九宣胤顯　第十時顯

官、時顯朝臣、重治朝臣、在數、源富仲、宗巧、肖柏等也、入夜終三百韻功各退出、執筆、初百時顯朝臣、第二下官、第三中御門中納言也、腋、第三等別注之、

廿五日、甲辰、晴、曉天參內如昨日、今日入夜終四百韻功、諸人窮屈、頗過法者也、執筆、第四海住山大納言、第五時顯朝臣、第六在數、第七時顯、今日雖爲當番、相語在數退出、

廿六日、乙巳、曉天參內如兩日、秉燭程終三百韻、千句滿散、珍重〻〻、平野十句被遊之、不及一巡者也、執筆、第八下官、第九中御門□(中納)□、第十時顯朝臣、平野在數、事了有一獻、予候陪膳、三ケ日無一事違亂之條、珍重々々、御願成就□(光カ)無疑者也、

〔後法興院政家記〕十六

〔新撰菟玖波集〕十六雜連歌四　文明十七年六月廿四日、癸卯、晴、自今日於禁裏有御千句連歌云々、

いひ出ぬわろきのうさはいろもろり　(西園寺實遐)前左大臣

老乃あいれもよろよはらめや

足利義教忌辰、幕府、佛事ヲ相國寺普廣院ニ修シ、義政、之ニ臨ム、又等持寺ニ法華八講ヲ行ヒテ、其冥福ニ資ス、

〔親元日記〕八　六月十三日、壬辰、

一來廿四日御年忌料事、諸家へ被觸申之、

幕府年忌料ヲ諸家ニ徵ス

土岐成頼佛事錢ヲ進納ス

奉行出仕ナキニ依リ諸家出錢ノコトヲ督スルヲ得ズ

伊勢貞宗ヲシテ督セシム

廿五日、甲辰、

一同方(土岐成頼)より昨日廿四、御佛事錢千疋進納、卽普廣院雜掌ニ渡之、

七月三日、壬子、

一六角殿(高頼)より去月廿四日御佛事錢到來、則普廣院へ渡之、

廿四日、癸酉、

一南御所へ東山殿より三千疋ゐ(ゐ)る、(御八講料相殘分內也、淵田納申之、請取目賀田越前守光吉、)

〔蔭凉軒日錄〕六月五日、○略中　普廣院主大年西堂來云、來廿四日御年忌諸大名出錢事、奉行無出仕、○五月二十三日ノ條參看、以故不能督之、然者自蔭凉被督之爲幸、予曰、可賜寺家一行、以御機嫌可致披露、乃調一行、侍眞秀藏主持之來、

九日、齋罷謁東府、○略中　來廿四日普廣院御年忌、諸大名出錢事、先規者院奉行觸之命、諸奉行無出頭條、可被仰付別人之旨、以一行自院白之由令披露、則可命(伊勢貞宗)伊勢守之命有之、乃傳台命於汲(貞宗)古、汲古云、必可相觸、近年出錢時宜可記給云云、乃命院、以所記一卷遣汲古也、

廿二日、○略中　謁東府、○略中　來廿四日普廣院御年忌回向、改義政爲道慶之旨紀綱來白之、蓋鹿苑相公舊例如此、以此旨、達台聽、相公曰、諾、可除源朝臣之三字、

義政參詣ノ次第　警固

乃命紀綱也、（○義政得度ノコト、本月十五日ノ條ニ見ユ、）

廿四日、早旦詣清水寺、遂謁東府、奉報來晩普廣院御燒香御成事、八鼓刻可白

案內云云、（○中略）八鼓已前往普廣院、奉待御成、其刻御成、御燒香、御警固安富新

兵衛尉、物部次郎左衛門尉、其外數十人伺候于玄關之外、御給仕瑞孝喝食被

參、還御後於書院有宴、

諸大名年忌錢ヲ進納セズ

八月四日、（○中略、義政生母日野氏忌辰ノコトヲカヽル、八月八日ノ條ニ收ム、）勢州曰、先是普廣院御年忌錢、其

外國役等件々雖督之、諸大名不被納、

〔親長卿記〕（十六）

六月廿日、晴、等持寺御八講如例、行事辨事元長朝臣被相

催領狀、予又初而可參云々、先日還催之內也、久任（遵）、左大將家（宮小路）九條前關（政基）、諸大夫、俊通白諸大夫、堂

童子也、自餘著裝束、細々見來之間著之也、予未尅許著束帶、元長朝臣前藤中納言永

繼來之、等著束帶、久任、俊通等令同道、參等持寺、暫僧衆參集之處、圖書官人未參、

以下家司加催、移尅參入、勸修寺大納言著公卿座、元長朝臣參入、申始行之由、

仰鐘下家司、仰圖書官、此間公卿著堂前、（左右、）勸修寺大納言、（敎秀、北、）海住山大納

言、（高清、南、）予、（北、）中御門中納言、（宣胤、南、）兵部卿、（宗綱、北、）堂童子久任、俊通著南座、

廿一日、晴、御八講第二日也、元長朝臣參仕如、（マヽ、）

第二日

初日參仕ノ公卿

第三日

結願

廿二日晴、同前、

廿四日、晴、御八講（結願日カ）拜領之也、同前、

〔實隆公記〕（八）

六月三日、（壬午、）晴、（○中略）自勸修寺一通到來、等持寺八講自來廿

日始行、第三日可參仕之由□、

廿二日、（辛丑、）晴、等持寺御八講第三日也、依兼日催參入、著聽衆之座、僧衆已參堂、

散花之時分也、勸修寺大納言、前藤大納言、（資世、）四辻前中納言、（實仲、）下官、姉小

路宰相等著座、朝夕兩座事了退出、僧名等注別帋、

〔後法興院政家記〕（十）

六月廿日、（己亥、）晴、晩頭小雷、自今日等持寺八講云々、

〔大乘院寺社雜事記〕（九十七）

六月十六日、

一自一座證義東院（兼四）裝束以下色々申出之、則渡之、道具箱色々悉皆、中童子裝

束一具悉皆、香直垂八具、大口四口、檜物長櫃一合、七郷人夫事八人分仰付

之、

十七日、

一成就院法眼上洛、力者慶萬、成德兩人御共用也、奏九郎罷上、自二條殿被召

上之、人夫藥師寺一人、川合一人、傳馬古市ニ仰之、御衣以下色々物上之、

廿日、
一京都より申下迎人夫四人、輿舁三人事、來廿四日可上之、廿五日可下向云々、
廿四日、
一等持寺御八講、今日結願日也、一座東院、二座東北院(任間)、三座法輪院(公範)、
一御迎人夫、藥師寺三人、元興卿一人、院入一人上之、
廿五日、
一一座證義人夫八人七郷也、上之、明日爲下向也、
廿七日、
一東門院僧正來相語、自學侶御講衆三人方ニ各三百疋樧二荷上之、且東山殿御耳ニ入之云々、

〔大乘院日記目錄〕四　六月廿四日、御八講結願、一座東院僧正、二座東北院僧正、三座法輪院權僧正、
廿六日、講衆可有下向之處、自學侶止之、

〔政覺大僧正記〕八　六月十七日、丙申、
興福寺八講衆上洛
一奏九郎男上洛、家門御共タメ也、
十八日、丁酉、
一御八講衆上洛云々、東院、東北院、慈恩院、
廿日、己亥、
一今日ヨリ等持寺御八講始行、
廿二日、辛丑、
一御八講丁聞、東院僧正家門參、大閤(二條持通)御對面、□見參、樁一荷、五色共以給之、不寄思煩也、
廿三日、壬寅、
一今日御八講衆東山殿ヱ參賀云々、
義政ニ參賀ス
廿四日、癸卯、
一今日御八講丁聞、大閤樣渡御、

〔等持寺御八講聽聞集〕○京都御所東山御文庫記錄甲百十九所收
同(文明)十七歳乙巳六月廿日始行、
傳奏勸修寺大納言教秀卿

威儀師隆嚴
從儀師行經
證義者
講衆
初日朝座講師任圓問者公範

文明十七年六月二十四日

行事辨元長朝臣

綱所威儀師隆嚴　從儀師行經

證義者

僧　正兼圓 單、　僧　正任圓 兼講師、

權僧正公範 兼講師、

講衆

法印大僧都房兼 寺 寺 初參、號住心院、實瑜　權大僧都房實 寺 山 光什 山 尊範 寺 運伊

權少僧都光慶 興

權律師房伊 寺

初日朝座、講師任圓　問者公範

問、法相大乘意、立四分法門、見、爾者不立自證分者、可有過之、故慈恩大師如何尺之耶、

答、若無第三分可緣心外境故ト尺也、

同幕座講師房兼　問者光什

問、理一多事、

同幕座、講師房兼　問者光什

問、一家天台意、圓頓機性者、凡聖二機中、以何爲正意耶、

答、以凡夫可爲正機也、進云、然圓頓教本被凡夫、文、

問、鏡中可現像者本有也可云耶、

答、任一家天台者、可本有也、進云、中道明鏡本無說相云々、

第二日朝座、講師房實　問者光慶

問、摩訶止觀中明十法成乘觀門、見、爾者第六起慈悲心者、可云行者、觀門耶、

答、行者觀法也、

問、斷元品無明爲用等覺智、將用妙覺智可云耶、

答、妙覺智斷也、

同夕座、講師實瑜　問者尊範

問、一家天台意、不變隨緣、兩種眞如者、共不生不滅也可云耶、

答、

問、安養淨土說三藏教耶、

文明十七年六月二十四日

第三日朝座、講師光什　問者房兼

答、

第三日朝座、講師光什　問者房兼

問、月輪虧乃盈者約自體歟、將依外緣可云耶、

答、可有二意也、

問、一家天台意、如心法智、照色法境、亦有色法境、照心法智之義耶、

答、可有此義也、

同夕座、講師光慶　問者房實

問、習所成種姓事、

問、護法敎體事、

第四日朝座、講師尊範　問者實瑜

問、六卽次位者宜敎觀二門可云耶、

答、

問、玄文中立待絕二妙、見、爾者相待妙有開權之義耶、

答、

同暮座、講師房伊　問者運伊

問、解釋中分別十乘觀門、見、爾者於名卽字爲修之、將於觀行卽論之可云耶、

答、

問、一家天台意、一心三觀々門者、自緣生々上所立可云耶、

答、

結日朝座、講師運伊　問者房伊

問、解尺中別圓頓戒相、見、爾者并別解脫戒上立佛果戒可云耶、

答、

問、華嚴經時、論二乘得益可云耶、

答、

同暮座、講師公範　問者任圓

問、普賢觀經文說大士所乘焉、於六牙瑞有六浴池、文、爾者今此六浴池表法門耶、

答、

問、一家天台意、有餘實報二土、離同居別有其處可云耶、

答、

文明十七年六月二十四日

無重難、御經供養在之、

〔願文集〕六

原夫、一心已開、千佛忽現、釋迦正覺者、成于衆生利益、彌陀本願者、顯乎凡夫往生、善根增長永不退轉者乎、伏惟、先考一品贈大相國尊儀矣、傳柳營之玄風、化成天下、刷槐府之氣質、潤色朝廷、兵權浴時、薦以廉潔之將、節義被世、導以清直之臣、怒則加刑、喜則施賞、道其道、仁其仁、加之修造神社之摧殘、興立佛閣之顚倒、擧大功救小過、恐天運敬國恩、不計革命之年、徂暑之候、出三綱室、入七覺林、嗚呼戀慕之憶難盡、追福之志無窮、爰弟子官品極進、未詳皇佐之功、武略相傳、慙乏軍旅之事、可恐者在于我、所恥者存于他、就中慣應永第二六月中澣之善果、當文明十七大暑既望之良辰、歸一念大乘之元、登無上之眞殿、成三身具足之願、斷有漏之業波、解玉佩、提利劒、拂華髮、著法服、專此土之戒法、報過去之聖靈、期彼岸之來迎、質現在之儀貌、方今迎四十五回之忌時、設一部八軸之講會、奉供養釋迦如來三尊像、奉模寫妙法蓮華經一部八卷、開結、心阿等各一卷、見佛之眼者、被照三十二相妙莊、聞法之耳者、遭洗八萬四千寶偈、廼崛權僧正法印大和尚位公範爲唱導師、修梵唄、鑑察四弘、散天花、降臨三寶、其心者、住無量

衆義、辯瀾翻々、彼口者、具一切殊勳、詞花粲々、寔是顯宗之棟梁也、佛家之柱礎也、于時三伏之氣已到、九夏之景漸闌、移凉燠講筵有欣、永日重旦夕法座、可惜、寸陰謝弟子懇誠、洪導師供養本修善之深心、開斷惡之慈眼、赴安養之淨刹、遊方便之化城、乃至利益功德無邊、敬白、

文明十七年六月　日　　弟子沙彌　敬白

入道准三宮家

請諷誦事

三寶衆僧御布施

右奉仰偈、調五日十座之講論、揚慈孝之恩德、拭一別千行之涕淚、修懇志之善根、進立弗傷之身、退勵無常之力者也、于時林蟬聲中雜輕玉之逸韵、池蓮華外凝沈水之薰烟、凡厥餘善所覃、業障永斷者、奉仰諷誦所修如件、

文明十七年六月　日　　別當藏人頭正四位上行左中辨藤原朝臣奉

草　前菅中納言在治卿（唐橋）

〔諷誦願文草案〕

文明十七年六月二十四日

足利義勝
年忌錢千
義政二
定分公
一ヲ許帖
ス

壽芳臨川
寺公帖

文明十七年六月二十六日

（參廣院贈大相國）同四十五回法事、○略願文ス、

同願文御位署

文明十七年六月　日　　弟子沙彌敬白

○足利義勝年忌佛事料ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔蔭涼軒日錄〕六月廿日、早旦謁東府、○略中來廿一日慶雲（義勝）院御年忌錢二千疋分公帖一通可有御免之由、彼院主一行有之、謹白之、御許諾、乃傳台命於慶雲、廿七日、午後謁東府、○略中來月廿一日慶雲院殿御年忌御佛事料二千疋分公帖事、以前伺之、卽今壽芳西堂臨川寺書立遣鹿苑院、廿八日、○略中壽芳西堂臨川寺書立以之伺之、有御許諾、七月九日、○略中芳春英爲昨日禮謝、持三幅壹對來、面謝丁寧、八月晦日、昧旦謁東府、○略中壽芳西堂臨川寺坐公文○略中御判出、乃遣鹿苑、○略中芳西堂者慶雲院御寄進內、九月六日、春英西堂來、報來日點心、蓋領臨川寺公帖之祝羹也、七日、自夜半天洒雨、早旦赴慶雲院點心、

二十六日、乙巳、播磨守護赤松政則、同國八正寺ヲシテ、寺領內ノ土民ヲ糾合セシム、

政則ヲ
野伏
國衙
惣社ニ
集合
セシム

〔松原神社文書〕○坤播磨

來廿八日、可有御勢遣子細在之、卯尅已前相催寺領野伏、國衙惣社ゟ悉可被打寄、然者可爲一段之忠節由候也、仍執達如件、

文明十七
六月廿六日　　則伊（花押）

松原
八正寺

○政則、八正寺ノ戰功ヲ賞スルコト、八月十一日ノ條ニ見ユ、

二十八日、丁未、幕府、定光坊澄晨ヲ政所納錢一衆ニ加フ、

〔親元日記〕八　六月廿八日、丁未、

一定光坊納錢一衆ゟ被召加之、

頭人御奉書

政所納錢一衆事、被召加衆分之由被仰出候、納下之儀嚴密可被致其沙汰候也、恐々謹言、

文〻
六月廿八日　　定光坊　　貞一

文明十七年六月二十八日

澄晟義政父子ニ禮謝ス

七月五日、甲寅、

一定光坊澄晟、一衆御禮、

東山殿へ御太刀、千疋、京御所へ御太刀、糸、御馬、

勝仁親王ニ茅輪ヲ賜フ

三十日、己酉、六月祓、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　六月卅日、御ゆめを、こんを御ゆとのへ、おゆひの御ゆとし〳〵のとくあさられ廿のまゝてあり、宮の御ゐさへおゐ(ゐ)し、ちや〳〵ちゐ(ゐ)もさをて御ゐいりありて、これををけ殿こしゐいらせらるゝ、御さゐ月とし〳〵のとし、

祇候ノ人々

〔實隆公記〕八　六月晦日、己酉、晴、當番參内、入夜超輪、有御祝、予、民部卿、四辻宰相中將、新宰相、以量朝臣等祇□(候)、

中院通秀第六月祓

○中院通秀第六月祓ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔十輪院内府記〕中　六月卅日、入輪(土御門)、陰陽頭有宗朝臣調進之、綿廿目、被下之、

幕府遣明使周璠(子璞)、寧波ニ寂ス、

〔蔭凉軒日錄〕十二月廿四日、○略中　齋罷謁東府、○略中　自兩居座嚴西堂(光松)首座方注進狀到來、無爲歸朝、停舟於肥前奈留浦、雖然正使子璞(周璠)和尚自去五月頃不例、同七月朔、○明暦七月朔日ハ我六月三十日ナリ、於寧波府遷化、御物等事者不可有相違之由白之、定飯尾大和(元連)可令披露云云、相公曰、子璞春秋如何、六十歲許歟、愚謹白、六十六歲歟、六十七歲歟、

寂年

〔鹿苑日錄〕三　明應八年八月六日、○略中　東歸(光松)和尚子細問唐船事、曰、○略中十五年

閱歷

三月是月ノ條ニ收ム、又曰、子璞爲正使、予與肅元爲居座、歸路正使疾矣、

〔蔭凉軒日錄〕長祿二年閏正月一日、○略中　諸五山住持時御相伴衆、住院被擇事、名字幷掛塔莊主幷役者、官舉停止之旨、以普廣院殿永享八年七月十六日寺家御吹噓、幷官舉被止之例如舊規、悉可相觸之由、以春阿被仰出、卽於蔭凉軒、奉召院主瑞溪、東堂春溪、崇壽、順溪(等助)、都聞乾嘉、維那周瑋藏主嚴命之、此旨有違犯之輩、則書其名字、可令披露之由被仰出也、

維那

寛正二年七月廿一日、慶雲院以案内御成、諷經拈香、太元和尚時雲頂院主也、維那周瑋藏主也、

文正元年五月八日、○略中　長老松堂和尚、前六日當山退院頌曰、名藍護短履危機、百拙何堪萬指圍、啼月杜鵑報吾曰、好山何似不如皈云云、周瑋首座退院、仍退寮來謝也、

五月頃ヨリ病ム

文明十八年十一月十五日、天快晴、〇略中友派藏主事、自幼少侍瑞溪和尚左右、至遷化不去只赤、〇略中尺子璞和尚渡唐時、爲從僧、十九年七月廿三日、不參、天快晴、〇略中義政、鹿苑院ニ詣ルコトニカヽル、長享元年七月二十三日ノ條ニ收ム、相公問曰、此法衣者如何、答白、正使子璞這回自大唐來借用之也、

〔蔭凉軒日錄〕文明十九年七月三日、不參、天快晴、〇略中梵喜侍者侍香事望之如何、愚云、已勤禪學爲侍藥小頭、子璞和尚於寺家有大功仁也、旁以登庸可然、不可涉異論也云云、

長享三年七月十七日、不參、天快晴、〇略中鹿苑侍衣來云、〇略中昔亦紀綱以前陪詩會者惟多、大智院、永字林、策國用、琇玉崖、茂松崖、畫錦溪、愚門徒亦頗大雅、養浩然、良元甫、又致眞境、瑋子璞等、是皆維那以前陪詩會者也、殊子璞者勤秉筆、愚所見及也、侍衣云、如仰余亦凡所見聞也云云、

〔鹿苑日錄〕一　長享三年己酉六月廿八日、〇略中眞境和尚、子璞和尚皆早歲遊社中、特子璞執筆、一時風流也、皆任紀綱後、一切不赴其會、

〔補庵京華新集〕前住相國子璞和尚慈容

清高桂枝月裏、皎潔玉樹風前、寓惠林熹福惠僧、祝髮受具、克終克始、入藏海稱

友派ヲ伴ヒテ渡唐ス

周瑋寺家ニ大功アリ

詩會ニ陪シ執筆ヲ勤ム

景三周瑋ノ頂相ニ讚ス

經藏子、秉弗提綱、說妙說玄、睨視場屋、咲簪花女、扶起梵刹、思揷草賢、文字顯捻持、是故讀周公孔子之書、以明祖意、音聲爲佛事、是故唱支謙法勝之唄、不謬師傳、高山流水、甘露醴泉、嵯峨千仞最尊、起第一座、直登十刹、正續七世益盛、奉准三宮、特董萬年、鯨吼鼉鳴、禮樂勃爾、鶴怨猿驚、出處自然、也足軒中、修竹歲寒、平居獨存晚節、崇壽塔下、孤燈夜月、壞壁猶留佳篇、當其萬里遣使南國、譬諸三藏求法西天、文明甲辰（十六年）之夏之仲、大洋發船、擧首中朝日月、成化（文明十七年）乙巳之秋之初、四明瘞履、墮淚絕域山川、哀榮有命在、師何恨、離合無情、於我相煎、還愛之碑、聞魏先生雄文、夢去摩挲石刻、送行之詩、見楊學士後序、腸斷辜負錦旋、處々分身百億、塵々一念大千、諸孤渾家團圞、九重城沐新雨露、小補同門落寞、四十年記舊因緣、託言繪事、打供香烟、夫是之謂、大明國皇帝、辱賜金縷、少室峰祖師、親傳木綿、子璞大和尚、與最上乘禪者也、

師在大明日、二三子命工、寫壽像呈師、々曰、讚姑置之、中朝名公鉅儒、碩師宿衲、豈乏其才哉、而虛譽溢美、非我所欲也、歸朝之後、就小補求之可也、予聞命惟謹々書、

龍集丙午（文明十八年）冬節日

周瑋在明中ノ頂相ニ景三ノ讚ヲ求ム

大祥忌

〔蔭凉軒日錄〕文明十九年七月朔、己亥、○中略桂者赴也足軒齋會、蓋子璞和尚小祥忌也、

○義政、周瑋ヲ明ニ遣シテ、銅錢ヲ請ハシムルコト、十五年三月是月ノ條ニ、遣明使歸洛スルコト、十八年五月二十四日ノ條ニ見ユ、

是月、權中納言從二位高倉永繼ヲ罷メ、正二位ニ敍シ、左近衞中將西園寺公藤ヲ以テ之ニ替フ、永繼、薙髮ス、

義尙永繼ノ昇位ヲ執奏ス

西園寺實遠公藤ヲ用ナキニ依リ未ダ昇進ヲ奏聞セズ

〔公卿補任〕四十三

權中納言從二位同（藤）永繼、五十九、六月日辭、

從三位藤公藤（高倉（西園寺））、卅一、六月日任、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　六月廿二日、前藤中納言（高倉永繼）正二位のことし、むろまち殿より文よて御ものうあり、上しゆあまさおれとも御めんのよしと□御申あり、やうて又御うけしさ之御申、

〔親長卿記〕十六　閏三月七日、晴、和漢月次御會也、左府（西園寺實遠）頭役、○中略左府被命云、三位中將（西園寺）公藤、就無器用、于今昇進事不申入、雖然余無懸期、納言後闕之時、可預御沙汰之由可申入之、

甘露寺親長公藤ヲ中納言後闕ニ執奏ス

十日、晴、○中略左府申三位中將納言後闕事奏聞、勅許、女房奉書在之、卽遣左府、

〔親長卿記〕三十傳奏奉書案

三位中將殿納言後闕事、先日蒙仰之趣、令奏聞了、無相違勅答候、女房奉書入見參候、親長恐惶謹言、

閏三月十日

西園寺殿

〔親長卿記〕十六　六月十六日、晴、今日鞠張行、人數、新藤中納言可落飾云々、仍名殘惜也、予、新藤中納言、中納言入道、頭辨、頭中將、忠顯朝臣、永康（武家）伊勢次郎左衞門、廣戸、貞久（賀茂）縣主、

永繼落髮ノ名殘惜ノ爲メニ蹴鞠ヲ張行ス

〔實隆公記〕八　七月四日、癸丑、晴、及晚風吹、入夜雨降、○中略向藤中納言入道許、去廿三日得度云々、未賀之間、今日爲賀之也、忠顯朝臣、頭辨等在座、及象戲興、已向黃昏、被羞晚飡、不慮之儀有其興、

三條西實隆永繼ノ薙髮ヲ賀ス

〔大乘院寺社雜事記〕九十八能登岩井兩河用水相論條々十八枚目裏文書

○上略

一東山殿御得度定可入道人數事、○義政得度ノコト、本事、月十五日ノ條ニ見ユ、藤中納言、是ハ廿三日ト申候、

義政ノ薙髮ニ倣フ

てんきう、其外武家六人、大舘ト勢州トハ不可叶之由仰候、〇中略

六月十五日　政覺

如意壽とのへ

〔大乘院寺社雜事記〕九十七　六月十五日、

一自京都書狀到來、〇中略藤中納言廿三日可入道云々、

〔大乘院日記目錄〕六月廿三日、高倉中納言〇中略得渡云々、

〔政覺大僧正記〕八　六月廿三日、壬寅、

一今日高倉藤中納言令得度云々、

〔諸家傳〕八上高倉　永繼永豐卿男、母、

〇伊勢貞弘、右京亮ニ任ゼラルヽコト、便宜左ニ合敍ス、

〔親元日記〕八　七月廿六日、乙亥、

一與一（伊勢貞弘）殿官途御免、右京亮、

伊勢貞弘右京亮ニ任ゼラル

七月小庚戌朔盡

一日、庚戌、御祝、

〔御湯殿上日記〕〇京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　七月一日、あさ御いとひまいる、あんをん寺殿おいし所へ御まいりあるを、大をん所よりを見ゐいらせられて、ひれ入ゐいらせらるゝ、御とものひくゝたちをひろめんさうよてくもしまいらせらるゝ、こよひの御さゝ月いりものとし、

〔實隆公記〕八　七月一日、庚戌晴、孟秋朔、幸甚〻〻、今日不出頭、

畠山義就、山城代官齋藤彥次郎ヲシテ、宇治田原ヲ攻メシム、尋デ、彥次郎、義就ニ背キテ、畠山政長ニ屬ス、

〔大乘院寺社雜事記〕九十九　七月三日、八專、

一一昨日宇治田原自天王之畑之濟藤（齋下同ジ）之手亂入取者、剩在所悉以放火之、山城之沒落人等令居住故也云々、自畠山右衛門佐（義就）方之沙汰也、

十八日、

一右衛門佐方山城代官濟藤遁世、於八幡令入道云々、自佐方使者濟々遣之云々、

彥次郎八幡ニテ入道ス

安禪寺觀心尼ヲ召サセラル

廿六日、

一濟藤彦次郎山城國之大將也、背衛門佐、成左衛門督方之間、山城國右衛門佐方者共迷惑云々、（畠山政長）

〔大乘院日記目錄〕四　七月廿六日、○中略濟藤彦次郎沒落了、［　　］、

〔後法興院政家記〕十　十月十四日、壬辰、朝間小雨下、自宇治家幸許有注進、一昨日齋藤彦次郎令發向山城敵陣云々、○中略件齋藤雖爲右衛門佐被官、去七八月比、左衛門督方江令降參、山城敵押領寺社本所領等、彦次郎申給云々、○十月十四日ノ條參看、

○義就ノ兵、政長ノ兵ト山城宇治ニ戰フコト、十六年六月二十六日ノ條ニ見ユ、

三日、壬子、興福寺、箸尾爲國ノ同寺唯識講米無沙汰ニ依リ、其名字ヲ春日社等ニ籠ム、

〔大乘院寺社雜事記〕九十七　六月廿二日、

一○中略自學侶書狀到來、今日箸尾名字事集會在之、學賢五師及異儀云々、

〔大乘院寺社雜事記〕九九十　七月五日、

一一昨日箸尾爲國之名字被籠五社七堂、唯識講米無沙汰之故也、當供目代八一門者也、時節迷惑之由申、仍供目代職事、七日以後可辭退之之由伺申、

〔大乘院寺社雜事記〕百三　文明十八年四月廿一日、

一箸尾唯識講米無沙汰之間、被籠名字於五社七堂了、猶以不驚及惡口云々、近日箸尾郷ニ惡病發て、一郷ニ百卅人死了、代官瀧同妻女病之、以外之惡事共有之云々、各御罰之由申、雖然依計會可有其沙汰事、不及計略歟、甲辰十六年歲ノ夏季六斗引之計也、

五日、甲寅、古市澄胤、馬市ヲ大和元興寺門前ニ開ク、

〔大乘院寺社雜事記〕九九十　七月五日、

一元興寺南大門前馬市立初之、古市之所行也、伺定寺門之儀了、可然興隆事也、近郷繁昌也、毎月五日、十二日、廿五日三ケ度云々、

〔政覺大僧正記〕八　七月五日、甲寅、

一元興寺南大門ノ前ニテ馬市ヲ立云々、古市寺門ニ申合沙汰之也、

七日、丙辰、七夕御遊、和歌御會アリ、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　六月十六日、まけあき御きいこに

名字ヲ五社七堂ニ籠ム

箸尾郷ニ惡病發ル

毎月三度

豐原繁秋樂御稽古ニ參仕ス

まいる、○十七日、十八日、十九日、二十日、二十一日、二十二日、二十三日、二十七日、二十八日、七月一日、三日、繁秋參内ノコト、異事ナキヲ以テ略ス、

七月四日、○略中　去け秋まいる、

五日、○略中　去け秋參る、

六日、しけあきまいる、

七日、むろまち殿よりくゐひん一つ井ゐいる、むんろし山とのよりもたまいる、源大納言、てんゐり、日野よりくゐひんよてまいる、そう〳〵よりわほゝよてゐいる、あさ御さろ月いりものとし、御をつく夕ろさほとにまいる、きう上らぬ御まいり、御樂夜よ入てもしまる、ふしミ殿御ゐいり、する〳〵とめてさし、いてゝ御さろ月まいる、御くゐ井しとりろさをらるゝ、祿うそうさちをあそわす、

（庭田雅行）

（政宴）

九日、御くゐひんとも御ろへしほろわさるゝ、

義尚花瓶ヲ獻ズ
義政生花ヲ獻ズ
伏見宮邦高親王御樂ヲ聽聞アラセラルル
和歌題七夕言志

〔十輪院内府記〕中

六月十日、七夕樂目六密々到來、

七月三日、樂稽古依窮屈不成、峯秋來、

七日、○略中　今日禁裏御會、和歌題、七夕言志云々、昨夕清書付戸部了、晝間景兼、季繼（四辻）來、樂等俱行了、黄昏時分直衣（大帷重て）、參内、於黑戸東面有御樂事、黄鐘調也、

目六桃李花一帖、（只拍子）喜春樂序、同破、安城樂、平變樂、海音樂、鳥急也、參仕衆不分明、追而可尋記、余殘樂海音樂也、無爲祝著、内府殘樂終以不成如何々々、

參仕ノ人々

八日、樂林軒（綾小路有俊）來、余調子、頭辨殘樂、殊勝之由被感之、令安堵也、

〔親長卿記〕十六

七月七日、晴、禁裏七夕御會、（七夕言志）被下御題、元長同詠進懷紙也、有御樂如例、元長朝臣參仕、

〔實隆公記〕八

七月七日、丙辰、晴、星節、珍重々々、○略中　入夜參内、御祝已事了云々、仍御樂聽聞、及深更以天酌傾一盞了、御樂參仕人々、前内大臣（中院）、内大臣（花山）、園前中納言、兵部卿、四辻宰相中將、新宰相、山科三位、元長朝臣、基富朝臣、重治朝臣、重經等也、地下輩可尋記、四辻前中納言實仲卿重服之間不參云々、先規不然歟、御樂黄鐘調云々、目錄可尋記、朗詠二星適逢也、

○幕府七夕ノ行事ノコト、便宜左ニ合敍ス、

幕府七夕ノ行事ノ六角高賴義尚等ニ草花ヲ進ズ

〔親元日記〕八

七月六日、乙卯、

一六角殿（高賴）より三御所へ草花進上之、

〔古文書〕二十二

○内閣記錄課所藏

御節供料

一色義直
細川氏久
武田國信
諸家七夕ノ行事
伊勢貞宗
中院通秀
第

一一色殿（義直）小倉、　三貫文　是ハ七夕、ゐのこハ、りニ御進上、
一細河上（氏久）總殿　雜掌、　貳貫文　是ハ御節供毎度進納之、
一武田殿（國信）雜掌、　壹貫文　同前、

以上政所公人相觸之、文明十七六十八、

○諸家七夕ノ行事ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔親元日記〕八　七月六日、乙卯、

一同方（伊庭貞隆）より貴殿へ草花一荷進之、

〔十輪院内府記〕中　七月七日、乞巧儀如形、令祝著、詩二首、和歌七首、法樂任筆了、

八日、丁巳、宮女ヲシテ、伏見般舟三昧院ニ代拜セシメラル、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　七月八日、○中略ふしミへ御をうゝ
うよおゐも、新大も、おゝいし御まいり、大つゝ院へ仰をつけられて、御ゆつ
きよてくこんありて、ひし〳〵のよし、返御まいりよ御申ともあり、

十日、己未、安禪寺觀心尼、大慈光院宮等、生御魂御祝チ獻ゼラル、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　七月十日、あんせん寺殿御ふさ廣、

大聖寺宮
第三皇子
第四皇子
勝仁親王
尊敦親王
伏見宮邦
高親王
保安寺宮
龜大夫ヲ召シテ歌ハセラル

おゝ殿、大しやう寺殿、三（仁孝）の宮の御ゝさ、いゐわゝ宮の御ゝさ此御さゝ月ま
いる、あ□（もカ）し御所よゐ御ゝいらきの物三色一ゝ、三の宮の御ゝさよゐ、御ゝ
いらきの物五いろ二ゝ、いゐゐゝ宮ハ御ゝさより二色一ゝ、そのほゝい代
よてまいる、御所〳〵御しやくとも御と被しあり、七こん御ひし〳〵とゐ
いる、

十一日、宮の御ゝさ、二の宮ハ御ゝさ、ふしミ殿、御むゝ、ゐうあい寺殿の御さ
ゝ月まいる、御むゝより三ゝう二ゝ、ふしミ殿より三色一ゝ、そのほゝい代
よてまいる、御さゝ月八こん、御ひし〳〵とまいる、めてさし、ゝめゐゆふめ
してうさいきらるゝ、くゝとよてあり、ふしミ殿、御むゝい御ゐいりおし、お
とこさちミ形〳〵めす、ひんゝしのとうゐんとのい、めてさゝ御さゝ月の
物おりゝミにてまいる、

十二日、○中略あんせん寺殿へ御むゝよゐのおり二ゝう一ゝまいらせらる
ゝ、

〔實隆公記〕八　七月十日、己未、晴、入夜雨降、參内、當番也、俊量卿依所勞不參云
々、一身恪懃頗令窮屈了、今日安禪寺、大慈光院、大聖寺等宮被進御盃、傾數盃、

入夜於上臈局有一盞、

十一日、庚申、霽、○中略黄昏參內、今日宮御方以下被進御盃、於黒戸有此事、七條西川龜大夫參上、歌舞有興、事了退出之處、於長橋局又有盃酌、保安寺宮、兩上臈、大、新大典侍、勾當等也、天曙時分歸宅、滋野井令同□(遂カ)了、

近衛政家第生御魂祝

〔親長卿記〕十六　七月十一日、晴、夕立聊降、親王御方已下宮々御祝今日云々、雖有召、申故障之由了、

○近衛政家、三條西實隆第等生御魂祝ノコト、便宜左ニ合敍ス、

三條西實隆第

〔後法興院政家記〕十　七月五日、甲寅、晴陰、風吹、朝間小雨灑、早旦自石藏小童來、又一乘院被來、自一門有生見玉事、

〔實隆公記〕八　七月十一日、庚申、霽、遣一樽於亞相方、是佳例祝著也、晩頭於彼方有盃酌、

中院通秀第

〔十輪院內府記〕中　七月十三日、生見玉二進西御庵、海住山來食暮飡、約物三ヶ遣之狀也、

義尙、海棠ニ和歌ヲ添ヘテ獻ズ、仍リテ、御製ヲ賜フ、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　七月十日、○中略むろまち殿より、ろいたうのもとゝ御さんしやくつきて又いる、

海棠返花

義尙和歌

御製

〔實隆公記〕八　七月十日、己未、晴、入夜雨降、參內當番也、○中略抑自室町殿、海棠反花付和歌被進之、

うゝらしをいはくもはうゝ立うへりう經おく匂へ軒の梅ろゝ義尙

御製御返し、

かくうきめいまゝりゑめりさひ枕うかるゝ我し野へよゝゑく草

細川政元ノ部下、聯輝軒、永崇ヲ第前ノ途ニ毆打ス、尋デ、政元、罪ヲ懼レテ出奔セントス、義尙、伊勢貞宗ヲシテ、之ヲ止メシム、

部下結犬ノ時永崇ヲ毆打ス

〔十輪院內府記〕中　七月十日、○略中今夜細川九郎(政元)下向國之由稱之、乘輿騎馬數輩罷出之處、以御內書伊勢(伊勢貞宗)守追付留之云々、是先日結犬之時、飜聯輝軒之輿、逢恥辱給之旨、無面目之間、罷下之體云々、於一身逐電之體者、寔有由者乎、人馬濟々焉又罷歸了、相似狂骨、凡澆季之體言語道斷、眞是眞非、如夢如幻、

八月七日、○略中聯輝軒御出頭云々、

〔實隆公記〕八　七月十日、己未、晴、入夜雨降、○略中後聞、今日連(聯)輝軒於細河屋形前、有喧嘩事云々、

〔後法興院政家記〕十七月十二日、辛酉、晴、傳聞、一昨夕相國寺聯輝、細川九郎紹犬若者共少路ニ相群所ヲ輿ニテ被相過之處、自輿引出、散々以杖打之、僮僕小者以下又打之、腰刀等奪取之云々、言語道斷事也、縱雖爲凡人、出家身不可及禮儀、彼聯輝竹園連枝、東山殿御猶子也、忽及恥辱條、前代未聞珍事也、昨日伏見邊ヘ隱居云々、小者一人昨日死去云々、近日細川家風者共、緩怠狼藉人驚耳目、今果如此、可歎々々、

永崇ヲ輿ヨリ引キ出シ辱ム

十四日、癸亥、陰、晩景雨下、〇略中就聯輝事、細川九郎入夜罷出可在國之由有風聞、今夜今熊野邊江打立云々、或鳥羽邊云々、

十五日、甲子、晴陰、細川九郎被召返間、今朝歸洛云々、

政元歸洛ス

十七日、丙寅、陰、時々小雨下、細川九郎出仕云々、聯輝又以內書被召返云々、

永崇歸寺ス

〔蔭凉軒日錄〕七月十日、〇略中有入語予曰、今晚於細川殿屋形前不虞之喧嘩有之、蓋聯輝軒就山永崇藏主御分上事也云云、

十二日、〇略中次往妙嚴、弔聯輝軒被退居于退藏庵、有宴、及昏黑歸、

伏見退藏庵ニ退去ス

十四日、〇略中是日戌刻、細川九郎政元公就聯輝軒一件事出奔、自公方以御內書被召還、伊勢守貞宗爲御使、及五更歸宅云云、伊勢守亦歸矣、

十五日、〇略中謁萬松軒、聯輝軒、節之禮幷聯輝御退居事白之、

政元義政ニ謁ス

十七日、〇略中就聯輝軒公事無爲、細川九郎殿被謁東府、相公乃御對面云云、珍重珍重、

八月五日、〇略中聯輝軒御歸寺、伊勢守爲東府御使同途而歸云云、

六日、〇略中遂往聯輝軒、賀御歸寺、同往萬松軒亦賀之、

八日、〇略中晩來往小補、小補同途、〇略中於永德賀聯輝軒御歸寺、〇略中於永德有宴、歸路値雨、雨連明、

〔親元日記〕八八月五日、癸未、

一聯輝軒伏見殿御連枝、近日御隱居子細有之、同爲御使被參之間、千疋折帋進上之、今日御歸寺、相國常德院、

〔大乘院寺社雜事記〕九十九七月廿一日、

一石左衞門昨日自京都下向云々、參申、〇略中

連キ事幷細川九郎間事、〇略中

此條々相語者也、

十一日、庚申、幕府生御魂祝、義政、之ニ臨ム、

伊勢貞宗第生御魂祝

〔親元日記〕八　七月十一日、庚申、

一東山殿京御所へ御成、御生御玉御祝也、公人幷人六事申付之、出車下行、松明等事申付之、御輿舁九人、事、各下行有之、

三御盃、さゝゐ三獻、

以上大草調進分、

兵庫殿よりゐ、いる分、

御さゝゐ二獻、供御五まて、御菓子、御さゝゐ三獻、

以上小林以彼注文記之、

一御祝要脚七百疋大草方へ、

〔蔭涼軒日錄〕七月十一日、○中略東相公今日八鼓刻御成于西府曉來七鼓刻還御云云、

○伊勢貞宗第生御魂祝ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔親元日記〕八　七月十日、己未、

一北白河爲御生御玉祝儀兩種一荷進上之、給御盃、

十二日、辛酉、

龍子山城守大塚成貞江戸賴通戰死ス村松ニ戰フ常陸ノ兵日高寺堂塔ヲ火ク佐竹ノ亂江戸氏

一東とのへ御生御玉御祝として、白河より御樒代五百疋ゐいる、

十三日、壬戌、

一白河とのへ兵庫殿より御樒ゐいる、御生御玉也、仍今夜御參御盃ゐいる、

珍重〳〵、

陸奥岩城常隆、常陸ニ入リ、是日、佐竹義治ノ屬城車城ヲ陷レ、龍子山城ヲ降シ、進ンデ太田城ヲ攻ム、

〔常陸誌料〕三後佐竹氏譜上　十（文明）七年七月、岩城常隆下總守、發兵侵常陸、十一日、攻多珂莊車城陷之、心車鈔、岩城系圖、赤濱妙法寺過去帳、龍子山城主大塚成貞望風出降、常陸國誌、常隆進逼太田、我衆拒之、木崎江戸賴通戰而死之、又戰于村松、敵縱火燒日高寺堂塔、心車鈔、和光院合運、我衆大敗、世傳謂之佐竹亂、和光院合運、後常隆遷弟好間隆景車城寘之、子孫稱車氏、岩城系圖、先是車、龍子山並皆屬我、至是竟失之、

〔常陸誌料〕六諸族譜三　江戸氏

本系圖、無子、養通房三子賴通爲嗣、賴通稱彥次郎、古本戸村谷田部三本系圖、文明十七年、爲佐竹義治、戰于太田、木崎而死、谷田部本系圖、那珂家傳、有子、曰通衡、通衡稱新三郎、一本系圖、後有盛通、盛通稱駿河守、谷田部本系圖、

大塚氏

〔常陸誌料〕六諸族譜十六　大塚氏　頼成、稱下總守、初居大塚、嘗俟、後付之弟成義、別築龍子山城而遷焉、寛延手綱記、文明十二年正月廿三日沒、法名道善、妙法寺寶塔寺兩過去帳、有子、曰成貞嗣、朝香棟札、

成貞、稱伊勢守、初事佐竹氏、戸村本佐竹系圖、佐竹譜代系圖、文明十七年七月、岩城常隆下總守、發兵略多珂郡、十一日、攻車城陷之、岩城系圖、諸草心車鈔、妙法寺過去帳、成貞懼出降、常陸國誌、竟爲岩城氏麾下、晚薙髮稱長祐、妙法寺過去帳、以退老居外城、人呼曰外城伊勢入道、手綱記、

車氏

〔常陸誌料〕六諸族譜十七　車氏　車氏、初好間氏、岩城氏族姓平、岩城系圖、文明十七年七月十一日、岩城常隆發兵略多珂郡、攻陷車城、城主砥上某戰死、法名曰花岳、妙法寺過去帳、諸草心車鈔、車一名砥上、後砥上名隱、車名獨著、土人傳說、永和中、有城主、曰砥上忠員、稱但馬守、其子曰通忠、稱兵衛藏人、密藏院舊記、蓋岩崎二階堂氏族、佐竹譜代系圖、而花岳之先也、按、常北遺聞云、相傳嘉元、德治間、有臣庭加賀守、稱比佐居士、僧楚石夢窓、挂錫其家、數歲、夢窓年譜載比佐居士事、其法名曰一叟長圓、今車城趾東有長圓寺、云是其功德院、據之則車城似是臣庭氏所居、然臣庭近地名、與車砥上自別、於是常隆徙族好間隆景、爲其城主、後稱車氏、岩城系圖、

隆景、稱兵部少輔、上總介、岩城系圖、蓋別號東風、常北遺聞云、東風子曰加風、加風子曰一風、然過去帳、按、常北遺聞云、有子、稱藤五郎、失名、妙法寺過去帳、藤五郎、別號一風、過去帳、以一風爲東風子、則加風蓋一風、遺聞誤倒世次前後、長享元年十一月沒、法名妙忠、過去帳、蓋子曰加風、

太田城

〔常陸三家譜〕一江戸氏

通房

通房、通壽所記、光院過去帳、和光院過去帳、或作通勝、那珂所記、彥五郎、從五位下、但馬守入道、通壽所記、法名道勝、年五十六、和光院過去帳、六藏寺過去帳、按、江戸初通勝、雜隆忌、通房、

賴通

彥二郎、那珂所記、通壽所記、文明十七年乙巳佐竹亂、通壽所記、太田木崎打死、那珂所記、

通弘

彥四郎、那珂所記、通壽所記、河內守、枝川氏祖、其母弟也、通壽所記、太田木崎打死、法號珊栖、

車城

〔參考〕

〔新編常陸國誌〕七十八故蹟　太田故城

補、久慈郡太田村ニアリ、佐竹氏ノ據ナリ、略○中文明九年義俊死、義治嗣、

車故城

補、多賀郡車村後澤一丘陵ノ上ニアリ、群馬城、又ハ半淵城ニ作ル、又曰庭城

親隆車氏ヲ稱ス

ト稱ス、相傳フ、嘉元中、臼庭加賀守之ニ居ルト、天授中、砥上氏三世之ニ居ル、因テ又車氏ト稱ス、文明ニ至テ、岩城常隆之ヲ亡シ、弟親隆ヲ置ク、因テ又車氏ト稱ス、後チ佐竹氏ニ從ヒ、慶長中ニ至テ、城廢ストイヘリ、

手綱城

手綱故城

補、多賀郡下手綱村ニアリ、龍子山上ニアリ、古ヘ龍子山城ト稱ス、大塚氏始テ築ク、大塚氏ハ佐竹貞義ニ出ツ、貞義第四男義成掃部介、大塚ノ地ニ邑シ、後手綱村龍子山ニ移ル、石城、佐竹二氏ノ間ニ介シ、常侵掠ニ因シミ、石城氏ニ服ス、

布施英基沒落後空地トナル

十二日、辛酉、義政、相國寺住持伯升ノ請ニ依リ、同寺ヲシテ、延壽堂敷地ヲ舊ノ如ク沙汰セシム、

〔蔭涼軒日錄〕七月十二日、齋罷謁東府、略、中當寺延壽堂之敷地一亂之後、布施下野守(英基)以寺家許容爲屋敷、就沒落彼敷地爲空地、○布施英基沒落ノコト、五月二十三日ノ條ニ見ニ、然間如元可爲寺家進退之由、住持伯升和尚、都文宏詵以連署白之、今日伺之、御許諾之命有之、及歸召出官、傳台命、

八月十一日、略、中就相國寺延壽堂地事、自相國住持一行來、可達西府云云、

伯升義尚ニモ訴フ

義政室日野氏ノ執成

十五日、略、中午後謁西府、略、中又相國寺延壽堂敷地事、亂後布施下野守以寺家命爲屋地、布施沒落以後、自寺家以訴狀達東府、如先規可爲寺家進退之由望之、可爲如先規之命有之、以此旨、可達西府之尊聽由、以訴狀被白之、今彼兩通奉供西府尊覽、御意得之由有之、

十六日、略、中相國寺延壽堂敷地事、以寺家一行、昨日供西府尊覽之由、召出官、傳于方丈、

廿二日、不參、相國寺延壽堂敷地事、昨日自上樣重而被仰出、御使飯尾四郎也、今朝相國侍衣幷出官、傳其命、

廿三日、謁西府、略、中就相國延壽堂敷地事、相國寺住持一行到來、乃於西府渡松波六郎左衞門尉、以說與寺家訴訟之趣、

廿六日、略、中相國延壽堂敷地事、自上樣以飯尾四郎被督之、乃召出官傳命、

晦日、略、中午時謁西府、略、中又相國寺延壽堂地事、於東府予向相國住持伯升和尚曰、自西御所切々被督之、縱有難澁不可有御免許、然者爲寺家被領掌者、可然歟之由白之、伯升云、都文亦與予所白同意白也、然者領掌分可白由問之、及回以梅藏主飯尾四郎爲引導、以住持所白傳于松波六郎左衞門尉、乃可達

上様之尊聞云云、又以其旨、傳住持伯升和尚、

義政鹿苑院ニ香爐ヲ寄進ス

十四日、癸亥、義政、鹿苑院施食會ニ臨ム、尋デ、等持院、普廣院等ニ詣ル、

〔親元日記〕八　七月十四日、癸亥、

一御成、七時、鹿苑院、普廣院、御輿舁九人、公人、人夫、事下行之、

十五日、甲子、

一御成、五時、鹿苑院、等持院、御時、御輿舁十三人、公人、人夫、

一御成、八半時、鹿苑院、普廣院、御輿舁九人、公人、人夫、

〔蔭涼軒日錄〕六月十七日、天快晴、○略中　自東府御直垂一具被出之、○略中　又香爐七ヶ御寄進于鹿苑院、同時請取之、古銅香爐六ヶ、紫銅香爐一ヶ、幷七ヶ、七月御水向時、可被置諸靈之牌前之用也、乃自鹿苑調請取進上之、

廿一日、○略中　自鹿苑院、以侍衣見謝相公所賜之御折二合、且御香爐七箇御寄進之事、

廿五日、○略中　來月十五日等持院御成、御齋如恆可有用意、然者可奉伺之由、自院以出官尋之、予諾、返出官、

廿六日、○略中　自等持院以侍衣來月十五日御成御齋事、如恆可調其儀云云、返答云、明日可奉伺之、

廿七日、午後謁東府、奉伺來月十五日等持院御成御齋事、必可有御成旨有之、又伺來十三日鹿苑院施食御成事、同十四日等持寺施食、同十五日相國寺施食等同前、先近年可爲如御成歟、其分書立之可伺之由有命、

廿八日、不參、就來十五日北等持御成事、遣一行於北等持、有回章、

七月二日、齋罷謁東府、今月中御成書立供台覽、如去年可有御成之命有之、

六日、齋前等持寺住持高先西堂來臨云、來十四日施食可有御成否事被相尋、答云、所々施食近年無御成、自當年可爲如先規云云、可有其用意云云、○略中　來十四、十五日御成路次掃地事、以僧所司代方江督之、蓋依諸奉行無出仕、自此方直督之也、以此旨傳當職方也、

義政施食疏銘ヲ書ス

八日、○略中　爲御水向、荷葉五十枚兆賢法橋方江可被渡由、以折簡傳之、北等持方丈依大旱一莖亦無之由、返章有之、

九日、不參、荷葉五十枚爲御水向、御承仕兆賢法橋方江可渡之由、遣一行於等持寺、

十二日、齋罷謁東府、來十三日鹿苑院施食疏御銘白之、第二行准三宮之三字

有之、其下可被遊御法名、又年號下、又假籠上、以上三處可被遊也、乃如白遊之
被出矣、

鹿苑院ニ著ス　昭堂ニ入ル　燒香ノ次第　本房ニ入ル　四十八燈ヲ挑グ　御所間ニ入ル　本尊十三佛等ニ燒香　再ビ鹿苑院ニ臨ム　燒香

十四日、齋罷謁東府、奉報來晚鹿苑、普廣御水向御成事、七鼓刻可白案內之由
白之、同明日鹿苑院御水向幷北等持御齋事奉報之、七鼓以前予往鹿苑奉待
御成、能倫白案內、則御成、先昭堂本尊御燒香、周阿獻香合、次開山御燒香、次天(義藤)
山眞前御燒香幷米水、次善(義教)山相公眞前御燒香米水、次御成于本房、於東向緣
先御燒香、四十八灯御挑之、左方二十四灯、右方二十四灯、各六灯御挑之、以上
十二灯也、而被獻新米幷五果等、御燒香、次於御所間、北方之東爲上首、本尊十
三佛御燒香、次開山御燒香、佛餉飯被立筋、見獻米水、次等持(尊氏)院殿(義詮)、寶篋院殿(義滿)、鹿
苑院、勝鬘(義持上)院、勝定(義持)院、普廣(義教)院、勝智(義敎世)院、慶雲(義勝)院各御燒香、各被立御筋、見獻米水、壽
繁喝食參侍、次普廣院本尊御燒香、次觀仲眞前御燒香、次善山眞前御燒香、見
獻米水、御還御、
十五日、不參、五鼓刻以能倫行者白御成案內、則先御成于鹿苑院、本尊御燒香、
周阿獻御香合取御扇子、次開山眞前御燒香、次鹿苑眞前、普廣眞前如昨晚、次
本坊四十八灯無之、直於御所間御燒香、御水向規式與昨晚同前、壽繁喝食參

佛殿ニ入ル　祠堂ニ入ル　瑞智義政ヲ方丈ニ迎フ　齋　義政御所間ニ入ル

侍、遂御成于北等持、予先往等持歷覽佛殿、後門、三塔、祠堂等、於山門東東廊內
南方、奉待台輿、台輿自摠門御入、於山門東見卸台輿、予前引入佛殿、本尊御燒
香、周阿獻御香合、取御扇子、次登(尊氏室赤松氏)眞眞前有三靈之供、自東次第西而御燒香一
度、新米一獻、淨水三獻、次果證眞前有三靈之供如上、次靈壽眞前有三靈之供
如上、以上九靈以御香合被渡周阿、周阿又獻扇子、次祠堂先本尊御燒香、御香
合御扇如上、次左邊之二間各有三靈之供、御燒香米水如上、次右邊之二間各
有三靈之供、御燒香米水如上、以上十二靈摠計廿一靈遂御成于方丈、鹿苑院
惟明(瑞智)和尙奉迎相公、相公相揖御著坐、御相伴衆各著坐揖坐具、予亦在相公下
位揖坐具、御齋三汁七菜、冷麪汁幷麪再進各一度、前汁後麪、其次糒水、水再進
一度、次果子五種茶盞、次瓜置果子右邊、茶了先取瓜、次取菓子茶盞、院主奉送
相公、御成于御所間、御後架御手水、壽繁喝食勤之、○中略北等持桂室和尙來于
當軒、被謝今晨御成、八鼓後半時以能倫白鹿苑、普廣御成案內、則先御成于鹿
苑、昭堂御燒香如昨晚、今朝、次於本房東緣、見挑四十八灯如昨晚、次於御所間
御燒香如上、御靈供無之、只米幷水耳、壽繁喝食參侍、次普廣院御燒香如昨晚、
御還御當寺施食如恆、功叔(周全)來見、伸月翁(周鑄)和尙南禪寺謝、以面丁寧說之、

明石燈籠
伏見宮邦高親王御參内
奈良燈籠ヲ妙法院敕覽ニ賜フ

八月七日、〇中略七月御水向時入水之提子不具也、前御代被入水之器如何、相尋可白之命有之、乃相尋于鹿苑院、鹿苑院曰、前代事無存知者、近年者任御承仕耳、以此旨傳調阿方、

十五日、甲子、盂蘭盆會、義尚等、燈籠ヲ獻ズ、

〔御湯殿上日記〕〇京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　七月十三日、御とうろをうゝ〳〵ゐいる、

十四日、御とうろもう〳〵よりまいる、むろまち殿よりあゝしとうろをまいる、

十五日、々ふを御とうろまいる、むもそのくこいりものことし、ふしを殿御とうろ□□□□られよ御ゐいり、めうゐう院殿も御ゐいり、

十六日、御とうろの御くもりともせらるゝ、〇中略おらとうろめうゐう院とのへゐいらせらるゝ、

〔後法興院政家記〕十　七月十四日、癸亥、陰、晩景雨下、内々自禁裏被仰出間、灯爐一令進上、

〔親長卿記〕十六　七月十二日、晴、有犬産穢事、

三條西實隆ニモ賜フ

十五日、晴、御燈爐今日ニ進上、兩三日犬産之故也、

〔實隆公記〕八　七月十四日、癸亥、晴、〇中略燈呂一ヶ昨夜親元送之、今朝令進上禁裏了、

十六日、乙丑、晴、自禁裏燈呂一被下之、畏入之由申入了、則遣新右衞門許、

十六日、乙丑、月食、

〔本朝統曆〕十一　甲申七小朔庚戌、戊五、十六望、卯三、月蝕六分弱、寅八、卯七、

〔參考〕

〔東京天文臺回答書〕オツポルツエル食表によりて、計算の結果左の如し、

文明十七年七月十六日、月食、初虧午前六時三十九分、食甚同七時五分、復圓同七時三十一分、京都地方眞太陽時、食分〇分五厘、

月食當日、京都に於ける日出時刻の概値は午前五時三十四分京都地方眞太陽時、なる故、此月食は京都にては月入後に起り、見えさりしなるへし、

等持寺住持景照、高先、萬壽寺住持永猛伯進退院ス、尋デ、永猛、再ビ萬壽寺住持ト爲ル、

〔蔭涼軒日錄〕七月十六日、〇中略等持寺照高先（欠脱）報退院來、萬壽寺永猛伯進和

尙亦報退院事來、

廿日、○中略萬壽寺亦再住事、伯進和尙領掌之、

八月六日、○中略雲居庵高先西堂、近日爲住持爲禮來、

十七日、丙寅、元暉、（継章）再ビ建仁寺住持ト爲リ、是日、退院ス、

〔蔭凉軒日錄〕六月二日、不參、建仁再住繼章暉（元暉）和尙來、

七月十七日、○中略建仁寺繼章和尙報退院事來、

刑部少輔朽木貞綱卒ス、子貞清嗣グ、景照天龍寺雲居庵ニ住ス

〔親長卿記〕十六　七月十七日、晴、朽木刑部少輔貞武（貞綱）死去云々、不便々々、

〔系圖纂要〕八十四　朽木　宇多源氏三　世系

貞高

貞綱本貞武、彌五郎、刑部大輔、從五下、

貞清本材秀、彌五郎、信乃守、刑部少輔、延德二年五ノ賜御敎書、

○幕府、貞綱所領近江後一條安主名ヲ、將軍世子供菜料所トシテ貞綱ニ預クルコト、應仁二年七月八日ノ條ニ、貞綱、院御領所御一獻料ヲ納ムルコト、文明元年三月五日ノ條ニ、幕府ヨリ安主名ヲ安堵セシメラルヽコト、並ニ年貢及ビ要脚ヲ幕府ニ納ムルコト、同年十一月十日ノ條ニ、幕府ヨリ武田國信ト與ニ兵ヲ越前敦賀ニ出シ、西黨ヲ討タシメラルヽコト、三年六月二十五日ノ條ニ、義政、貞綱ヲシテ、東將六角政堯ト共ニ、同高賴等ヲ討タシムルコト、同年閏八月二十五日ノ條ニ、貞綱室歿スルコト、五年年末雜載、死亡ノ條ニ、義尙供御ノ費ヲ進納スルコト、九年六月十一日ノ條ニ見ユ、

二十一日、庚午、切籠ノ御勝負アリ、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　七月廿一日、御きりこの御をうぬとて、上らぬ、こんをけ殿、新をけとのより御てうし御ろいらきの物まいる、御ひしゝ〳〵と御さゝ月ろいりて、十とのゝをゝらて□のゝまて、御ひしゝゝとろいる、□より御くゐんおとろいる、

二十六日、乙亥、山城城東寺ヲ勅願寺ト爲ス、

〔宣秀五位藏人御敎書案〕城東寺綸旨事

一當寺爲勅願寺之由被聞食畢、殊可被專國家安泰朝廷繁榮之御祈禱之由天氣所候也、仍執達如件、

文明十七年七月二十一日　二十六日

文明十七年七月廿六日　　（中御門宣秀）權右少辨判

城東寺住持御房禪室歟、當寺禪僧也、

〔參考〕

〔山城志〕五佛刹　愛宕郡　城東寺在大和大路五條南、寺有康曆文明年間綸旨、觀應以來將家喜捨文數章、又見百練抄、今屬南禪寺、

〔附錄〕

〔蔭涼軒日錄〕七月廿三日、〇中略陽叔西堂持城東寺支證來、爲闕所之謂說之云、布施下野守太無道也云云、

義政、南御所義政ノ女、ヲ訪フ、

〔親元日記〕八　七月廿六日、乙亥、

一御成南御所、出車、松明等事申付之、

〔蔭涼軒日錄〕七月廿六日、〇中略此日東相公御成于南御所、蓋有法事也、

二十九日、戊寅、權大納言一條冬良ヲ橘氏是定ト爲ス、

〔公卿補任〕四十三　權大納言從二位藤冬良、廿二、左近大將、六月廿九日橘氏是定宣下、

冬良ノ所望ニ依リ宣下

〔後法興院政家記〕十　七月廿一日、庚午、小雨灑、橘氏是定事、左大將所望間被補之云々、

〔諸家傳〕一下條　冬良　同年（文明十七）六月廿九日、橘氏是定、

是月、幕府、納錢條目ヲ定ム、

〔古文書〕十四　〇內閣記錄課所藏（增寫書）「納錢」條々案」

酒屋土倉役錢

一酒屋土倉役錢事、可爲平均沙汰處、近年或廻有緣之料簡、或依權門之吹擧、難澁之族數多云々、仍隨役之輩彌無人之間、臨時課役及度々條、不便之至也、所詮爲令加增在所可專糺明事、

一土倉役事、隨質物員數、如先規、可致其沙汰之事、

味噌屋役

一味噌屋役之事、如先規、可致其沙汰事、

廢業已後三ケ年ハ再興停止

一上狀已後者、三ケ年間再興之儀不可叶、萬一無左右及興行者、可被處嚴科事、

一捧上狀之時者、可相副當月分納錢事、

文明十七年七月　日

八月大　己卯朔盡

一日己卯、日食、

〔本朝統暦〕十一　乙酉、八大朔己卯、七、日蝕十一分弱、辰八、午五、

〔参考〕

〔東京天文臺回答書〕オツボルツエル食表によりて、計算の結果左の如し、

文明十七年八月朔日、日食、初虧午前八時十六分、食甚同八時五十七分、復圓同九時四十分、京都地方眞太陽時、食分一分三厘、

八朔御祝、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　七月廿九日、御ゆめす、新大そもし、夜るより雨ふる、

新そもし御ゑいり、御さのむとう〳〵ゑいる、

八月一日、あさ御さの月ゑいる、御さのむとし〳〵のとくまいる、二の宮（尊敦親王）乃御ゑさよゑい、おとしより、もんをねよゑゑいらるゝ、むろまち殿よりの御つゑひくゑんまゆう寺の大納言（教秀）、返しいぼものとくやゑてゑいる、御むゑさいちやう所へまいる、いゑ一疋（丹波重長）もおけおゑに御やく代まさふ、もう〳〵（白川忠富）への返しとをせらるゝ、こん部よりおもし一ゑいる、源大納言よりを□ゑ

遝
尊敦親王ノ分
義尚ノ分
吉田齋場所ニ馬ヲ賜フ
御返
白川忠富鯉ヲ獻ズ

御宴

しゐ一まいる、新大そもしより□御てうしゑいる、およひの御さゑ月つゑのとし、きう上らぬ御ゑいり、

二日、ゑふい、御返しをられを、○中略上らぬ、そけ殿さちへ、おゑいしもしめて、およひも雨ふる、みお〳〵より、御さのむとてはして御ゑひともゑおし、あんをん寺殿なる、

三日、けさより御返しともせられて、こと〳〵くもつる、ゑふうもうさちへい、まりきう〳〵せらるゝ、

四日、○中略一日の御返事とて、御所よりてくこんあり、御ゑいらゑ此物とも、そのほゑ御ふさよも、御物とも入て、御てうしおと、きき〳〵とまいりつとふ、

近衛政家物ヲ獻ズ

中院通秀水入等ヲ獻ズ

大さゑ月よりてくしおとあり、御ひし〳〵おりく御御所〳〵をまいりてめてさし、

〔後法興院政家記〕十　八月一日、己卯、晴陰、嘉例一種進處々、禁裏、伏見殿、○中略自伏見殿有御返、

〔十輪院内府記〕中　八月一日、陰雲如昨日、八朔之儀、禁裏象水入、杉原十帖也、

三日、自禁裏御返十帖、御香爐拜領、

〔親長卿記〕十六　八月一日、晴、入夜參內、

〔實隆公記〕八　八月一日、己卯、晴、〇略中　入夜參內、御祝祇候人々、源大納言、按察、權中納言、下官、民部卿、四辻宰相中將、新宰相、以量朝臣等也、參內之次參伏見殿、〇略中

御祝祇候ノ人々　三條西實隆　邦高親王第祇候

御賴共事

禁裏、金一腰、杉原十帖、御返御扇、十帖、三日到來、

實隆物ヲ獻ズ

宮御方、御太刀、

勝仁親王ニ獻上

〔宣胤卿記〕八朔　同（文明）十七年

內裏　檀帋十帖朔日進上、宣秀御太刀金進上、御返同御太刀同日賜之、虫籠一　檀帋十帖　御扇一本

中御門宣胤ノ獻上

ふ地めてささとさらいりよ十帖、むしこ乃いらせ候、御心え候て御披露候へく候、あおうしく、表書也、勾當內侍との御局へ　のふ胤

○廷臣、將士、幕府ニ贈遺スルコト、便宜左ニ合敍ス、

廷臣將士幕府ニ贈遺ス

〔後法興院政家記〕十　八月一日、己卯、晴陰、嘉例一種進處々、〇略中　東山殿、室町殿、御臺等也、御返明後日可給之云々、

近衞政家物ヲ義政父子等ニ贈ル

〔十輪院內府記〕中　八月一日、陰雲如昨日、八朔之儀、〇略中　武家兩所金覆輪也、少々私茂修理五十疋、

中院通秀

〔實隆公記〕八　八月一日、己卯、晴、賴之儀如形遂其沙汰、〇略中

三條西實隆

御賴共事〇略中

東山殿、御太刀、御返同、御使伊勢上野、（貞弘）

室町殿、同、　同、　御使伊勢次郎左衞門尉、（貞賴）

御臺、御兆子提、十帖、杉原、御返御扇一裏、十帖、御使大和佐渡、（邦永）

〔宣胤卿記〕八朔　同（文明）十七年

七月廿六日付伊勢備後守、御返四日

東山殿　御太刀金覆輪　御太刀

室町殿　同　御太刀　同、　四日　御太刀

御臺　小川殿　同　杉原十帖　三日　杉原十帖　胡銅香爐卓、

中御門宣胤

進上

御太刀金覆輪、一腰

以上

中御門中納言宣胤上　此上不可書也、

（朱巻）「進上イ」

御杉いら　十帖

むし籠　二

以上

中の御ゝとゝ中納言のふ胤

〔古文書〕○十八内閣記録課所藏

（包紙）「文明十七八朔御祝要脚事、」

山名治部少輔

伊勢守殿（貞宗）　豐時」

御返報

就來月御祝儀、千疋可致進上之由蒙仰候、畏入候、則申付候、奉憑御心得候、恐々謹言、

七月十八日　豐時（花押）

伊勢守殿

御返報

山名豐時

大津富田小法師

福田小法師

伊勢貞陸鯨鱧ヲ義政ニ贈ル

伊勢貞宗

大内政弘藝阿彌陀佛申次

〔親元日記〕八　七月廿八日、丁丑、

一御被官大津富田小法し、爲八朔御禮、

兩種二荷進上、

同福田小法し、

兩種二荷、

八月朔日、己卯、

一兵庫殿御進上、鯇一折、鱧一折、以上東山殿、

一御進物御返等事別ゟ記之、

一東山殿御憑所へ貴殿より、

點心、（むし）（むき）、御さゝゐをそし、のし蚫、柳三荷、

一大内殿進物三御方分、藝阿彌陀佛被申次、御返同、

御太刀、金、三重、弓廿張、釜十、引合、以上、

御返御太刀、末行、御馬、鹿毛、印日結雀、

京御所へ、御太刀、包次、五重、弓廿張、釜廿、引合、以上、

御返御太刀、金、御香爐、胡銅、御盆、珪漿、御馬、黑、

日野富子ニ贈ル

上様（日野富子）、五重、引合、

御返御扇一つゝゝ、廿本、御てうしひさけ、引合、

御私、太刀、金、千疋、杉江方へ渡之、

御返太刀、國安、

土岐成頼

一土岐（成頼）殿

御太刀、糸、御馬、黒糟毛、印雀目結、三千疋、定泉御倉、

御返御太刀、景光、御馬、黒、

京御所、御太刀、糸、御馬、月毛、雀目結、三千疋、定光御倉、

御返御太刀、末行、御香爐、胡銅、御盆、珪漿、

上さゝ、三千疋、

御返御扇一つゝゝ、廿本、御てうしひさけ、引合、

御私、太刀、糸、貳千疋、杉江方へ渡之、

御返太刀、吉元（光カ）、馬、月毛、印雀目結、

六角高頼

一六角（高頼）殿

御太刀、安則、三重、引合、御馬、月毛、印雀目結、

朝倉氏景

御返御太刀、景友、御馬、河原毛、印兩日結、

京御所、御太刀、金、五重、練、御小袖（ゐ）る、引合、

御返御太刀、金、御香爐、胡銅、御盆、堆朱、

上様、三重、練、引、

御返御扇一つゝゝ、十本、御てうしひさけ、引、

御私へ、太刀、康光、御返太刀、清綱、

一朝倉孫右衛門尉氏景、

御太刀、吉信、御馬、黒、三重、代千疋、

御返御太刀、景光、御馬、黒、

京御所、御太刀、則長、御馬、河原毛、三重、代千疋、

御返御太刀、盛景、御馬、月毛、

上さゝ、三重、代千疋、引、

御返御扇一つゝゝ、十本、御てうしひさけ、引、

御私へ、千疋、御返太刀、景則、

宍道秀慶

一宍道兵部少輔殿秀慶、

東山殿、御太刀金、進上、御返御太刀、金、
京御所、御太刀、金、一重、代三百疋、御返御太刀、糸、
一加州得光（盛敦）
兩御所、御太刀、各糸、御返各金、
御私、太刀、金、手綱、腹帶三具、梅鉸、御返太刀、糸、
一月輪院（尭覺）
兩御所様へ、各御太刀金、進上、御返各同上、
一畠山左衛門佐（義統）
東山殿、御太刀、糸、貳千疋、
御返御太刀、助宗、御馬、蘆毛、
京御所、御太刀、糸、五千疋、
御返御太刀、吉久、御香爐、胡銅、御盆、堆紅、
上さ嵩、貳千疋、
御返御扇一つゝゝ、廿本、御てうしひさけ、引、
以上八朔、

得光盛敦
月輪院尭覺
畠山義統

○諸家相互ノ贈遺ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔後法興院政家記〕十　七月廿八日、丁丑、朝間小雨灑、祇候面々令申沙汰一獻、御憑也、近年如此、一乘院被來、有揚弓興、廿九日、戊寅、夜來雨下、申刻以後止、自一乘院給御憑料、三百疋、多羅尾、小河等進御憑如例、

八月三日、辛巳、晴陰、自處々給御返、

〔十輪院内府記〕中　八月一日、陰雲如昨日、○略　少輔杉原三帖、筆、主計源二郎御棰、干鯛、茄子等也、一條亞相（冬良）筆、大管、（鑑本公冬）橋相公引合、筆等也、自餘不能記、○略

鬼若來、○略　眞光院稱禮來、淨福寺來、

〔宣胤卿記〕八朔　同（文明）十七年

到來　返四日
朝貞　太刀
左衛門三郎　干鯛五　米到來之時遣之、
清目　箒二、ゆこんゝう、三十疋遣之、

〔實隆公記〕八　八月一日、己卯、晴、賴之儀如形、遂其沙汰、自御牧樽共進之、招人

諸家相互ノ贈遺近衛政家第揚弓ノ興
中院通秀第
中御門宣胤第
三條西實隆第

々賞翫了、○中略師富朝臣、泰清、信直等來、

御賴共事○中略

伏見殿(邦高親王)、金、御返同、卽到來、

飛鳥井(雅康)、同、返同、四日到來、

勸修寺(教秀)、同、返同、二日到來、

甘露寺(親長)、同、返則到來、

日野(政資)、同、

東隣(正親町三條公治)同、返則到來、

羽林(橋本公夏)、金、被送之、返則遣之、

及晩自德大寺(實淳)鱸魚一被送之、則遣二階堂(敎行)了、

〔親元日記〕八　七月廿八日、丁丑、

一御被官大津富田小法し、爲八朔御禮、

○中略兵庫殿へ、兩種一荷、

同福田小法し、

○中略兵庫殿へ、兩種一荷、

八月朔日、己卯、

一佐々木田中(貞信)殿より、

御私へ、兩種、鮎廿、鮮、御返太刀、糸、

一梅戸左衞門三郎殿貞實、

白河へ、太刀、金、蛇千本、三百疋、奉行横山雅樂助方へ渡之、

御返太刀、持、

兵庫殿太刀、金、蛇千本、

御返太刀、糸、

一定泉坊瑄運、

太刀、金、貳百疋、同前、

御返御太刀、糸、

廿三日、辛丑、

一織田大和守(敏定)八朔御禮、貴殿へ沓一足、三百疋、杉江方渡之、

廿四日、御返太刀、持、

十月十八日、丙申、

一佐々木宍道兵部少輔殿秀慶、より、爲八朔祝儀、依海路障、于今遲引云々、太刀、金、貳百疋、杉江方へ渡之、

十九日、御返太刀、持、

四日、壬午、北野祭ヲ停ム、

〔十輪院内府記〕中　八月四日、爲北野法樂十首續歌詠之、今日祭禮無跡形者也、

中院通秀
北野法樂十首續歌ヲ詠ズ

勝仁親王、唐紗ヲ義政ニ徴セラル、義政、之ヲ獻ズ、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收　八月四日、夕ゝさより雨ふる、

（頭書）ひんゝし山とのへ、宮の御ゝさの御ようにゝらのゝ志や御申あり、一たんゆいる、めてさし〳〵、

山城、大和、河内ニ、土一揆相踵イデ蜂起ス、幕府、所司代多賀高忠等ヲシテ之ヲ鎭壓セシム、

〔古文書〕二十三○内閣記錄課所藏

（端裏書）一就土一揆蜂起風聞御下知事文明十七八」

就土一揆蜂起風聞被仰出所々、

一揆蜂起ノ風聞ハ幕府ノ所々ヘノ下知

一諸家御使之事、

六角高頼
伊庭貞隆

一所司代事、

（多賀高忠）

一江州守護、同宮内大輔殿幷伊庭（貞隆）、

山門使節

一山門使節中、

園城寺

一園城寺雜掌大津已下之儀、

石山寺

一石山寺、

賀茂社

一賀茂、

一西岡事、專九郎とのへ、

松尾社

一松尾雜掌、

細川政之

一讃岐（細川政之）兵部少輔殿、

大覺寺

一大覺寺殿雜掌、

鹿苑院

一鹿苑院出官西松崎、福枝、幡枝事、

山科

一山科、

七月廿九日

〔古文書〕九○内閣記錄課所藏

文明十七年八月四日

下知狀案

德政張行ノ一揆

（端裏書）
〔所々愚狀　文明十七八〕

一、爲德政張行、土一揆等蜂起事、風聞頻候、無□□堅可被加制禁之旨、被仰出候、此旨被相觸三院□□坂本四十郷等事、嚴重可被加御成敗□□□候、恐々謹言、

八月一日　　親□（元カ）

山門使節中月行事御坊

一、同前〜〜　社家進止之地所々事、堅可被加制禁□□、猶以爲被仰達巨細、早可有出京之旨、□□□

同日　　松尾社雜掌

一、同前〜〜　　賀茂社雜掌

一、同〜〜　御境內已下御成敗之地所々事、

同日　　大覺寺御門跡雜掌御房

近江ノ惡黨等進發ノ風說

幕府關城寺ヲシテ一揆ヲ成敗セシム

石山寺

一、同前近邊御寺領所々事、

鹿苑院出官御寮

（端裏書）
〔親元折帋　文明十七八朔〕

一、江州惡黨等、爲德政張行可進發□□頻風聞候、言語道斷次第候、大津已下寺邊所々輩、雖爲□□□可被處嚴科之旨、堅可被加御下知之由、被仰出候、猶以巨細爲□□達寺門、可有御參洛之由□□候、□（恐カ）□

親元

八月一日

園城寺雜掌御房

一、同前〜〜　寺邊進止所□□□

同日　　石山寺年行事御房

〔古文書〕三〇　內閣記錄課所藏

一、あつゝり狀事、一向無利平之儀者、預狀之段同編之間、先者不及德政之沙

利平ヲ頂戴スハ狀ニモ載ル借書ニノ準ハ絹布類質物ハ十二ケ月ハ武具類ハ十四ケ月

本物返

汰候、雖爲少分、以利平書加預狀候者、不依文章、可准借書候哉、

一絹布類質物事、十二ケ月（此外免置月、）不罷過者、不可爲流質之旨、度々御法候、

一武具類廿四ケ月（同前、）不過者、御法同前、

一惣別質物約月事、自他以内儀於承諾之儀者、非制限候歟、及御沙汰候者、不可任私一行文章候、宜依御法之旨候、

一來納分之事、無御法候、但於加利平者、可准借物候歟、

一本物返家之事、帶政所執事代證判候者、約月不可有相議（マヽ）候、

文明十七八月卅日　親元

安富新（元家）兵衛尉方へ

返事之案

〔古文書〕（十二月閣記錄課所藏）

○政所方事、新見三郎左衛門尉殿より尋承候書狀令披見候、去年八月卅日安富殿へ愚報ゑ條々注申候ハ、惣別當所御沙汰之趣覺悟候分ゑて候つる、去年德政事者、如御存知土一揆等不應御制止、任雅意致緩怠ゑる事候間、更不及御法之沙汰次第候、仍於去年德政之儀者、此方一向不令存知候、此旨具可有御返事候、恐々謹言、

八月□　文明十八　親元

三上越前守（貞光）御報

〔御湯殿上日記〕（○京都御所東山御文庫記錄甲二十六所收）

八月五日、○（中略）ゑうあん寺殿御あさりふつりうとてふとなる、四の時分ゑとくを廿のゐいさとのおとな廿をる、

九日、○（中略）けさゑの〳〵ゑよしさいちとて、やもと（安富元家）とゑ、ふんこ（多賀高忠）をむるとて、時のこゑきこゆる、三ゑうへゐけ入（よへより雨ふる、）て、各々むつりしくなる、

十二日、とくをいとて、世の中ひしめく、夜ゑ入て、いゑ〳〵のらんとうゑを

となゐ廿そう〳〵なり、下のりゑ火事あり、

十三日、々ふをとゑのこゑきこゆる、夜ゑ入て、猶〳〵ふつそうをひゑゝし、

十四日、々ふい猶とにとくをい行也、つちいつきおひゑゝしう行りへる、（ひる雨ふる、）

十五日、○（中略）ともしのおとおゐ廿おおし、

十六日、○（中略）中々ふをゐいさう、

十七日、○（中略）中々ふをゐいさう万いる、

保安寺宮宮中ニ御避難

多賀高忠等三吉某ヲ攻ム

十八日、○中略　こよひもひいさうのおとかせきこゆる、

〔後法興院政家記〕十　八月四日、壬申、自晩景雨下、昨今有德政之沙汰云々、
六日、甲申、晴、朝間霧降、大藏卿來、去夜一條邊號德政、處々令濫妨云々、非土一揆、
京都大名被官、諸侍、惡黨等企此事云々、
九日、丁亥、時々雨下、拂曉讃州（細川政之）被官人三吉宿所（江所）諸司代推寄揚時聲、兩度、依德
政張本被加誅伐云々、一色（義直）、細川（政元）勢各發向云々、雖然三吉讃州在所ニ自去夜
立籠云々、則軍勢直推寄處、德政張本人事非三吉一人、細川幷備中（細川勝久）守護被官
人等有之、各令生涯者（害下同ジ）、三吉事可致生涯之由、自讃州申間、軍勢各先退散云々、
重可伺時宜云々、
十一日、己丑、時々雨下、自去夜下邊又物忿云々、子剋許近所令濫妨云々、
十三日、辛卯、晴、去夜下邊兩所有火事、方々時聲頻也、處々燒籌云々、今日下邊惡
黨充滿云々、
十四日、壬辰、晴陰、晩景雨下、土一揆蜂起、處々土藏出質物云々、
十六日、甲午、晴、於處々土藏土一揆相戰云々、
廿五日、癸卯、晴、下邊又土一揆蜂起云々、

在京大名ノ德政ニ被官等ハ德政ト號シテ亂妨スル三吉某ハ德政張本一揆人ノ細川同勝久ノ被官ニ政元ノ德政ノ張本ノ人ノ細川ノ政元ノ本ノ人ノ政ノ張ノ土倉ノ質物ヲ出スト所々ノ土一揆ノ土倉ノ所物ヲ闘フ一揆下邊ヲ燒ク

〔十輪院內府記〕中　八月四日、○略　入夜有火、西方也、又揚時聲、
五日、○略　夜前火山（政豐）名犬場云々、入夜土一揆配合、所々揚鬪聲、
六日、○略　入夜又鬪諍、
七日、○略　土一揆、
九日、細川一色、所持（司）代等押寄近隣細川兵部（政之）少輔所、是被官三善（吉下同ジ）依爲土一揆
張本可召給之由、若（谷カ）令申事歟、然而稱逐電云々、無爲引退了、自所々訪來之內、
拾遺黃門（三條西實隆）青侍、諸大夫四五ヶ輩爲迎來了、尤芳情之至也、及晩以狀謝之、武田（國信）
與所司代有間云々、
十日、三善白畫徘徊世間云々、以光（竹內）任訪安東喪家、路次廣澤與三善參會、雜言
云々、及晩大府（勅修寺經茂）卿入來、
十三日、時正結願也、仍持齋、凡夜々所々揚時聲、至大小家懸取兵粮云々、公門
衆猶出之云々、於余茅屋者、隣兵部少輔屋形、仍不及狼藉也、德不孤歟、令祝著
了、
十四日、白畫土一揆等徘徊成群過大宮小路、當時猪曲（猪）無家、仍悉見之、希代見
物也、終土藏質物出之云々、自久我、以青侍被問物忿之儀、

山名政豐ノ犬場ヲ火ク　政元等政之ノ第ニ迫ル　高忠武田國信ト不和　三吉某等白畫徘徊　中院通秀第ハ狼藉ニ遇ハズ　希代ノ見物

十八日、樂林來語世事、凡當時爲體、每事不是非、

〔親長卿記〕十六　八月四日、雨下、近日土一揆可出現之由風聞之處、已今夜出現、方々徘徊、

七日、晴、夜々物忿、方々亂入、

十一日、晴、土一揆徘徊、及物忿之間、小酒肴分出之畢、續高(ヤヽ)如此云々、

十二日、同前物忿、

十三日、晴、町々置警固云々、

十四日、晴、今日土一揆二三千人出現、行向土藏云々、

十九日、晴、土一揆退散云々、

廿一日、晴、邊土々一揆、有德政之儀云々、

〔實隆公記〕八　八月十二日、庚寅、風雨、土一揆興盛、

十四日、壬辰、霽、〔略〕中　今日土一揆推寄、諸土倉質物等大略可出之由承伏云々、

十七日、乙未、晴、〔略〕中　入夜退出、近所可有火事之由雜說等在之、恐怖、但不可有別事云々、

〔親元日記〕八　八月八日、丙戌、

町々警固ヲ置ク

一揆退散

火事ノ雜說アリ

義政路次ノ劇ニ依リ其生母日野氏ニ臨マズ

義政ハ建仁寺集ニ賴リ固ヲ請フ

相國寺ハ兩寺ヲ警固シ人ナシ

建仁ハ國ヲ警固シテ伊勢ヲ鎭定シ

義政ハ貞宗ヲ一揆ヲ定セシヲ

三吉ハ白某政ヲ奔ル

三吉ハ白拈賊ム

一今日勝智院(日野重子)殿御正忌、爲御燒香御成事、依路次忿劇(土一揆蜂起云々、忌辰ノコト、本月八日ノ條ニ見ヱ、)無御成、(日野氏)

〔蔭涼軒日錄〕八月五日、〔略〕中　建仁寺住持幷評定衆五員來曰、就德政土一揆、以建仁寺可爲陳之風聞有之、然者寺家破滅之時至也、寺家警固事可達上聞由被白之、予曰、若東山忽劇東相府事、何人可致警固哉、無其仁體、爭及寺家之警固乎、評定衆曰、愈也、雖然縱無警固仁、爲後々被達台聽者可也、予曰、明日必可謁東府、以此旨達台聽云云、

六日、〔略〕中　齋罷謁東府、〔略〕中　又相國、建仁兩寺警固事白之、可被仰付仁體無之、雖然一揆蜂起停止之儀、可白伊勢守之旨有台命、予乃往汲古傳台命、

七日、不參、齋罷、遣悰子於建仁住持正宗和尙丈室云、一揆蜂起事、堅被仰付于伊勢守之台命傳之、同遣大昌(體澤)院訪忽劇事、

九日、終夜有雨、破曉諸軍勢圍三吉宅、三吉出奔、彼宅幷被官人屋盡破却、三吉奔竄在讚州第、諸軍勢將攻彼第、第主可誅三吉之旨有之、以故諸軍先退散云云、蓋三吉往年白拈賊也、與同土一揆爲大將之故如此、雖然彼三吉晩來却來、以所々往還、傍若無人體有之云云、

一揆再ビ蜂起ス

十一日、〇中略土一揆又自昨夜蜂起云云、

十二日、不參、依土一揆蜂起、御印四ケ、同御印籠等調阿方江返之、〇中略夜來土一揆於西門前致强訴者三番、

十三日、不參、就土一揆忿劇、往小補對話移剋、〇中略夜來土兵來于相國東門前、

一揆相國寺東門前ニ來ル

門前衆起趕掃之、寺家亦撞鐘集諸院之東西衆、以警固屬無爲耳、

十四日、〇中略午後細川九郎（政元）殿集土一揆於屋形前點檢之、點檢了、一揆衆相集于花御所跡者凡千人許、擧時聲、

政元ヲ點檢ス一揆

一揆花御所跡ニ集ル

十八日、不參、今晚四ケ郷土一揆皆退散云云、

一揆退散

廿一日、齋罷謁東府、就土一揆蜂起、寺家無爲之由白之、

集證寺家ニ害セザルヲ報ズ義政

〔東寺百合文書〕〇廿一日付山城一口方評定引付文明十七年乙巳

一爲所司代昨夕以公人兩使三郎左衛門、隼人、送申云、德政之事以外有沙汰、境內物

高忠東寺同寺ヲシテ百姓等ニ一揆ス

并寺家百性等一人モ有爲罷出□者、堅可被罪科旨、爲上意被仰出之由申了、御返事趣所司代方ヘ可申旨申了、卽披露之處、境內并諸庄薗ヘ可申遣之旨、諸奉行方ヘ於當座申間、聽下知了、所司代方ヘモ得心申旨、可有御返事旨治定了、

同四日、在所鎭守、

東寺堀ヲ掘ル

一自若衆中被申八條佛乘院北并不動堂南外堀之事、德政蜂起之前ニ可被堀之由、被申間披露候處、兩所之事大儀也、先八條堀事、自明日以境內之人夫可被堀之由衆儀了、（雖下同ジ）

同五日、以內談之儀立願寺之條々、

一揆ノ東寺ニ籠ルヲ避ケンガ爲メニ立願ス

今度就德政之沙汰、一起（揆）之衆不當寺籠者、

一於鎭守八幡宮千卷讀經各三ケ日、自九月十二日被果之了、

一不動堂落叉呪、各三ケ日、同日同之、

一於西院影前千反陀羅尼、各三ケ日、同日同之、

一一七ケ日之間、二十一座仁王經法供養法、自十一月十四日被果之了、

一一七ケ日之間、聖天灌油、自十一月十六日被果之了、

右立願條々如件、

文明十七年八月五日　當寺大衆敬白

同十一日、內談儀曰、

一揆亂入ニ依リ無爲ノ爲メ

以前雖有立願沙汰、旣一揆亂入之上者無力、但就德政之儀、寺家無爲無事爲今月十日亥刻

更ニ立願ス

因幡堂ニ陣ス

滿寺本意者、此立願五箇條可果申旨、重而所奉敬白如件、

文明十七年八月十二日　大衆敬白

後日記之、今月十五日未明一揆退散、其後ハ因幡堂執陣、十七日夜退散、

同十九日、

一就德政之儀、西院番之事自今日略之、北クキ貫(畫カ)盡計三人番衆可置、新在家西木戸同之、南大門先可被指之、夜廻之事一兩日之間ハ可被增之、此分衆儀治定了、

同廿二日、在所鎭守、佛乘院前

一自明日廿三日、八條木戸番衆先可被略之旨衆儀了、

同廿七日、在所湯屋、北

西岡一揆東寺ニ亂入ス

一去廿五日曉寅尅、雖西岡土一揆亂入、昨日廿六日、酉尅計退散了、然者寺內爲見知所司代子與一百人計來、見知後卽歸了、仍今朝以雜掌禮被仰了、彼返事披露了、

一今度就土一揆亂入、九郎次郎五十疋酒直分可被下旨衆儀了、

一土一揆退散事、東山殿ヘ雜掌以折帋注進之處、對馬(松田數秀)返事云、土一揆退散之由、御注進目出候、則此之旨可申入候、恐々謹言、

八月廿七日　數秀　判

一揆ノ大將東寺鎭守八幡ノ廊ニ宿陣ス

東寺放生會延引

〔東寺百合文書〕○け　鎭守八幡宮供僧評定引付　文明十七年巳

一去廿四日夜土一揆重蜂起之時、大將之輩當社御廊ニ令宿陣之間、退散之後、廿七日洗淨、則御子ニ可令祓沙汰云々、又爲淨於社頭、來晦日可有千卷讀經之由、衆儀治定畢、

同廿七日、

〔東寺執行日記〕十五

同十六日、京衆ナリ、雖退參仕候、依之廿八日定處一揆寺中ニ入衆、西ノ岡ノ者共ト申、此衆廿六日夕部ニ土一揆衆寺中ヲ退參之由、多賀豐後守、所司代高忠方寺家ヨリ注進之、其後夜入豐後守子息者、小人數一、二百人計ニテ、大門ヨリ入テ一見之由候、申不入候、三綱衆ノ內、備後寺主ニテ如注進申候、一揆ハ一人モナシ申間、軈々所司代ヽヽ參仕也、

一揆ノ數千五百人

〔蔗軒日錄〕地

一揆阡于東寺、京中忿劇、一揆千五百人云々、

八月十四、陰、董往於正覺、爲吉浦領京師鶚首座下人至云、土十五、赴祝聖、會合十人至告曰、泉將亂、告之康氏止足卒之暴可也、余乃領焉、

十六、董自河北歸、浪者出于泉州致道、
十七、不思食蔭□自高埜歸、夜間託道具于本居士、以泉之忿劇也、夜間心地不快、
十八、不食、依忿劇止懺法、
廿四、福憲首座至、話及京師德政忿劇事、董侍者與濱知客伴而避艱難、與計而至、可喜、

〔法隆寺文書〕一　○大和

追而申上候、
此御返事高安之茶屋まて可被下候、
就今度國炎干之儀、百姓等悉以かんにん一向ゑ難叶候之間、南都幷官符之御方へ御德政之事、色々歎申上候、萬一無德政之御儀候者、百姓等悉以不可有正體候、然者來年之耕作已下まて一圓可相捨候、併以御慈悲之御儀、早々御德政被行候者、各へ可忝畏存候由、可然之樣於寺家御披露可畏存候、恐惶謹言、

七月卅日　　大和惣國百姓等上

炎干ニ依リ大和ノ百姓等德政ニヲ法隆寺ニ請フ

法隆寺公文代御坊
中院へ參

尙々、今朝も土一揆之中へ拙者罷出候て、種々申延候、如仰今度一國馬借等令峰(蜂)起、南都へ取向候、然處馬借之儀迄もなく南都を可打破ゑと造意仕候間、餘こ無勿體存候て、古市殿申合、今日迄者無殊儀候、當國馬借其外河州、城州馬借打出候、旁以外造意を仕候、其方之御儀も南都次こ御沙汰可有之由候、御寺家及破候ハぬ樣こ御調法肝要候、當年以外日魃之事候間、德政之儀やられ候之條可目出度候、於自然儀者、不可存疎略之儀、恐惶謹言、

八月十日　　榮綱(花押)

法隆寺公文代御坊　御報

追而申候、
爰許靜謐候者、矢錢之事者可致調法候、何方より申候共、大將本へ申合

矢錢

馬借蜂起ニ奈良ニ向フ

山城河內等ノ馬借

幕府法隆寺ニ警戒ヲ命ズ

堤榮綱法隆寺ニ德政令ヲ布カンコトヲ勸ム

一揆奈良ヲ火ク

せ可有御返事候、
急度令申候、仍一揆奈良口ゟ既取懸候而、被放(致カ)火候、如今候者、即時可及滅亡候、付其貴寺之御事一大事候、所詮於于今者、早々無爲之御調法可目出候、札を被打候者、静謐之基与愚存候由、可預御披露候、恐々謹言、

八月十二日　　堤左京亮榮綱(花押)

法隆寺
公文代御坊

馬借成敗ノ爲メ粉井某奈良ニ赴ク矢銭ヲ馬借ニ課ス

就馬借之儀委細蒙仰候、心得存候、奈良邊之様言語道斷曲事ゟて候、但粉井成敗ゟ罷上由申候間、定而可被落居候儀ト存候、御寺之御事矢銭懸馬借候、任涯(我意カ)候由承候、曲事ゟて候、さ様之儀可然成敗候由申候て、古市(畿内)殿と申合、下右馬允被上候、于今不罷下候、此方之於被官者、堅可申付候由、彈正忠(越智家榮)申候、如此候間、此方之若衆と申候て、馬借ゟ出候事有間敷候、恐惶謹言、

八月十三日　　數遠(花押)

法隆寺

榮綱馬借ノ成敗ヲ法隆寺ニ告グ

法隆寺公文代御坊

御札委細拜見仕候、就德政成敗儀、御懇御椎兩種送給候、賞翫無比類候、於向後御寺領分、此方馬借等自然緩怠儀候者蒙仰、尚以可致成敗候、彼題目以可有寺家御披露候、目出恐々謹言

八月十六日　　堤左京亮榮綱(花押)

法隆寺公文御房　御報

法隆寺德政札ヲ掲グ

(表書)

法隆寺公文代　御坊　　堤左京亮榮綱

就今度德政之儀、札被打候への由、令申候處、則札被打候之間、先以目出度存候、仍矢錢之儀之事、種々致調法候、雖然方々多候、左様方を調法候之間、いろゝて候由申候、子細甘澤可申候、恐々謹言、

八月廿七日　　榮綱(花押)

法隆寺公文代御坊

〔大乘院寺社雜事記〕九十九　八月二日、雨下、

一布留郷道、法花寺道以下物忩、甲乙人不通馬借歟、不得其意、珍事〳〵、（一揆等大和布留郷道等ヲ塞ギ馬借ヲ通サズ）

三日、雨下、

一馬借事西脇秋篠者以下罷出云々、以外不可然之由及其沙汰、自寺門可問答云々、定而申遣歟、

十一日、

一權預祐松、安居師英照得業來、寺訴事未定、德政事色々及其沙汰云々、

一尊藝律師方遣使者仰事在之、其次申寺門、無物珍事、奈良反錢事ハ舊借下ニ可引給之云々、近日德政沙汰、借下事不叶、德政事於于今者、云六方、云學侶、無一定、有德體、少々自身評定計也、神水集會事、於六方不可沙汰云々、先日用水事ニ嚴守、神水一切不立用上者、每事神事學侶集會不可然旨、六方申之、

十二日、大風、大雨、

一京都德政事以外也、馬借共閉籠テ東寺口々自今日可止之云々、見吉、物部（奏六カ）（三）

（馬借東寺ノ口々ヲ塞グ）

以下張本云々、希有事也、一天下珍事云々、

十三日、

一馬借入夜而寄來、於三條口邊、上時聲畢、自今日路次共止之云々、（三條口邊ヲ襲ヒ喊ヲ揚グ）

十四日、

一馬借共入夜上時聲、南口云々、苅田等用歟云々、

十五日、

一夜馬借寄來、西未申上時聲、學侶集會每日有之、集儀（議）不一途、所存相分也、每度及口論云々、（興福寺學侶集會）

一月見一獻御後見調進、世間無正體之間如形、

十六日、

一夜馬借寄來三條口云々、今日寺門評定色々有之、六方之內申歟、子細云々、田舍道共止之、

十七日、

一夜馬借共井上南大門邊ニ亂入、貝塚口門戸平取之云々、所々放火云々、無殊事、（馬借井上南大門邊ニ亂入ス）